
ゼロの使い魔～ある獣の話～

クヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜ある獣の話〜

【Nコード】

N1177Q

【作者名】

クヤ

【あらすじ】

気がつけば電腦獣……。やりたいように生きていこうとおもった。

いじつたりとか、いじめたりとか、デストロイとか……。まあいろいろと。

オリ主最強系です。原作介入はほどほどにするかもしれないし、しないかもしれません。ひたすらにその時のノリであと先は考えていません。よろしければお読みください。

プロローグ（前書き）

あらずじにも書きましたが更新不定期&オリ主最強系です。それでもいい方以外はご遠慮ください。

あと、作者はとても打たれ弱いです。心ない言葉にとっても弱いです。ご了承ください。

ブローグ

俺は目覚めた・・・いや、意識が宿ったと言ったほうがいいのかもしれない。

気がつくとも身体は動かず、呼吸すらしていない、ものを言うこともない身だった。

何かしらの鉱物らしい。

しかし、鉱物に意思はあるのだろうか？という新たな疑問が生まれた。

精神論者ならあるというのかもしれないし現にここにあるが、そうだとしてここまでではつきりとした思考が可能なのだろうか？疑問はつきない。

つと、長々とよくわからないことをいったがどうやら、転生というものをしたらしかった。

さて、自己紹介をしようか。

俺は、元人間だと思っている鉱物Aだ。現状自分の確認ができないため今の形やどんなものなのかは神ならぬ我が身には知るよしもない。それが今の俺だ。

人間であったころは日本から海外の大学へ飛び級して卒業した14歳だ。

凄まじいだろ？ハツ凡人とは違うのだよ。なに？口調が年寄りくさ

い？放っておけ！同年齢の人間と接する機会が少なかったのだから仕方ないだろう？

ともかく、そんなスーパー14歳をしていたわけだが何故か大学を出たというのに中学校に通わされそうになり全力の抵抗の結果、親の口座で株トレして生活費を稼ぐネオニートになった。

もともとわざわざ海外に行ったのだったって小学校6年、中学校3年、高校3年、大学3年の計15年とかやってられるか！という理由だったからな。

まったく、日本も飛び級取り入るという話だ。そんなのだから優秀な人材が外に出ていってしまう悪循環に陥るといふんだ。

個人的な批判は置いておいてそんな感じで生活して3ヶ月ほどしたころだったか貯蓄は半端なくあり、余裕を持って新しい生活に慣れ始めた頃にまあなんだ倒れた。

最初はただの過労とかかと思われたのだが、世界は天才というものに厳しいようで・・・いつ死ぬかも分からないすぐに入院しろという事になった。

医者 의견 なら 聞く 気が なかった が ！

まあそんなわけで医者を無視してどうせ死ぬならでかいことしようと思っ て か ね て からの 研究 で あ っ た 愉快 型 人工 知 能 「 L i p p l e 」 の 完 成 を 目 指 し 開 発 に 着 手 し た 。

結局のところ一応完成といえなくもないレベルには昇華させることができた。自分の才能が若干恐ろしい。

だがしかし、俺には少しばかり時間が足りなかったらしい・・・できたのは俺の娘とも言える赤子のような感情をしない素体。

後は少しずつ感情を学習させて、独り立ちのために野に放てば安心して逝けたのだが・・・その前に身体が限界を迎えたらしい、そこから先の記憶はない。

あの時点では愉快型という当初の目的通りにはいかないだろう。だが、あれは俺の娘でもある願わくはあの子に幸あれ。そしてできれば優しい子に成長してほしい。

プロローグ（後書き）

駄文ですがお付き合いくださってありがとうございます。

あとこのゼロの使い魔 導きの牙に影響を受けて書きだしたので
ちよつと設定が似ることがあるかもしれませんがその小説の作者さ
ん読んでみて気に入らねえ俺のパクリじゃねえかとお思になるよ
うでしたら仰ってくださいすかさず消去あるいは改稿します。

鉱物の終わり

俺が鉱物となつてから数年の月日が経ち、いくつか新たに分かったことがあつた。

どうにもこの身は神仏であるらしい。

何故そのようなことが分かったかというとお祈りをしている声が聞こえるからだ。

目は見えないくせに、音は聞こえる、果てしなく謎だ。

一体何の機関を使用して音を認識しているのだから。そう、その聞こえるということも新たに分かったことだ。

そしてこの神仏、人気がないのか最近では一人しかお参りにこない。あまり騒がしいのは好きではないので俺としては文句はないのだが、鉱物になつたせいかなり寂しさや退屈というものは感じにくくなっているように思う。

さすがにこんなに一人でつまらない暗闇のなかにも何も感じないほど人否人ではなかったと・・・自分では思う。

そして、この唯一やってくる（声の感じからして）女が勝手にしゃべって今日あつたことを報告してくるのだが、中々いい暇つぶしになる。

ただ、信心深いのか友達がいなかったのかとか話を聞く限りでは問題がないのに両方の意味で不安になる。

そうそう、そして女の話によるとどうやらこの世界と言っているのから分かるが、それは俺の知るものとずいぶん違うらしい。俺は、トルルや竜などかつては創造の中にしかいなかった生き物がいる。

曰く、未だに貴族や王族といった特権階級がはびこっている。

曰く、魔法がある。

曰く、文明レベルが中世程度。

曰く、エルフは敵。

曰く、識字率が低い。

曰く、エトセトラ、エトセトラ・・・。

自分の知らない情報が手に入る女の話は貴重だった。

だがしかし、知れば知るほど新しいことが知りたいと欲が出るようになってきた。

人の身でなくなっても、欲がなくならないとは世界とはままたらな
いものである。

そもそも、恐らく死んだのであろうこの俺が生物でないとはいえ意
識を持つてここに在る時点でままたらない物であることは明白では
あるが。

女はほとんど毎日来た。たまに供え物も持ってきていたようだがこ
の身では食えることかなわず腐る前に回収されていった。
まったくままならんものだ。聞くことしかできない身とは。

しかしこの女、毎日のように来る割にこの神仏？な俺に願うことと
いったら明日がいい天気になるようにとか、好物が夕食に出ますよ
うにとかお前、何しに来ているんだ？といったことしか願わない。

こういった願い事をする奴はよほどの善人が偏見かもしれんが、ど
んなに祈っても願いがかなわないことを悟ってしまつて心のどこか
が壊れてしまつたやつに多いと思う。

かなわないことは知っている。でも祈りたい、願いたい、すがりた
い。

そんな意識を感じてしまう。被害妄想だろうか？俺はそうは思わん
が。

そうしてこの退屈ではあるものの、落ち着いた考えるだけなら好き
なだけしていても腹すら減らないという割り切つてしまえば素晴ら
しい環境で何事もなく終わると思つていたある日の事だった・・・。
その一日はこんな風に始まった。

いつも通り思考することしかできないこの身でのほほんと過ごして
いた俺だった。

（ん？今日はやけに騒がしいな？）

いつもに比べ、周囲が騒がしくこのときの俺は祭りでもあるのかと
考えていた。

分らないことはあ聞いてみるに限る。

長年の鉦物生活によって遠くの音を聞き取る技能を身に付けた俺は
どうやっているのかはさっぱり分からないが、周囲の音に耳？を凝
らす。

「きゃー！！」

「やめろー！？」

「逃げるんだ！！」

など聞こえてくる。ふむ、ずいぶん野蛮な祭りもあったものだ。

↑まだ、祭りだと思っている。

（しかし、こんな野蛮な祭りがこの時期にあった記憶はないのだが
な？）↑怪しみだした。

もう少し聞いてみるかと決めもつとよく耳を凝らす。

誰かが走り回る音。何かを振り回す音。そして・・・肉が裂け血飛
沫が舞う音。誰かの笑い声・・・。

（って！？、山賊か何かか？）↑ようやく異変に気づく。

まあ、この動くことすらかなわない身では何をどうするという選択
肢すら生まれることはないが。

少々気分が悪くなるだけで、自分には何も起きないのだから甘んじ
て受け入れよう。

そんなことを考えて静観の態度でいることを決めた時だった。

「ケモノ様っ！助けてください！！村が！村が！」

いつもの女が荒い息を吐きながらやってきた。

（いや、ムリだから鉦物にそんな事頼まんでくれ）

なんとかできるものならしてやらんこともないが、動くことはおろ
か声を出すこともできない。

女はどうやらこの身にすがり、泣きついているようだがどうしろと
いうのだろうか？

どの道なにかすることはできないので、何もしないということに変

わりはないのだが。

そうして、女が喚いていたからだろうか・・・山賊がこのおそらく祠っぽい何かにやってきた。

声をあげず息をひそめて隠れていればよかった物を・・・その程度であればこの身にも使い道があったであろうに。

「へっへへ、嬢ちゃんだめじゃないかちゃんと村にいないと・・・」
山賊はいやらしい笑みを浮かべ嬢ちゃんと呼んだこの女を見ているのだろう。

「ひっ」

女は、恐怖のあまり声を上げることすらできないようだ。

まあ、無理もない山賊の声の方から聞こえるなにかを伝って液体が地面に落ちる音、おそらく返り血を浴びているのだろう姿を荒事に縁のない村人Aが見たのだから。

山賊は、ゆつくりと足音を響かせこちらにやってくる。

女はいいやいやをするように髪の毛を振り乱しているようだ。

「っゝかまゝえた」

がしつと何かをつかみ山賊はそういった。不快なのでせめて俺から離れたところに行ってくれないだろうか。

「イヤー！！誰かつ！誰かつ！」

うるさいな、仕方ない。次にケモノ様と呼んだら一応この身に可能な限り善処してやろう。

「ケモノ様っ！お助けください！！イヤー！！」

ちっ呼びやがったよこの女、しかも思つて速攻。

こっちの思考聞こえてるんじゃないかな？

まあいい、言ったことは守ろう。あくまで善処であって助かるとは限らんがな！

さて、外野はうるさいが意識を集中させろ・・・ここを静めろ、成せばなるっ！！

そうして俺からよくわからない何かが出て、その辺に転がっていた石をつかんだ！

そいつを思いっきり山賊めがけて射出する！！

ガツというなにかに当たった音と共に苦痛によってか「グッイツ」と声上がる。

このよく分らないなにかを操るのは大変疲れる。少し前から身の内によくわからない物を感じなんだかコントロールできそうなのでやってみたら第三の手的な、なにか触覚を持っていないもないなにかになりもうちょっとうまくなったら女にいたづらしてやろうと思っていたのだが、そのちよつとずつ練習に使ってた石も範囲外に飛んでいってしまったようだし善処はした。

これでもう真正銘何もできん。さらば俺の暇つぶしっ。

「えっケモノ様？」

女は泣き叫ぶのをやめて呆然としているようだ。いきなりサイコキネシスよろしく誰もいないところから石が飛んできたらそうなるよなうんうん。

重ねて言うが俺はもう何もできんあの投擲術、相当至近距離に投げるものないといけないし最初で最後の弾丸はすでに射出してお亡くなりになった。

ということここで逃げだして、なおかつ逃げきれないと女に未来はないというのが分かったうえで女よ、逃げないと死ぬぞ？と音は出ないので思う俺。

「クソが！誰がやりやがった！」

おお、なんということでしょう俺の暇つぶしの犠牲によって生まれたわずかな時間が山賊の回復によって終了しました。

哀れ女、謎の攻撃のせいで対応がさらに乱暴になると思うが頑張ってくれ。

「クソっ誰もいねえじゃねえか！ざけんじゃねえ！！」

いらついた山賊は女に向かってなにかを振り下ろす。

「よけんじゃねえよ！！」

意外や意外、女が機敏な動作で男の攻撃をよけた！

「ケモノ様、ケモノ様、お助けください・・・」

女は・・・ちよっもうほんとに手札切れだから後ろに回っても何もないから隠れてないで逃げんさい。大丈夫さっきの避けスキルならきつと逃げられる！ガンバっ！

「隠れてんじゃねえよ！！！」

なんか、一際強く振り下ろされる何かがあるの方向に向かってくる。

（鉱物って碎かれると意識どうなるんだろ）

走馬灯のような回想に入りだした俺に山賊の金属製つばい何かがついに到達する。

ガッキインという音が鳴り響き、あれ俺割れなかった？と思ったのもつかの間ミキッという音が俺という鉱物に走る。

・・・俺終わったな。短い無機物生だった。

獣の始まり

ミキッと全身に亀裂が走る音がする。

そして亀裂が入った個所からぼろぼろと……外殻が剥がれおちた。

あゝ、あれ？

目が見える・・・体が動く・・・。

違和感は体にまわりついているが・・・ああこれ外身か、俺は濡れた犬のようにぶるぶると体を振り周りについている石をこそぎ落とす。

ああ、すつきりした。

とりあえず・・・。

「ガアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

(俺は帰ってきた!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

さすがに、獣型では会話はできらしいな。叫んだら雄たけびだった。

少し視線を下に降ろすとそこにはややメタリックに過ぎる前足が・

（まあ、いい。今は体の確認は後に回して目の前のクズを狩るか）
 そうしてようやくクズの方を見ると・・・

「おまえなんだよ！なんなんだよ！！」

とめちやくちや腰の引けた様子でまくし立ててきた。

山賊のくせに覚悟が足りん！こっちは学生だというのに小旅行に行った時には旅行先が紛争地帯になって生き残るために銃とナイフを持ち、ひたすらに怯えながらも戦ったことがあるというのに無法者のくせにまったく情けない。

(とつとと逝け!!)

俺は前足についた鋭い爪を奴ののど元にぶち当て貫く。

一瞬で絶命した。クズには目もくれず村に居るという残りを殲滅し

に俺は走った。

なにか、後ろの方で驚愕している小娘がいたが気にせんでよかろう。村に着くと、山賊どもが略奪をしていた。女は取り押さえられ男はほとんどが虫の息。

祠から意外と近かったはじめてみる村はかつて女の語った様子とは違い、火の粉が舞い悲鳴が鳴り響き穏やかさの名残もなかった。

（やれやれ、数年ぶりに見る景色が最初はクズなおっさんで次がこれかやはり世界はままならんな）そして俺は、山賊どもをしとめるために動き出す。

思いのほか四足歩行の獣の体は馴染んだ。爪を振るえば引き裂かれ牙を突き刺せば大概の物はちぎれ飛んだ。

自由に動く喜びとクズへの怒りで気分はかつてないほどに高揚していた。

俺に気付いた盗賊どもが一斉にかかってくる。逃げる者はいない。

（祠のクズよりは、マシなクズのようだ。俺を楽しませろ！！）

一人また一人と命を奪い、体を血色に染めていく。

かかる血は気持ち悪いがより強い興奮を引き出していく。

思考が加速する。世界がどんどんと早くなっていく。

その思考にこの肉体は付いてくる！

すごい！すごい！まだいける！もっと早く、さらに早く！！

山賊も人数が減ってくると俺がやばいと気付いたのか逃げ出すものが出始めた。

そして俺は背中を見せたものから獣特有の瞬発力で仕留めていく。山賊どもも逃げたいというのなら仲間の屍、そしてこの俺を越えていけ！！

我が爪は今宵血に飢えておる容易く越えられると思うなよ？

そうして俺は殺した。徹底的にあるいは一撃で殺した。

殲滅ただそれをなすために俺は狂ったように殺戮を続けた。

そうしてどれほどだったろうか・・・10分だった気もするし1時間以上かかったような気もする。

すべての山賊を駆逐した俺は久しぶりに感じる自由になる体を実感していた。

そんなことをしていると隠れていたのか村の様子をうかがいに戻ってきたのか遠くの方に村人たちと思しき影が見える。

その表情には安堵ととても強い恐怖の感情が彩られているように見える。

それも当然か、圧倒的力をもった血まみれの獣これを他にどう見ろというのか。俺は皮肉気に表情をゆがめると一つ息をつき村に背を向けた。

そのとき、

「その、えっと！ありがとうケモノ様！！」

とあの女の声が聞こえ振り向くと刺激するんじゃないと周りの人間に取り押さえられていた。なかなかに笑いを誘う光景だ。俺は苦笑して今度こそ村を後にした。

俺の体（前書き）

次話投稿です。一目目にしてお気に入り登録が6件もあったことに驚きました。ありがとうございます。

今回は体のチエックようやくあることが分かりました。原作欄の面目躍如です。

俺の体

村を出た俺は、二足歩行ではないというのに俺によくなじむ不思議な体で駆けていた。

（凄まじい・・・一体時速何キロだ、これは？）

風が凄まじい勢いで体に当たり、体に着いた鉄くさい液体たちは剥がれおちるか乾燥して吹き飛んでいった。

本当にこれは何キロ出ているのだろうか？F1を見たことはないがそれくらい出ているのではないだろうか？

しばらく走り続けると水の匂いがした気がした。

水の匂いとか気のせいだか思っていたがどうにもほんとうらしい。人だった頃には都市伝説に近いものだと思っていた。

（いや、俺が街中から外にろくに出なかつたからかもしれないな・・・）

それでもこの体は、以前の人の身であつたころよりもあらゆる意味でスペックが上らしい。

血が落ちたとはいえ、体にはまだ不快感と鉄錆のようなにおいがまといついていた俺はその川か何かかはしらないが、そこを目指すことにした。

よくよく考えてみれば自分の姿すらまだ知らなかつたから丁度いいタイミングといえた。

やたらと人工物の気配のしない、現代日本では山に行けというレベルの森の中を進むこと数分ついに目的地に到達した。

途中で見かける前に動物たちが去っていく気配を感じた。

気配探知スキルも標準装備らしい。便利なものである。

それにしても草食の動物は分かるが血の匂いをこれだけさせて肉食の動物がやってこないとはどういうことだ？

まあ、やってこないに越したことはないのでもいい加減この匂いを落としたと思う。

いまさらだが俺がやってきたのはどこかの世界のどこかの森のふつうの定義は分からないが俺の思う普通の小川だ。

とりあえず川ならば水面を濁して自分の姿の確認がしづらくなるということはないので先に体を洗うことにする。

小川はあまり深さはなく熱くたぎった体を沈めるのにちょうどよかった。

しかし、俺は此处で新たな問題に直面した。

（上と側面が自分では洗えない！）

血はほとんどが吹き飛んでしまっていたのであまり擦らずともよかつたのだがいかんせん四足歩行生物、手が使えない。

意外と便利な体だと思っていただけにこの不便さは非常に悲しい。仕方がないのでごろごろと川で転がって誤魔化すことにした。

水面が濁るがまあ仕方ないので気にしないようにしよう。

バシャバシャと転がっていると、何が楽しいのか分からないが楽しくなってきたのでなぜか結構な時間水浴びしてしまった。

習性まで獣のようになっていないかな？と、若干不安になりながら我に返った俺はいい加減小川から出た。

そうしてようやく体の確認をするために遊び過ぎて濁りきってしまった水面を避け少し上流へと向かった。

やはり川であつて助かった。少し進めば澄んだ水に戻ったのだから遊んでいる間に幾分か時間がたっていたらしく水面には綺麗な満月が浮かんでいた。

ドキドキしながら水面に近付くと・・・。

「があがあ？」

（訳：なんぞこれ？）

驚きのあまりなにか間抜けな感じの声が出てしまったがこれは仕方ないだろう。

何せ鉱物だと思っていいたら生き物のようで、今見てみると・・・その・・・なんというか・・・電脳獣？

色は白く、気付いていなかったことが恥ずかしいが翼も生えている。

そして全体が金属のような光沢を備えている。

見たことがないと思ったが、アニメ版のロックマンエグゼに出てくるロックマンの白い獣化スタイルを電脳獣にした感じというか・・・白いグレイガにファルザーの翼をつけただけというかまさにそんな感じであつた。

実体化しているようではあるが、これは一応電子生命体ということではないのだろうか？そもそもこの世界には電脳世界自体がないと思うが。

ん？なんでアニメやゲームの話を何故知っているか、とな？いいじゃないか！JAPANのカルチャーは世界一だぞ！？ロックマンエグゼから入ってクロス作品は一通りやった。

しかし、カッコイイとは思わなくはないが、これでは街に行くこともできないではないか。

とりあえず翼に外れてほしいのだが・・・とそんなことを考えていた時だった。

翼がブロック状のキューブに包まれて消えてしまった！！

電子でできている空間ならばまだ理解できなくはないが・・・ここは現実の空間だと思うのだが・・・一体どこに格納されたのだ？

そもそも、もう一度出せるのだろうか？

結論から言うと大丈夫だった。

パーキユウーンという音と共に翼は戻りこれで果たして飛ぶことはできるのだろうかという疑念が出てきたが、少し浮いてみたが翼は全く動かなかつたのでブースターの何かだと思うことにした。そしてこれが一番の収穫だが全パーツ脱着可らしい。

こんな自然じゃない体でどうしようかと思ったがなんとなくあったようだ。

すべてのパーツを外すと見た目は白い狼になった。

ただ、目だけはどうにもならず・・・まぶたを落とせるし、丸みを帯びてはいるが材質がガラスっぽい。

まあ、少しいかついだけの狼だと思えばいい。

生き物であると確認できた時は心底安心した。また無機物になりた
いとはとても思えん。
それにしても、なかなか面白い。しばらくは体の確認をするだけ
で暇をつぶせそうだ。

スペック・・・おk把握（前書き）

ようやく主人公のスペックについての説明が終わりました。
やっと話が進む・・・次から。

スペック・・・おk把握

あれから、いろいろと遊んで・・・もとい、試していたがこの体はいささか万能に過ぎるらしかった。

これからはこの体で過ごしていかなければならない以上、万能で困ることはない。

全てではないが少し機能についてを説明しよう。

まず、一番目を引くのが巨大化機能。

一体どう使えというのか阿呆みたいに大きくなった。

だがこれは、装甲を着用していないとできない。

どうにも最小状態の俺をコアとして装甲のサイズが大きくなっていくだけのようだ。

感覚的には通常状態とたいして差はないのだが、ロボと感覚をリンクさせる何かと想着てもらうと解りやすいかと思う。

そう、感覚といえば装甲にもキチンと触覚と痛覚があるらしい。

素の状態でも防御力の高い俺は、装甲を着けるとかなりのアレになるが・・・痛いものは痛いらしい。

それでも、大分軽減されていると思うが。

後は・・・そう、獣化ならぬ人化できないのかと思ったのだが、いともあっさりとできた。

もつとも、かなり疲れるのであまりしたいとは思えないけどな。

人の体に未練がないのかと言われれば、非常にあると答えるが・・・如何せん解いたときに睡眠が必要になるようでは使えん。

だが、疲れないようになるかは分らんが訓練だけはしようかと思う。

そして、これが万能と称した理由となるのだが、どうにもどこかの電子の神のようにある程度のものの分解吸収と再構成が可能らしい。もつとも結構なエネルギーをこれも使うようで多用はできない上に、対象に抵抗されてもできないと縛りは存外多かったが。

あと、何故かバトルチップが使える。

ものは試しとふざけてやってみたら・・・使えてしまった。

使用すると装甲と融合するか、物質化するか、ウイルスとして使役が可能でちよつと力を込めると獣化ウイルスとなった。

これは、ストレージしているところから取り出しているのかエネルギーをほとんど使わずに使用できる。

アビリティもセッ卜できた。

実は翼を消すと飛ぶことができないという驚愕の事実が存在したが、エアシューズを着けるとその状態でも飛べるらしい。

他にもグレイガとファルザーの攻撃を使うことができた。

ファルザーのものについては、翼装備時というしほりがありはしたが。

と、機能としてはこんなところだがインチキとしか思えん。

そして、巨大化本当に何に使えと？

さらにこの体、そういえばと思い、食事を取ってみたのだが普通に食えることができた。

生物体であつて欲しかったのでよかった。

本当によかつた。

ただ、光合成でもいいわ、鉱物の分解吸収でもいいわ、雷雲の中が一番いいという・・・これは本当に生き物と言つていいのだろうか？いや、生き物だと本人が思っているのだから生き物に違いない。

ただ、食物は嗜好品に成り下がつた・・・。

飢えなくていいんだけどな。

種族：電腦獸のような何か

名前：まだない

昔の名前：忘れた

能力：巨大化

人化

装甲脱着

分解吸収

物質の再構成

アビリティー装備

バトルチップ使用

ウイルス使役

ウイルス獣化

性格：唯我独尊。俺様美学。悪い人ではない。だがわりと薄情者。礼には無礼を無礼にはイジメを。懐き難いが懐くとワンコ気質（誰かに懐いたことがないので自覚なし）。電脳獣になり興奮しやすくなった。

カラー：通常時白狼カラー

装甲時グレイガカラー

装甲翼時ホワイトカラー

ある獣の日常（前書き）

タグが残酷な描写ありなのに、とてもほのぼのしているこの小説がどこに行きたいのか本当にわからない。

そして次から進むと言っておきながらまったく進んでいません。すみません。

ある獣の日常

・・・よく考えてみたら、獣の時の手ってすごい不便じゃないか？指というか爪、個別に動かすのがとてつもなくムズイ。

だが、世の中には不可能なんて言葉はそうそうないらしい。

毎日努力していたらなんと爪でリンゴのような木の實の皮がむけるようになった。

次の目標は蔓で作る編み物だ。

手に入れた食料とかを入れて置くにも便利だしな。

まあ、分解吸収の分解で止めておくところかに保存されているらしく、その時の状態で取りだすことができてしまうから必要か？と言われたらそうでもないと答える程度にはいらないのだが。

というわけでさっそく取り掛かっているものの爪で切れてしまう・・・。

力加減が難しい・・・それはリンゴの皮むきでマスターしたと思っていたのだが、まだまだ熟練度が足りないらしい。

だが俺は負けない！

必ずや蔓で編んだバッグを作って見せる！

ふと我に帰ると巨大化していなくとも大型犬程度のサイズはゆうにある獣が、何をやっているのだろうとは思うが食事をする必要がないということはそのために労力を割かなくていいということであって、一日暇になってしまうのだ。

だからこうして、いらないことを玄人の域にまで極める作業が最近の日常になっている。

この体を使って本気の狩りなどしようものなら一日にしてこの森の中にいる生物のすべてを狩ってしまうことだろう。

さすがにそれはどうかと思う上に嗜好品たちがいなくなっても困るので、こうして自重しているわけである。

ただ、皮むきの練習でこの辺りの木の實はあらかた取ってしまった

上に、蔓も現在進行形で消費しているが、生態系的にはそのあたり大丈夫なのだろうか？

木の実を取るような生き物にはきつと草が食べられると信じることにして気にしないことにする。

そもそも、生態系がどうのというにはこの身が存在している時点ですべての生き物的にアレなので・・・と思ったが、そう考えると食事が必要ないことは生態系的には正しいのか？

外敵がまずいないであろうこの体、軽く生態系の頂点に君臨している気がするがそうしてバランスがとられているのか？

だが、世界には楽しみみのために生き物を殺すような人間のような種族も存在しているわけで・・・。

ああっ！分からね！というかなんでこんなくだらないことを真面目に考えているんだ俺は！

それもこれものほほんとしすぎているのが悪い。

そう結論付けることにする。

あれこれ考えていても不毛だ。

・・・いつそのことどこか適当な国に喧嘩売るか？

装甲つけて人里降りれば勝手に討伐隊とか組んでくれそうではあるし、というかこの間この森にきて悲鳴上げていった人間・・・そんなあほなことしないよな？

言っではみたがそれはひどく面倒そうであるし。

（くっまた切れた。）

そんなこんな言いながらも手は相変わらず動いていたのだがまたしても半分いくこともなく切れてしまった。

しかし、この光景を第三者が見たら大変シニールであること請け合いです。

もともとインドア派であつた俺は、こういう作業が嫌いではないが見た目も気にしたいお年頃でもある。

もつとも世俗から離れたくなったら雷雲の中に住めばいいというお得な体であるわけだが・・・それもありだな。

最終的にはその方向で行くのもいいかもしれない。
今日も今日とて内職業は続く・・・。

旅立ちと敗北（前書き）

自分でもよくわからない方向へ突っ走っています。

どうしたいんだろう自分。

感想の制限なくしました。よかったら書き込んでやってください。

旅立ちと敗北

さて、本格的にニートになりそうだったので森を出てその辺をうろつくことにした。

かつてはネオニートなどというものをやっていた俺ではあったが、就業意欲はなくてもない。

14歳という縛りがあったからこそ、そのようなことをしていたのであってやりたいからやっていたわけではない。

だがまたしても、獣という縛りで就業はできない。

森でごろごろしているようでは、ダメ人間・・・いや、ダメ獣ではないか！

しかも森なら普通の生き物は外敵におびえなければならぬところを俺はむしろ服従の姿勢を見せられて、貢ぎ物さえ来る始末。

ニートならまだ我慢できた、がっ。これではヒモではないかつ！！いろいろなと気まずくなり、森を出て旅に出ることにしたのだ。

・・・追い出されたとも言えなくてもない。

ちなみに常に装甲をつけておいて人間諸君には大いにビビってもらおうと思う。

というわけで、気楽な気分であつた旅であるがなかなか悪くない。

排気ガスが存在しない空気は澄んでいるし、高層ビル群がない道は遠くまで見はらすことができる。時間に縛りがないから好きな時に寝るし、遊ぶ。

すばらしい。

そういえば、目覚めたところにいた女が空に浮く島があると言っていたな。

そこに行ってみるのもいいかもしれない。

そして堂々と街道つばいところのど真ん中を歩いているのだが、急旋回していく馬車がちよくちよくいて楽しい。

まだ魔法使いとやらには遭遇していないが、あつたらからかい倒して見せよう。

そしてこれまたちよくちよく人型形態にも慣れようと努力しているのだがこれは難しいらしい。

気楽に頑張っていこうと思う。

(ん?)

やれやれ、この世界はなかなか治安が悪いらしい。

さっき俺から逃げて急旋回していった馬車が何者かに襲われているらしい。

悲鳴が聞こえてきた。

無視してもいいのだが、知っていて見殺しにしたとなると寝覚めが悪い。

仕方がないので助けることにする。

すべての人類は俺におちよくられるあるいはいじめられるためにいるのであって、将来的に俺のおもちゃになるかもしれない人間の総数を他人が勝手に減らしていいものではないのだ。

とまあ、なぜかツンデレ乙とか聞こえてくる気がするがちがうからな？

さて話を戻して、これからの行動はどうしよう？

a・そのまま普通に蹴散らす。

b・惨殺死体に仕立て上げ蹴散らす。

c・一緒になって馬車を襲う。

cはないだろ、一応ついさっき助けてやるかという気分になったこ

とだし、それはそれで楽しいかもしれないが何かが間違つて襲撃者諸君に仲間意識を持たれるとイラっとくるし。

a、bはいっしょだな、どこにも違いがない。ということで蹴散らすという名の惨殺に行こうか。

（さて、食物の必要のない体になったから自重していたがひとつ狩つてやろう。）

幸いこちらには気づいていないようだし堂々と不意を打って一番偉そうなのから行こうか。

（よっこいせと）

ザシュツと音を立てて盗賊Aの首が飛ぶ。

どさっ・・・

「へっ？」

こちらを見てくる間抜けどもが、ポカンとして闘争の場が一瞬静まる。

「かつ頭~~~~~!!」

なんだ大将だったのか、ずいぶんとぎこいな。

不意を打って置いて何を言っているんだという気がしないでもないが、そういうのはやられた方が悪い。

勝者というのは常に正義なのだよ!!!

故に負けた弱者の意見を考慮する必要があるか? いやない!

とりあえず首の落ちたその体を口で持ち上げ浮かべると、残りの奴らにたたきつけた。

「ひい~~~~~!!」

やけに下っ端っぽい反応をする奴がいるな、あれだけは生かしておいて他をしとめるか。

さて、獣になってからというものの血を見ると興奮しやすくなっているかん。

（くつくつく、愚民どもよ。逃げ惑うがいい!!）

蜘蛛の子を散らすように逃げる一部と、向かってくるバカ。

さて利口なのはどちらかな?

正解は・・・どっちもバカでした〜。

俺に目をつけられた時点で選択肢なんかあつてないようなものなんだよ！

一人一人減っていく仲間におびえるがいい！

ありきたりだが殺るつもりがある奴は殺られる覚悟が必要なんだよ！！

俺にはないがなっ！！

所詮そんなものは強いから言える理論なんだよ。

偉そうなこと言たつて、死ぬ時は無様に怯えるもんなのさ！

さてそうこうしているうちに、尻尾だけで相手していたら刺殺死体が量産されているな。

逃げた奴でも追つか、大将の血でマーキング付けてやったし。

そういえば最初に生かしてやるつもりだった下っ端生きているよな？死んでいてもいいんだが最初にそう決めたからな。

よし、馬車の近くで尻もちついてる。

顔面蒼白でいやいやするように首を振っているがそのまま下っ端っばい君でいてくれ。

んっ？接近する飛行物体、人かあれ？

むっこつちになんか空気の塊が飛んでくる。

とりあえず避けねば。めんどくさい。

耐久度実験的に受けてやってもいいかもしれないが、痛いのはできればご遠慮したいところだ。

そしてその人間は、馬車のそばに降り立つ。

あつ下っ端がいない・・・いつの間に。

やはり奴は長生きするな。

これぞ戦闘員Aは意外と死なないの法則。

まあそんなどうでもいいやつはほつといて、今はこいつだ。

「貴様、なんだ？」

そいつは、そうつぶやいて自重するように苦笑する。

なんだろう、少し馬鹿にされている気がする。

何だと聞かれたのだから答えてやろうではないか！この身に不可能はないと思いこむ！

あれだ、発声器官的に獣の、のど程度では人語を発音できない。ならば、念だ。送るのだ。根性だ。

『俺は・・・』

しまった！なのるべき名がない！！決めておくべきだった！！
なにか驚愕しているようだからきつと伝わっている。

つづきをつづきを言わなければっ

『電脳獣だ』

意味が絶対通じない！シット！やってしまった！

「デン・・・ノウ・・・ジユウ？」

おkまだいける。単語として認識できていない。てか種族名？だから別にいいのか？

次だ！ごまかすんだ！何をごまかすかは理解していないがとにかくごまかすんだ！

『そうだ、人間よ。俺は電脳獣。さらばだ』

ごまかし方が浮かばなかった俺は、逃げるしかない敗者である・・・
つく不覚だ！

そうして俺は走り去った。

視点チェーレンジっ！

「ある騎士」

私はさる貴族にお仕えするシュバリエである。

もともとは私自身そこその貴族であったのだが、実家が事業に失敗し取りつぶされることになった。

そうして私はすべてを失った。

そんな絶望の淵にいたときだった。

今お仕えしている旦那様にお会いしたのは。

すべてを失った私は親にも見捨てられ、街で浮浪者となってその日を生きていた。

帰るべき場所もなく、ただただ街をさまよい歩きついに倒れ、もうだめかと思った時だった。

私の横に一台の馬車が止まったのだ。

そしてその扉が開き、聞こえてきたのは懐かしい声だった。

それは昔、貴族のパーティーであったある辺境伯のものであった。

辺境伯の方は私の事を覚えていてくれたらしく倒れた私が空腹で動けないことを知るとパンを差し出してくれた。

私はあさましくそのパンにかぶりつくと口に押し込み誰に取られるということもないのに一気に胃に落とし込んだ。

だが、長いこと物を口にしていなかったせいか吐きもどさないようにすることが困難ではあった。

飲み込み胃の拒絶反応も落ち着くと私は唐突に恥ずかしくなった。

赤面して顔をそむける私から辺境伯は根気良く事情を聴きだし自分のところで働かないかと言ってきた。

私はその誘いに飛びつきすぐに返答をしたが、急になぜそこまでしてくれるのだろうと恐怖にかられそのことを直接聞いてみた。

特に理由はなく、気まぐれだそうだ。

ではいつ見捨てられるのだろうかと新たな恐怖にかられたがその時

の辺境伯の顔は不思議と照れくさそうで私はそこまで深刻な気持ちにはならなかった。

そして私は辺境伯の屋敷で護衛兼執事のまねごとをして過ごすこととなった。

今では国からシユバリエの称号もいただきまともな生活を送ることができている。

あのときいただいたパンの味を私は今でも忘れることができないし、これからも忘れることはないだろう。

そして今私は、お嬢様の護衛として馬車についていたのだが曲者に待ち伏せされお嬢様だけでも先に馬車を行かせた。

残った私は曲者と戦っていたのだが、私自身がメイジということもありすぐに終わると思っていたのだが、どうにもおかしい。敵が本気でないというかこれではまるで時間稼ぎ……しまった！お嬢様が危ない！

私は目の前の敵に見切りをつけあわてて馬車へと向かう。

逃走を図る私によやくやる気を出した曲者どもは私を妨害する。

私は陸路での移動をあきらめフライを使って空から目的地に向かった。

お嬢様無事でいてください！

ようやく到着した私は驚くべき光景を目にしていた。

見たこともない獣が賊どもを蹴散らし、血の雨を降らせていたのだ。

急ぎ馬車を背に地上に降り立つと思わず私はその獣に声をかけた。

「貴様、なんだ？」と、

そしてすぐに獣に何を言っているのだかと思い、そんなバ力なことをした自分に苦笑した。

そんな私の様子に気分を悪くしたのか、獣の顔が先ほどよりも険しくなったように感じる。

私に緊張が走るあの獣は此处に横たわる死体の山をたった一匹で築いたのだ。

私に勝つことができるのだろうか？勝つことができなくともお嬢様だけは逃がさねば御者はすでになく方法に思考をめぐらそうとしていた時だった。

『俺は・・・』

頭に直接響くような声が聞こえてきた。

言葉を解す獣だと！？どこかの使い魔か！

仮にこの獣が敵で使い魔だとするとまだ敵が潜んでいることになる。

『電脳獣だ』

「デン・・・ノウ・・・ジュウ？」

電脳獣なんだそれは！そんな生き物を聞いたことがない。

それとも個体名なのか？

こんな圧倒的な武力をもった存在が他にもいるなど考えたくもない。

『そうだ、人間よ。俺は電脳獣。さらばだ』

そんな私の混乱をさておきその獣はそれだけ言い残すと去っていった。

「助かった・・・のか？」

しばらく警戒を続けようやく危機が去ったことが理解できた私はお嬢様の安否の確認へと移った。

馬車は特に壊れた様子はなく、無事だとは思うのだが・・・。

「お嬢様私です。もう大丈夫ですからご無事でしたらおあけください。」

私はノックをした後馬車の中にそう声をかけた。

「まあっ！大丈夫でしたのね！私もう不安で不安で！」

お嬢様は大変興奮されているようだ。

少し首が……。

「お嬢様私が離れてから何があつたのか説明願えますか？」

「ええ、ええ。話しますわ。しっかりと聞いてちょうだい。」

そして私は言雄の顛末をお嬢様から聞かされた。若干装飾華美だったのでまとめると。

私が残ってから街道を走っていたら大型の獣を御者が発見しそれを避けるために一本手前の道を横に行こうとしたところを襲われたらしい。

御者は命乞いの間もなく殺されたらしく、次は自分かと御祈りをしていたらあの獣がやって来て賊を蹴散らしていったらしい。

驚くべきはほとんどその場を動かずに殲滅を終えてしまったということだろうか。

あとは私も見ての通りということらしい。

それにしても見たことのない獣だったすぐに報告しなくては……。あんな危険な生き物を野放しにしておくことはできない。

今回はたまたまこちらの利になるように働いてくれたが、次はどうなるか分からない。

だが今はそんなことよりも残りの行程を。馬が逃げてしまったがために徒歩で行くしかないということをお嬢様に理解してもらわなければならない。

やれやれ、護衛も楽じゃないな。

視点チェーレンジっ！（後書き）

せっかくだったので護衛っぱい人にも設定をつけて語らせてみました。

何となくでやってみたので多分もう出てこない・・・。

傷心または鬱という（前書き）

皆さんお久しぶりです。あるいははじめまして少し日が開きました
がうpです。

傷心または鬱という

どこかの護衛に精神的に敗北を喫した俺は疲れた心をいやすためにさまよう。

動く気力も失せたころ、どこかの湖にたどりつく。

そして、見つけた湖のほとりで一人ほのぼのする。

日は暖かく、小鳥さえずる。

気配の上手な隠しかたを覚えた俺は誰にも邪魔されることなくのほほんとする。

かつてヒモ化した最大の原因はその存在を気づかれ、崇められてしまったことにあるようだ。

何も気を使わないとあふれる強者の風格が勝手に相手を威圧し、獣限定で服従を誓われてしまう。

つまりは気をつければヒモにはならない。

これによってさすらいの風来坊ごっこをせずに、一つのところに留まるということができるようになってしまった。

旅立ち約2週間目の昼のことであった・・・。

多分にむなしい所がある感じではあるが、2週間もさまようとこの世界どこに名所があるのだろうか？と悩む旅も飽きていたのでよかったと思おう。

というわけでベストオブ昼寝プレイスであるここですばらく過ごすことにした。

そのまま数日を過ごす・・・。

もうニートでいいんじゃないかな？

光合成できるし？カミナリ、ウマーであるし。

と、そんなダメ人間的思考をしていた時のことだった。

上空から飛来する何かを感知・・・風を切り落下を始めた何か・・・そう、それは液体のような固体・・・。

「グオオオオオッ！！！」

訳：つて、鳥のフン――！！！！

全力回避っ！

間に合えっ！

「グアッ」

頭をしたたかに周囲にあった木にぶつけはしたが回避成功……。危なかった……。。

その頃、湖の中心に小船が浮かんでいた。

「ぐすっぐすっ」

その小船の上には一人のよ……。少女が泣いていた。

「なによっぐすっ魔法が下手くそなのはっ私のせいじゃないわよっ」
一人寂しく、船の上毛布にくるまる少女……。寂しい……。。

「う”るざい！」

！っ地の文にツッコミを入れるとは・・・イタイもとい恐ろしい娘っ！

「う”るざい！」

あつ痛いつちよっ石投げないで。

なぜ水の上にある小船に石があるのだろうか？とかどこに投げているんだ？というかなりどうでもいい話はともかくとして、気は紛れたようである少女であった。

「なによ、ちよつと魔法を使うと爆発するだけじゃない」

訂正、今度は愚痴モードに入ったようだ。

それと、あらゆる魔法が爆発に変わるのは被害を考えるとちよつとではないと思われる。

「そろそろ帰ろ・・・」

ぐちぐちとしばらくしたあと、いい加減家に帰ることにした少女であった。

「ちいねえさまのところに行って慰めてもらうんだから」

小船を動かそうとする少女。

「グオオオオオッ！！！」

その時、咆哮が響き渡る。

「きゃっ！えつちよつと！」

突然の獣の咆哮に驚いた少女は、哀れ湖の中へドボンっ音を立て落ちた。

「わぶっおぼっおぼれる！」

不幸にも少女が落ちたところは足がつく深さではなかったようだ。

「だ、だれかつ！」

バシャバシャと水音を立てて少女はおぼれないように努力する。

ただ、知らないのかもしれないが暴れるより力を抜いたほうが人間は浮くのである。

悲しいかな少女に今それを伝える人間はいない。

「も・・・だめ」

水面を見上げ、沈んでいく自分を思う。

（ああ、お父様お母様、始祖ブリミル申し訳ありません。私はもう
だめなようです）

だんだんと酸素が足りなく苦しくなっていく体……。

意識がかすみ、頭がぼーっとしてくる。

そうして少女は意識を手放した。

傷心または鬱という（後書き）

ついにあの子の登場です。

適当に書いたのあとで大幅に直すかも・・・。

獣出会う(前書き)

俺テスト折り返し地点で何やってんだろっ・・・。
と思いつつ投稿です・・・。

獣出会う

いやしかし本当に危なかった。

鳥のフンとか感覚的に非常に遠慮したい物である物であることは間違いないだろう。

「だ、だれかつ！」

さて、先ほどから若干バシャバシャとおぼれそうになっているような音とヘルプミーンといわんばかりの誰かを求める声が聞こえてくる気がするのだが……。

現実逃避はやめよう。

あれは救助を求めるものである。ファイナルアンサー。

そして、時系列的に考えるとどうにも危険な状態からの緊急回避の際に発した雄たけびと木にぶつかった時の振動が原因で湖に落ちたのだろう……。

（やばい、俺のせいかな？）

はい、どう見ても俺のせいと思われる。

初動がかなり遅くなったが仕方がない、助けるか。

音が消えてなかなか経過したような気がしなくもないが……生きてるよな？

というわけで水辺にダッシュ。

湖に小舟が転覆しているのを発見。

小舟はゆらゆらと水面にひっくり返って波を作っている。

おぼれた人影はなし。

……なんだ、気のせいかな。

はいはい、わかってるよ。

小舟を見た瞬間に、そこに向かってだいぶしている途中だよ。

跳んでる途中で気がついたんだが・・・。

俺って泳げるのだろうか？

前世では泳いだことがそもそもないわけで・・・この体になってからもないわけで・・・。

なんとかなるだろう。うん。

そうこうしているうちに水面はどんどんと近付き、ドボンッという音と巨大な水柱を立てながら着水。

はじめて、足のつかない水に入った感想。

（体、重っ！）

・・・なんだ。

装甲をつけっぱならそれは重いよな。

でもおかしいな？木の枝の上で昼寝ができる程度の重量のはずなのだが・・・。

しかし現実問題、凄まじい勢いで沈んでいくこの体・・・。

相変わらず謎の多い体だ。

まあ、とっとと潜って要救助者を救助せねばいかんのでこの際むしろとくと思うことにしよう。

装甲を取っても沈む危険性は残っているがな・・・。

むむ、なにかが見えた！

ピンク発見！

あれか、あれを拾い上げればいいのか！と誰にともなく頭の中で問う俺。

サクッと助けるとしよう。

襟首を口でつかんでつと。

装甲を解除。

It's 犬かき!!!

すいません浮かびません。

正確にいうと進むことは進むが非常に空回り。

くっ・・・水の中というのがこんなに強敵だとは・・・!!!!

泳いだことがないというのがあだとなったか!

初泳ぎで人命救助は少々無理があっただろうか。

しかし、熟練度が上がるまで悠長にしている時間はないな。

かろうじて口から空気を吐いているが、いつ酸欠で死んでもおかしくないな。

仕方がない・・・奥の手を使うか。

奥の手があるなら早く使えよとな?

分かっているいな。こういうのは自分の力の身を使うからいいんだよ。

早くしろって?仕方がないな。

装甲一部展開!!ダッシュアタック×2装備!!!!

これで、サイドブースター付きになった。

発進!!

ぐぬぬっ思ったよりもGがかかるなこれっ

水の抵抗値が高いだけかも知れんが。

とりあえず水面を突き抜け・・・たっ!

今度はさつきとは別方向のベクトルから水柱を作り、陸地に着地。

ダッシュアタックは楽しいが疲れるということが判明。

良いおもちゃだと思ったのだが・・・残念だ。

とりあえず解除しておこう装甲ごと。

っと、それよりも救助してやった奴は生きてるか?↑偉そう

ふむ、息をしていないな・・・。

残念だ・・・じゃっ!なーいっ!!

ええい仕方がないこういうときは・・・あれをするしか無かるう。

こんな幼女にするのは気が引けるが仕方がない。

まったく世界はままならん・・・許せ幼女よ！

そうして俺は・・・尻尾を思いつきり幼女の腹にたたきつけた・・・。

ドスンっ！！！！

「げふううううう！」

何やら淑女らしくない奇声を上げたが水も思いつきり噴き出したからよろう。

「げほっげほっ」

ふむ完全に息を吹き返したみたいでよかった。

もう一度やらねばならないこと思ったからな。

さすがの俺も何度も幼女に攻撃を加えるのは気が引ける。

なにやら、ありがちな甘い展開など期待した奴には悪いが、俺がそんなことするわけなからう他人に。

展開的にそうなりかけても断固としてつぶしてくれるわっ！！

さてそうこうしているうちに・・・そうこうしているうちにつて便利だよなということとはともかくとして、ぜはぜは言っていた幼女の目に焦点が合いだした。

さっきまでは俗に言うレイプ目という奴に近かったからな、よかったよかった。

さて、大型の狼を見た人間の反応が気になるところではあるな。

「あんたが助けてくれたの？」

反応を求めているようだったのでうなずいてやる。

「そう、助けてくれたことには礼を言っておくわ」

なにこの幼女・・・落ち着きすぎていてこわい。

まあ、気にすんなと尻尾を振っておく。

・・・元凶たどると俺のせいっぽいな。

「あんたこの森に住んでんの？」

少し考えるが、住んでいるわけではなくて一時滞在しているだけなので首を横に振る。

「そうなんだ・・・」

幼女がよろよろと近寄ってくる。

俺はなにか恐ろしいものを感じて動けない。

何を考えたのかひしつと抱きついてきた。

俺が驚きに目を白黒させていると幼女が次のアクションに出た。

「えっえっえっ・・・じんじやうがどおも”っだゝ!!!」

幼女は泣きだしてしまった。

元天才な俺だが、家族とさえあれな関係だったので対人スキルは著しく低い。

そんな俺がこういうことをされると・・・どうしよう!!
ということになる。

えっマジでどうしよう?どしたらいい?

オロオロしているとドラマで母親が子供の頭をなでてあやしている光景が思い出されたのでとりあえず、おそろおそろ尻尾で頭を撫でてみた。

「うええええええええええん!!!」

悪化した!さらにオロオロする俺・・・誰か助けて・・・。

いろいろなものをあきらめた俺は根気よく首を絞められながら尻尾で頭を撫でてやった。

しばらくすると嗚咽が少しずつ小さくなっていきやがて止まった。
ふう、本当によかった。

ガキは苦手だ。打算などがない分拒絶しにくい。

「ねえ、あんた私の言葉が分かるみたいよね?誰かの使い魔?」

使い魔・・・そんな契約をした覚えがないので違うだろう。

知らない間にさせられているということがなければだが。
とりあえず首を横に振っておく。

「しばらくここにいろ?」

滞在予定というか、いろいろなものにだれたので一応その予定だ。
うなずいておく。

「そう・・・。」

それだけ言つと幼女は泣きつかれていたのか眠りに就いた。

俺を抱き枕にして・・・。
これどついたらいい・・・。

獣、遊ぶ（前書き）

いややつとテスト終わりました。

てか、不定期と言ってる割には頻繁に書いている気がする。
そうでもないのかな？

さて、本編としてはタイトル通りひたすら遊びました。

獣、遊ぶ

あのあと、少女はしばらく放置していたのだがいつこうに目を覚ます気配がなかった。

なので仕方なく超感覚的な何かを使用し人間のいるほうを搜索。

こんな子供が一人で来れる範囲ならばおそらく知覚範囲に入っているだろうという憶測は正しかったらしく、意外とすぐに見つかった。見つかったので、背中に荷物のように載せ尻尾で固定するとそちらに面倒と思いつつ向かう。

起こさないようにのっそのっそと少女の家・・・というよりは屋敷という方が相応しい風格をもった建物を発見した。

（悪いことやっているにちがいない。）

という考えが出てきてしまったのはしかたがないと俺は思う。

（けっブルジョアが・・・）

まあ、見苦しいひがみはこのへんにしておいてこの荷物を放置しに行こう。

幸いにも屋敷の周囲には人影がない。

中の人間に見つからなければいいだけなので楽なミッションだ。

この辺りに転がしておいても勝手に拾われそうだが、ここまで来たなら入り口まで持って行こうと思う。

ミッションスタートだっ！てくてく、てくてく、ぽいっ。

「ぐぎゃ！」

ふーミッションコンプリート。

ふっ俺にかかればざっとこんなもんさ。

アフターケアも忘れない俺は少女の頭の位置を扉が開いたときに直撃するようにセッティング。

もう、俺の気配り上手っ・・・クククっ。

さて、やることやったし戻るか・・・。

そっして森に消えようとしたとき不意に誰かの視線を感じた気がし

た。

振り返ってみるが特に変わった様子はなかった。

（まあ、見られていても問題はない）

と、楽観的な考えでその視線をスルーすることにした。

・・・翌日。

「ちよつとあんた聞いてんの！聞きなさいよ！」

俺は少女の愚痴を聞いていた。

どうしてこうなった・・・。

「だいたいねえ、送ってくれたのはいいけど、置き場所考えなさいよ！こぶになっちゃったじゃない！ここよっこつ！分かる！？」

愚痴られるのは予想外だが計画は成功していたようだ。

ならばよし！

「だ・か・ら・・・聞きなさいよっ!!」

あっこら、少女よ。

ゴロゴロしていた俺の首を引っつかんで揺するでない。

酔う、酔うから。

しばらく固形物摂ってないけど何かをリバーすするからっ。

ワシワシ揺するのやめて。

・・・

・・・

・・・

「グオオオオオッ!」

訳：しっつこいわ!

「な、なによ・・・怒ったの?ふ、ふん。この程度で怒るなんてな、情けないケモノね!」

いやいや、普通の動物なら初動の段階でキレてるだろ。もしくは逃げるだろ。

ふうーやれやれこれだから世間知らずは。

と、これみよがしにため息をついて寝転ぶ。

(あー今日もいい天気・・・)

本日は快晴である。

「ちよつと!ねえ、ばかにしてるの?ばかにしてるのね!ケモノの分際で貴族様ばかりにしてんじゃないわよ!!」

ポカポカと来そうだったので尻尾で少女の額を押さえる。

「わぶच्चよつとこれ外しなさいよ!ずるいじゃない!!」少女は尻尾に押さえられ前に進めない。

それをちらつと横目でみた俺は・・・ふっざまあ。

嘲笑ってやった。

「キイイイイツ!!あつたまきた!!そこになおきなさい!!コロス!コロスワっ!!」

それをみてもう一度・・・ふっざまあ。

嘲笑ってみた。

「絶対に許さないわ！あんた！！！」

そういつて飛び掛かってきた。

ビシッ

体をひねり尻尾でたたき落としてみた。

ドスンと少女は顔から地面に突っ込んだ。

少女はプルプルと震えながらうごかない。

それをみた俺は・・・躊躇なくその頭の上にポフンと手を乗せ、押さえ付けた。

震えが激しくなった気がする。

だがやめない！！！！

ゾクッ

その時、背筋に寒気が走った。

ガシッ

「フフフフ、捕まえたわよ・・・おとなしくワタシに・・・殴られなさい！！」

ひよいひよい。

だがかわす。

それが俺クオリティ。

「このっ！避けるな！！」

むっ拘束が緩んだ。

脱っ出！！

「くっ逃げんじやないわよ！！」

だが断る！！

あばよとつつあゝん！

「待ちなさい！！バカ犬！！」

あつ犬違うと思うよ。多分狼種。

ばっかだゝ。ぷぷ。

「犬っ！今あんた馬鹿にしたでしょ！なんか馬鹿にしたでしょ！！」
腕をぶんぶん振り回して、追ってくる少女。

わざとギリギリ捕まらない速度で走る俺。

頑張れ少女よ。キミならできる！光を越えるんだ！

そのまま、結構な時を追いかけっこに費やした。

「ぜ〜は〜ぜ〜は〜あ、あんた、げふつもうだめ・・・」

結構楽しく追いかけてっこをしていたのだが、少女の体力に限界が来たらしい。

息を切らせて、膝をついた格好でこちらをにらんでくる。

さすがに大人げがなかったかなと思うので、機嫌取りがてらストレージに保存してあった果物を与えてみることにした。

なにもないところから取り出すのもあれなので、いったん木の陰に向かう。

少女は立ち上がる気力も尽きたのか、こちらを憎々しげに見るだけである。

木の陰に入ると、まず以前努力して作った木の蔓でできたバックを取り出す。

つぎに、そのバッグに水分量の多そうな果物を取り出して詰める。

まあ、あれが食べるのだから俺の分まで込みでも2つもあれば十分だろう。

用意ができたので陰から出て少女に近付く。

俺が戻ってきたことが意外だったのか、荒い息ながらも表情に驚きを浮かべている。

バッグをひっくり返すと果物がコロコロと躍り出る。

そのうちの一つを少女に前足で薦める。

「くれるの？」

コクリうなずく。

「ふ、ふん。やっと私の偉大さが分かったのね！まあもらってあげるわ・・・」

少女と共に俺も一つ食べる。

食べ終わると日も落ちてきたので少女は帰っていった。

「まだ、決着はついてないんだから勝手にいなくなっちゃだめなん

だからね!!」

という捨て台詞を残して。

それから少女はちよくちよく俺のもとにやってくるようになった。なにもせずぼーっと過ごしたり、今日みたいにからかいまくってみたり、グチグチ言うのでそれをずっと聞いていたりとそこそこ楽しいので好きにしてくれといった感じである。

ところでいまさらだが少女よ。

俺は野生の獣なのだがそんなになついて大丈夫か？将来が不安だぞ？

仇敵登場（前書き）

どうも、最近はめつきり寒くて手が寒いと思います。

感想とかどう返していいか迷っていたらいつのまにか5件くらい
まっていました。

さすがにまずいと慌てて返信しましたが、それでどうです？
リクエストキャラ1名出しましたよ。

仇敵登場

今日も少女はやってくるようだ。
しかし、気配の数が一つではない。
誰かを連れてきたのだろうか？

「ただいま帰りましたー」

そろそろと少女は誰にも気づかれぬように屋敷に入る。
最近服を汚して帰ることも少くないので、見つかるという
面倒なことになることを悟っているからこのような行動をするに至
ったようだ。

扉のから首を出し誰もいないことを確認すると素早く閉める。

こんな動作が最近は当たり前になってきていた。

自分に甘い他の家族に見つかればちよつとした小言ですむであろう
が、一番上の姉に見つかれば説教のフルコースが待っているであろ
うことは想像に難くない。

「ルイズ」

「ひゃ、ひゃい！」

十分に警戒して自分の部屋に帰る途中いきなり後ろから声がかけられた。

返事が変な感じになってしまったのはいたしかたないだろう。

「もう、そんなに驚かなくてもいいのに」

少女が振り返るとそこには大好きな姉が困ったように笑っていた。

「ちいねえさま！」

少女は姉の姿を認めると満面の笑顔を見せ抱きつく。

「まあまあ、ルイズは甘えんぼさんね」

「ちいねえさまだからいいんだもん」

よくわからない理論をもちだして少女は自身を肯定する。

「あら、かわいい顔が汚れているわ。今日はどこに冒険に行ってきたのかしら？」

「えつとね、えつとね」

顔をハンカチでぬぐわれながら少女は姉に自分の体験を聞かせようとする。

「ん〜綺麗になったわね。つづきは私の部屋で聴かせてもらえるかしら」

「うん！」

少女は姉に手を引かれ部屋に向かう。

部屋に到着すると

「小さなルイズ、お話を聞かせてちょうだい」

椅子に腰かけ姉が話を求める。

「えつとね、えつとね」

少女は最近のあの獣とのじゃれあいについて話した。

非常に意地悪だとか、帰る前に果物をくれるだとか、毛並みがもふもふで気持ちいいとか、お日さまの匂いがするとか怒ったり笑ったりと顔を忙しく変わらせて少女は姉に報告する。

最近少女が服を汚れさせて帰ってくることを知っていた姉は原因が

分かってその笑みをさらに深める。

暗くなっていた少女がこんなにも楽しく話を聞かせてくれる動物とはどんなものなのかと姉の興味も高まる。

そうして話がひと段落したところ

「ねえルイズ、明日もその動物さんのところへ行くの？」

「うん、明日こそ勝つんだから」

「私も付いていっていいかしら？」

「ちいねえさまも？」

「ええ、だめかしら」

「ううん、一緒に行きましょう！」

元気良く返事をしたものの、少女は少し考えると

「でもちいねえさま、お体は大丈夫なの？」

「最近は調子がいいからきつと大丈夫よ」

とまあ、そんなやり取りがあつて我らが名もなき獣殿のところへ連れ立ってやってくるに至った次第であります。

さて、少女の姉らしき女が目の前にいるわけだが、どうしたものか。

「こんにちは、はじめましておおかみさん。」

あいさつをされたのであいさつを返しておいた。

「ウオフ」

訳：はじめまして

「あらあら、お利口さんね」

お利口といわれても思考レベルは人間の中でも優秀な部類と同程度であると自負しているのだからそれは褒め言葉にはならないと俺は思う。しかし、このやんちゃ＆無礼な感じの少女の姉だとはとても信じられんほど聖母並みのオーラが出ている女だな。

少女を見る、女を見る、もう一度少女を見る。

はあ、ため息をつく。

「ちよつとあんた私の事馬鹿にしたでしょ！なんか馬鹿にしたでしょ！」

EXACTLY！！

少女の方を見て、いろいろと残念だと思いました。

少女を見る、女を見る、もう一度少女を見る。

はあ、ため息をつく。

「むつきいいいい！」

さあ来るがいい少女よ！最近さぼっていた運動不足解消のために！

「ルイズだめよ。女の子はもう少しおしとやかにしなくては」

いまにも結果の決まり切った勝負が始まろうとしたその時、制止の声が入った。

「うう・・・はい、ちいねえさま」

（ちつ余計なことを）

思惑が外されたので若干不機嫌になる。

「あらあら、あなたはルイズとの追いかけっこ楽しみにしていたの？」

良い暇つぶしになるからな、ふんっ。

「それは悪い事をしたわねえ」

っていうかこの女俺の思考を呼んでいるかのような的確な反応だな、おい。

「なんとなくかしら」

まじかつ！すごいなあんだ！

「ふふふ、ありがとう」

「ちいねえさま、何を話してるの？」

「このおかみさんはあなたと遊ぶのが楽しいんですって」

「うそよ、いつもいじわるするもの」

「いやいや、そんなことはないぞ少女よ。」

「嫌いな人間を餌付けするほど暇ではないぞ。」

「ほら、そんなことないって言ってるわよ」

「ううう」

ふむほんとに分かっているなこの女、しかも不都合なことは言わないとはやるではないか。

さてもうひと押ししておくか。

少女に近付き裾をちよいちよいやって注意を引く。

こちらをちらつと見てきたその瞬間、ぷつ。

「この犬ううううう！！！」

さて、先ほどカットされた鬼ごっこを始めようではないか少女よ。

だが、いきなり拳はひどいと思うぞ少女よ。

むむっ投擲スキルが上がったのではないか少女よ。

石がなかなかいいところに飛んでくるようになったぞ。

そのままいつものように追いかけてつを続ける。

そうしていつものように少女がへばったところに終了。

果物を木の陰から持つてくるのもいつも通り、いつもと違うのはその個数が3つだということ。

へばった少女に一つとどけると、なぜか意思疎通ができる女のところへ。

「あらくれるの？ありがとう」

ところで女よ、あの少女には友達がいらないのか？
毎日のように俺のところへやってくるが。

「いないわけではないのだけどね」

ふむ、非常に少ないとみた。

将来が心配になることだな。

「それは大丈夫よ。きつと素敵なレディーに成長するもの」

あれが？無理であろう。

きつと、局所的に好かれてそれによりかかって生きるに違いない。

「あら、寄りかかれるってことはきつといい女になっているはずよ？」

むゝそう言えなくもないのか？だがな？あれだしな。

目を向けると大の字に転がって与えた果物をかじっている。

「ふふふ、大丈夫よ。心配してくれてありがとうね」

ふんっ別に心配しているわけではないわ。

何となく気になっただけだ。

「それでもありがとう」

ふんっ。

「ところであなた不思議な感じがするわね。何者？」

ほう、分かるか。大したものだ。

「なんて言うか根っこから違う感じよね。ハルケギニアの人じゃないでしょう」

人ではないがな。

もつとも俺もよくわからん。気がつけばこれで、しかも異世界と来たものだ。

「あなたも大変なのね」

まあな。

そういうお前こそ妙な気配がするが、どうなっているのだ？

「わたしは芯の方から体が悪いらしくて、調子の悪いところを直す」と別のところが悪くなっちゃうの」

それは大変だな。

「あら同情してくれないの？」

同情してなんとかなるものならしてやらなくもないが、どうにもならないなら気にするだけ無駄だ。

それにお前の家は金持ちのようだしな。

金持ちの娘がダメなら、あとは運頼みしか無かるう？

「ふふふ、あなた飾らないわね。女の子にもてないわよ？」

この体でもてたとしたら奇特過ぎていろいろと残念なやつだけだろう？

「わたしはあなたの事好きよ？」

さっきの発言と矛盾しているではないか。奇特な奴め。

「ふふふ、奇特すぎて危篤にならないようにに気をつけるわ」

それは割とシヤレにならん発言だからやめておけ。

「はいはい、わかりました。話は変わるけど体を触らせてもらってもいいかしら？ルイズが自慢するのよ、もふもふだって」

まあ別にかまわんが・・・好きにしろ。

「お言葉に甘えて」

女の手が俺に伸びる。

何故だがいい知れぬ恐怖を感じてきたがきつと気のせいだろう。そして女の手が俺に触れる。

「あら、本当に柔らかくて気持ちいいわ」

そうだろう、そうだろう自慢の毛並みだ。

「あらあら♪まあまあ♪」

ちよつ貴様つなで方が玄人すぎるぞ！

ほどほどにせんか！！

「あら、何を言っているか分からないわ」
嘘をつけ！

「あらあら♪まあまあ♪」

やめっ、首はいかんっ！あふっ。

「あらあら♪まあまあ♪」

ふにゃ、こらやめんか・・・。

「あらあら♪まあまあ♪」

も、だめ・・・。

それから数分過ぎ少女が復活するまで女に思う存分もふられた。そのあとにはぴくぴくと動く獣Aが残された。

「ちいねえさま。あれどうしたの？」

「そうねえ、きつと疲れちゃったのよ」

女は妙に艶艶とした顔をして答える。

貴様っ！

「あらもう一度しましょうか？」

ズツサアアアア！

俺は震える足に活を入れ、女から距離を取る。

「あらあら、嫌われちゃったみたいね」

寄るな、触るな危険物め！

この俺にここまで警戒させるとは貴様それでも人間か！

「たぶん？」

何故に疑問形か！！

「おそらく？」

しつこいわ！！

「さあルイズ、もう遅いからあのおおかみさんに挨拶して帰りましょう」

スル―か！スル―なのかこら！

「次は負けないんだからね！」

そしてお前はいい加減あきらめろ。

いや、やっぱりあきらめるな。俺が暇になる。

「それじゃあ、おおかみさんまた逢いましょう」

おまえはこんでいい！

「さようなら」

こうして、俺にとつての史上最強の敵との邂逅は終わった。

なんだか妙に疲れた・・・。

ふて寝しよう。

きつとそれが最善だ。

仇敵登場（後書き）

いま、これを完全独立キャラとして扱うか。

ルイズの使い魔にしてみうか、オリキャラの使い魔にしてみうか迷っています。

どうでしょう？そろそろいろいろ飛ばして本編に行きたいところではあるんですが。

獣、また旅立つ（前書き）

どうも、サイコロで3の目が出たため今後の展開が決まりました。
小説って書き出しが一番難しくありません？な13話です。

獣、また旅立つ

どうも、何か人として大事なものをなくしたと思う今日この頃。
人間じゃないという突っ込みは受け付けていないのでそこのところ
よろしく。

心はきつとまだ人間。

だけどなっ、だけどなっあれはひどいひどすぎる。

あれ以来カトレアとかいう女もルイズという少女にひつつきたまに
やってくるようになった。

警戒心MAXでいるはずなのに気がつけばもふられ、何か大事なも
のなゲージがガリガリと削られていくこの不思議。

だがな、動けなくなっても服従のポーズだけは死んでも見せん。

そんなことになったら俺は、俺は・・・。

まあ、それはひとまず置いておいて最近少女がキレル度合いが減っ
てきた。

いい事なのかもしれないが俺としては面白くない。

毎回工夫を凝らすのも面倒だ。

だが性根は変わっていないちょっとからかえばむきになる。

素晴らしい逸材だ。

でだ、また旅に出ることにした。

やや、傷心旅行の側面があることは否定しない。

つながりが見えないという意見も分かる。

長いことだれていたのですっかり忘れていたがドラゴンとか空飛ぶ
島とかまだ見てないことに気がついた。

それで旅に出ることにしたのはいいのだが、少女が思ったよりも順
調に餌付けされてしまったがために勝手に出ていくことがはばから
れる。

普通に泣くんではないだろうか？

ここはあれか？とりあえず思いつきりかまってやってあばよといった感じに去っていくのがいいのだろうか。

さっそく実行してみることにした。

おいこら少女よ。

「なんかよう？」

最近では少女も俺の言いたいことをやや理解できるようになった。やはり長居しすぎたか。

とりあえず、腹に顔を押しあててるのをやめろ。
体をゆすつてアピール。

「なにするのよ、あんたの毛気持ちいいんだから抱き枕になってなさいよ」

今日はちゃんとかまってやるから離れい。

「むうゝ仕方がないわね。そんなにいやなの？」
別にかまわんが動けないのでな。

とりあえず背中に乗るといい。

俺は伏せつて尻尾でちよいちよい背中を指す。

「ん？乗ればいいの？」

イエス、イエス。

「よいしょつと」

うむ、しっかり乗ったな。

尻尾で落ちないように固定してと。

エアシューズ装備つと。

いざ行かん空の旅へ。

「わわっ」

なんか少女が慌てているが俺は知らん。

ゆったりとした角度で円を描くように空を駆け上がる。

ジングルベル、ジングルベル鈴が鳴るゝ。

気分はトナカイ。

30mほど上昇した頃に空中で停止する。

どうよ少女いい景色だろう？

ポカンとしとらんで感想、感想。

「わぁーすごい」

驚きすぎて語彙不足か？

まあ飾る言葉は増やせば増やすほど陳腐になっていくからある意味この反応が正しいのだろう。

「てか、あんた何者よ」

少女は冷静に戻るとじろつとこちらを睨んでくる。

はっは、少女よそんな不審物を見るような眼をしても何も出ないぞ。

「落ちないわよね。これ？」

ふっ俺をなんだと思っている。

泣く子もゲームする電腦獣様だぞ。

そんなことさせるわけじゃないじゃないか。

自信満々な俺にほっとした様子の少女。

もつとも、俺が故意にやらない限りはという条件は付くが。にやり。

あつこら、暴れるな少女よ。真面目に落ちるぞ。

「あんた、落とそうとしたら殺すからね！」

あいあい、それじゃあしばらく空中散歩としゃれこみますか。

ちと風が強いな、バリアも張っておくか。

あれ？張れたのか？見た目が変わらん。

まあ張れたということで、あつ風は消滅したな。

なればよし。

それから、ふつうに歩いて景色を楽しんだ後。

レッツ、パーティー！ー！！！！

ジェットコースタースタート！

「きゃあああああー！！」

少女が悲鳴を上げるがバリアのおかげで風は来ないのでGにだけ気をつけよう。

ハッハッハ、いくぜ大回転3連！！

「ぎゃあああああー！！」

まだまだ止まらんよ！

そのあとも、大技を繰り返して少女の精魂が尽きたところに地上に降り立った。

「ぜえ、はあ、地面、地面があるわ」

少し調子に乗りすぎた感がぬぐえない。

まあ、無問題。

「あんたはやりすぎよー!」

怒られた・・・しょぼん。

「いや、でも楽しかったけど」

最初からそういえばいいんだよ。

「偉そうねあんた・・・」

まあまあ、それでも食って機嫌を直すといい。

「いつもくれるけどどこから出してんのよこれ」

どこから出てきてるんだろうな？

俺にも分からね。よくわからないどこかに保存されているんだよ。

「まあいいけど」

しゃく、いつものように一緒に食べる。

いつもとは違って寄りかかってくる少女の頭をなでながら食べる。

「あんた今日はどうしたのなんか変よ？」

何故か少女が焦って尋ねる。

俺は無言で頭をなでる。

食べ終わってしばらくすると少女は眠りに落ちる。

少女を背負うとその姉のもとへ向かった。

こんこんっ。

窓をノックする。

女は一瞬驚いた顔をしたが窓を開け俺を迎え入れる。

「あらあら、眠っちゃったのね」

女は俺からルイズを受け取ると母のような顔をする。

そして自分のベッドに寝かしつけると

「それで行くの？」

相変わらず察しの良い奴だな。

「そう、さびしくなるわね」

なに、一生会えんわけでもあるまい。

「そうね、でもたまにはあそびに来てほしいわ」

たまにぐらいなら顔を見せに来よう・・・たぶん。

「もう、そこはきちんと約束してほしいわね」

なに、忘れていなければ来るさ。

ではな。

俺は窓に向かう。

「さようなら、早めに来てね。部屋に閉じこもっていると真新しいことがなくなつて」

知るか。

そして俺は窓から旅立つ。

数日後

ちよつと様子を見に行ったら。ルイズの奴が小舟の上で沈んでいた。仕方がないので姿を見せると、一瞬非常にうれしそうな顔をしたかと思うと眉を寄せて

「ふ、ふん。私に許しもなくいなくなるなんていい度胸してるじゃない！」

とか言ってきたので帰ろうとすると、猛スピードでよってきた。

しばらく遊んでやって帰る時に、またいなくなるんではなからうかと不安そうな顔をしていたのでカトレアのところへ連れて行って2週間に一度くらいはやってくると約束してまた旅に戻った。

ただカトレアよ、久しぶりだからと俺をもふろうとするんじゃない。あふ、やめんか。

やっぱりカトレアに会いに来るのは控えようと思った。

獣、また旅立つ（後書き）

感想ありがとうございます。とてもうれしいです。

そういえばプロットって書いたほうがいいのでしょうか？

その時のテンションで書き連ねているので気になるところです。

獣、召喚される

うむ、あれからさらに数年がたった。

ルイズ嬢は成長しトリステイン魔法学校なる何やら魅かれる名前のところに入学をした。

俺と会うことはほとんどなくなったが長期の休暇の際には家に行っていないと怒るのでめんどくさい。

カトレア嬢が動物好きなので屋敷内をうろついていたところで特に問題はなかった。

いや、一つだけあったな二人の両親がじゃれていたら襲いかかってきたことがあった。

・・・あの時はひどかった。

二人の両親ではあまり痛めつけるわけにもいかず手を抜くのも楽しやなかった。

最終的には我慢の限界が来て俺がキレたのだが・・・まあ、そのうち語る機会もあるだろう。

ただこれだけは言っておこう母親マジ怖い。

旅自体は非常に有意義なものだった。

エルフにあったり、バ力をいじめたり、バ力を虐殺したり、バ力を滅殺したり、動物に異常になつかれたりと他にもいろいろあった・・・。

そして、獣に慣れると人型になることが嫌いになった。

これはかなり大きなことだろう。

仮にも元人間として。

訓練だけはしてきたが・・・。

まあそれらは置いておいて、今俺は火竜山脈と呼ばれるところにくてきている

敵わないと分かっているというのに俺に喧嘩を売ってくる愛すべきバカたちが非常に多くいるところだ。

マグマにつかるのもとても素晴らしくこの世界でのベストプレイスの10位以内には絶対に入と思う。

最初に足を滑らせてマグマに突っ込んだ時は死んだかと思ったがエネルギー吸収効率も良く素晴らしい温泉だった。

今も浸かっているのだが。

さて、いい感じに温まったのでそろそろ愛すべきバカたちの相手をしてやりに行くでしょう。

今の時期は子育てシーズンらしく適度に喧嘩を売ってくる。

虐殺してしまつては遊び相手がなくなるので、最近は手加減を覚えた。

攻撃力が40もあれば岩に穴をあけられるらしく最初のころは正しく虐殺してしまつた……。

仮にも竜だというのだからこの程度の威力大丈夫だろうと弾幕を張つてしまつたのが悪かつたのだろうか？

スーパーバルカン4門程度だったのだが……。

ともかく学習した俺はひたすらに威力を落とすことに力を入れた。

体感的に1ぐらいで人間の打撲になるかならないかくらいという感じだ。

2あつたら人なら当たりどころによつては殺せてしまつらしい。

人相手の遊びにチップを使うのは相当気をつけなければいけない。

火竜たちは5ぐらいなら弾幕ゲーに付き合ってくれる貴重な存在である。

一度楽しすぎてちよつと死なない程度にやりすぎてしまつた時は、火竜達が集まつて頭を下げてきた。

とても悲しい気持ちになつたのでそのことについて怒つたら。

(注) 怒つた「スーパーバルカン16門乱射。

……怒つたら今まで通り遊んでくれるようになった。
いい子たちだ。

ただ、ときどき悲壮感漂う感じなのはなぜだろうか？

泣いているような姿が幻視される。

まあ、きつと気のせいだろう。

などということも思っていたら、さっそくおいでなされた。

今日は4体か・・・普通だな。

もつと的が多いほうが好きなのだがしかたない。

今日は体一つで相手をしてやろう。

二体が火球を放ってくる。

ふむ、前衛2、後衛2か最近いろいろと考えてくれているようで俺としてはうれしい。

とりあえず、迎撃するか。

「ガアアアアアアア！！」

咆哮を放ってみた。

なんと、火球はかき消された。

そのとき、近くまで寄って来ていた前衛の一匹が脳振とうでも起こしたのかさっそく戦線を離脱してしまった。

まあ、あと3匹もいるんだから大丈夫か。

邪悪な笑みが浮かぶ。

よほど恐怖を感じたのか後衛が一体逃走を図った。

やれやれ、敵に背中を見せてはいけないと教育してきたつもりだったのだが・・・。

空を駆け、逃げる火竜に狙いを定める。

追いついて眼前に顔を突き付けにやりと笑うと。

尻尾を思い切りたたきつけた。

「ギャアアアアア！」

悲鳴を上げながら落ちていく。

良い悲鳴だ背中がぞくぞくする。

さて・・・あと二匹。

向き直ると、若干引いてはいたがまだ目に力があった。

よろしい・・・ならばやりあおう！

前衛君が頑張つて爪と尻尾を振るう。

俺はそれらをかいくぐり火竜の体を駆ける。

今度は爪を立てないようにして腕をたたきつける。
するとひるみはしたが落下させるほどではなかった。

爪を立てないで腕を振るったため力があまり入らなかったらしい。
ならばと今度はとヘッドバッドをくらわせる。

今度はしつかりと決まり一瞬で意識を昏倒させた。

そのため悲鳴も出さずに落ちていった。

あと・・・一々体。

最近もう飽きが入り始めたパターンだったのですかさず最後の一体に突っ込む。

火球の準備を始めるが遅い！

接触するかと思われたそのとき。

突如として鏡のようなものが現れた。

それと衝突コースだった俺はよけようとするが空中のため踏ん張りが効かない。

（チツ仕方ない・・・）

ダッシュアタック装備！

緊急回避！

凄まじいGがかかるがこの体ならば問題ない。

ほとんど直角に曲がりそれを回避したと思われたそのとき・・・また新たなそれが現れた。

（なっなにいっ！！）

さすがにトップスピードで回避行動をとっていた俺はそれをよけることができずに突っ込んだ。

全身に電気を流されたかのような衝撃を受け、意識を失った。

獣、召喚される（後書き）

今日から2、3日は毎日更新しようかと思っています。

召喚されるのをそんなに長引かせてもあれだと思っので頑張ってます。

次回、新キャラ登場。

獣、召喚される 続（前書き）

有言実行のためにひたすらに書きました。

獣、召喚される 続

だんだんと意識が浮上する。

「あの・・・す・・・せん・き・・・さい」

誰かが俺を呼んでいるようだ。

体をゆすられる感覚がある。

だが、まだまどろんでいたい・・・。

「お・・・くだ・・・！！！」

ゆすられ方が徐々に激しくなっていく。

グワングワン揺れている。

「グウアアアア」

訳：いい加減うつとうしいわ！！

「きやつ」

眠気であくびしたような声が出たがとりあえずうつとうしい。

目を開き体を起こす。

そこは、先ほどまでいた山岳地帯とは違い豊かな草原が広がっていた。

少し遠くには城のような重厚な建造物も見える・・・。

（ここはどこだ？）

先ほどまで火竜達と死闘とはいかないがそこそこ楽しく闘っていたはずなのだが。

とりあえず見える景色から記憶に合う位置情報を検索する。

マントをつけたサバトでも行いそうな雰囲気のカキ共、教師っぽいハゲ。

バカにされるルイズ嬢・・・ん？待て今何を見た。

回していた首を慌てて戻す。

（・・・なぜいる？）

そこには我が友人であるところのルイズ嬢が何やら唱えながら爆発させたりシーンと何も起こらなかったりして罵倒されている姿が

あつた。

ルイズ嬢涙目である。

（・・・さて、とりあえず野次を飛ばした奴は八つ裂きでいいか？）
存外過保護である。あるいは自分のおもちゃに手を出されて黙って
いられないだけか。

そちらに向かい歩き出す。

「あの・・・待ってください！」

誰かがしがみついてきた。

声からして先ほど俺の眠りを邪魔した者だろう。

首をめぐらせ姿を確認する。

声の主は少女であつた。

「えと・・・私の使い魔になりに出てきてくれたんですね？」

使い魔・・・以前誰かが自分の使い魔になりに出てこいと言つて
いたような・・・。

スマン、ルイズ嬢間違えたらしい。

「うう・・・無視しないでください・・・」

少女涙目である。

大変愛らしかったのととりあえず相手をしてやることにした。

「いいですよ・・・勝手にやります！」

相手をする気になったが相手は聞いてくれないようだ。

「我が名はアリア・ラ・フォロン・ド・エーデルフェルト。五つの
力をつかさどるペンタゴン。この者に祝福を与え。我の使い魔とな
せ」

唇を突き出してくる。

・・・とりあえず回避。

「うう～～」

アリア嬢はあきらめず口を突き出す。

まさに、つつく口撃。

しかし、よけ続ける。

じんわりと再び目じりに雫がたまり始め決壊しそうになっていく。

ふと周囲に目を向けると男はだらしない表情に、女はハラハラした表情と苦虫をかみつぶしたような顔の二通りに分かれていた。なんともまあ典型的なパターンであるな。

などと余計なことを考えていたからだろうか、つつく口撃をくらってしまっていた。

「えへへ、やりました」

かわいらしかったので頭をなでておいた。

「わわっこそばゆいです」

なんだか言葉の割に嬉しそうである。

そのとき顔面に激痛が走った。

「グウウウガアアアアア！！！」

情けなく無様にも転げまわる。

近頃痛みとは無縁になっていたからであろうか、凄まじく痛む。

「お、落ち着いてください！すぐに痛みは引くはずですよ！」

いやそんなことを言われても今とても痛いんだが。

あつ引いてきた。

「ハアハア・・・」

「ミス・エーデルフェルト契約が完了したようだね」

さつき見た禿が人垣を割り近づいてくる。

「あ、はい。コルベール先生」

禿はコルベールというらしい。

魔法が使えるならまずその頭を何とかしろと言いたい。

「ふむ変わったルーンが発現したようだね。まるで模様のようなスケッチしてもかまわんかね？」

「わたしはいいですけど・・・」

こちらをちらつと見てくる。

男にじろじろ見られて喜ぶ趣味はない。

そっぽを向く。

「ふむ、ダメなようだね。ミス・エーデルフェルトまだ召喚したばかりでは仕方がないが使い魔にいうことを聞かせられるようになる

んだよ」

「は、はい」

ムリだろうなあ。

俺だもの。そこは運がなかったとあきらめてもらわねば。それだけ言つと禿は去つていった。

「えへへ」

にやけた笑いをこちらに向けてくる。

かわいい事はかわいいがなにか用かね？

「これからよろしく願ひしますゴスペルさん」

・・・あれ？これ強制加入？

というか、俺の名前ゴスペル？

「なまえは昨日寝ないで考えたんですよ。えへへ」
そうか御苦労。

名前とかそういうえば相当長いこと過ごしたはずのルイズ嬢の家では
まったくつけられなかったな・・・。

あれ？俺実は嫌われてる？

いや、まあ、それでもいいんだがな・・・。

しかし、それはそれとしてゴスペルか・・・バグ使いまくらなければいけない名前だな・・・。

チップに確かバグチャージとかあったなあれを使えばそれっぽくなるのか？

スタイルチェンジはできなかったからな・・・。

バグスタイルが使えたら早いんだろうが・・・。

うゝん、むずかしい。

「あ、あの、気にいりませんでしたか・・・」

とても悲しそうな表情でこちらを見てくる。

やめろ、やめるんだ！そんな純な瞳で俺を見るんじゃない！

気にいったから！それでいいから！

俺の様子に自分の勘違いだったことを悟ったようなのだが純粋な目が痛い！

ちょっと現実を見ないために改めてアリアというこの子を見る。
やや矛盾している気がするが頭のリセットだと思えばいい。

というわけでまずは身長だが150異常160未満といったところ
か小柄だな。

ルイズ嬢と同学年ということをかんがみると・・・16歳だなたぶん。

ということとは成長はほとんど打ち止めだろう。

最も胸はルイズ嬢に比べると格段とこちらの方があろうのだが。

髪はやわらかそうなブロンドのストレートだな。

太陽の光がきらきらとその髪に反射している。

長さとしては腰よりは長いかな？

瞳の色はグリーン。

これまたテンプレート当てはめたような金髪美少女だな・・・。
金髪碧眼とか初めて生で見た。

この少女のペットにめでたくなったらしいので適当にぐだぐだと自分勝手に過ごすことを此処に誓おうと思う。

そうこうしていると人垣の一角が騒がしくなった。

「なにかあったのかな？あっちはルイズさんのいるほうですけど」
なに？まああれの事だから何かやらかしたんだろう。

あれは時々妙なことに意地を張って根性出すからな・・・。

というかあれだ、八つ裂きにするのを忘れていた。

なんか今はそういう雰囲気ではなくなってしまったから、後で闇討ちにしよう。

それがいい。

アリア嬢がとことことルイズ嬢の方へ向かっていくので俺もそれについていった。

・・・ちなみに俺のファーストキスはルイズ嬢にセカンドはカトレア嬢に奪われた。

向こうはペットにキス感覚だったのだろうが不意打ちはやめてほしいと切実に思う。

獣、召喚される 続（後書き）

オリキャラはいかがでしたでしょうか？

お気に召していただけたようなら幸いです。

名前が難しかったです。ドって？ラって？てな感じで・・・。

召喚ばーとつー（前書き）

どうも有言実行のために今日も書きます。

少々長くなった気がします。が適量ってどれくらいなんですかね？

召喚ぱーとつー

とことことルイズ嬢がよく見える位置までやってきた。
何やらもめているらしい。

ルイズ嬢と禿が言い争っている。

ところでそこでばかりとした顔をしている間抜け面をルイズ嬢が呼びだしたのだろうか？

ずいぶんと進んだ格好をしているようだがこの世界では異質だな。
むっルイズ嬢が禿に負けたか。

やれやれこれだから教師という奴は・・・。

逡巡の末、ルイズ嬢が小僧の顔をロックオンする。
顔が真っ赤である。

まあ、人型相手では初キッスだから仕方がないか。

そして二人の影が重なる・・・。

とでもいうと色っぽく聞こえるかね？

それにしても誰か冷やかさないものか、口笛とか吹けよ。

分かってない奴らだ。

まあ、実際にやったらとりあえず闇討ちリスト入りを果たすのだが。
「終わりました」

ふむ、あわてまくる小僧が非常に愉快であったが、おそらく何も知らないのであるからして多少哀れではあるな。

俺には関係ないが。

「ぐあ！ぐああああああ！」

小僧が絶叫する。

そうかやっぱりあれは普通の人間でも痛いのか・・・。

俺だけではなかったようでほっとする。

「ルイズさんはずいぶんと変わった使い魔さんを召喚したみたいですね」

となりになっていたアリア嬢がやっと発言する。

今もおルイズ嬢に野次が飛ぶが、いつもの事なのだろう。

アリア嬢はやや顔に悲しそうな表情を加えているがそのことについては何も言わなかった。

周りを見る限りアリア嬢の反応は希少であるようだ。

いい子であるようで良かった。

一応使い魔になったからには最低限の付き合いは必要だろうから、いけすかない奴だったら叩きのめして服従を誓わせているところだ。いや、本当によかった。面倒が少なくて。

「なぜでしょう？ちよつと寒気が・・・」

感はいらしい。

いい子のようなので身を寄せて温めてやる。↑原因

「うふふ、くすぐったいですよう」

非常に和む。

周りの雰囲気とここだけ空気が違う。

「さてと、じゃあみんな教室に戻るぞ」

声が聞こえると周りにいたやつらが宙に浮かびあがる。

そしてルイズ嬢に適度な罵倒を上げながら去っていく。

残されたのは三人と一匹だけになった。

ルイズ嬢は思い切りため息をつくとお僧の方を向いて怒鳴った。

「あんた、なんなのよ！」

「おまえこそなんなんだ！ここはどこだ！お前たちはなんなんだ！なんで飛ぶ！俺の体に何をした！」

そうして怒鳴り合いが始まる。

「あれは長いかなあ？」

俺たちは静観を決め込む。

ギャーギャーしばらく言いあつとお僧の体からみるからに力が抜けた。

小僧から乾いた笑いがあふれる。

「うそだろ？」

「まあ、あんたは見たことがないのかもしれないけど」

ルイズ嬢がわずかな希望を破壊する。
それを受け小僧はへなへなと膝をつく。

「ルイズ」

「呼び捨てにしないで」

「殴ってくれ」

「えっ？」

「思いっきり、俺の頭を殴ってくれ」

「なんで？」

「そろそろ夢から覚めたい。夢から覚めて、インターネットするんだ。今日の夕飯はハンバーグだ今朝母さんが言ってた」

「インターネット？」

「いやいい。お前は所詮、俺の夢の中の住人なのだから、気にさなくていい。とにかく夢から覚めさせてくれ」

「なんだかよくわからないけど、殴ればいいのね？」

ルイズ嬢は拳を握りしめる。

非常に力が入っているように見える。

「お願いします」

いろいろと思うところがあつたのか、拳を振り上げると険しい表情になった。

「……なんであんたはこのこ召喚されたの？」

「知るか」

「このヴァリエール家の三女が……。由緒正しい旧い家柄を誇る貴族のわたしが、なんであんたみたいなのを使い魔にしなくちゃならないの？」

「知るか」

「……契約の方法が、キスなんて誰が決めたの？」

「知るか。いいから早くしろ。俺は悪夢は嫌いだ」

「悪夢？こつちのセリフよ！」

ルイズ嬢はたたきつけるかのようにして小僧の頭を思い切りぶん殴った……。

あれは痛い。

「ファーストキスだったんだからね！」

ちよっと威力が高すぎたらしい……。小僧は意識を失い崩れ落ちた。

視線の先ではハアハアと怒りに燃えているルイズ嬢が映る。

ちよっとお近づきになりたいくない雰囲気である。

「あのー、ルイズさん？」

勇者がここにいた！

だがしかし、こちらにルイズ嬢は気付いていなかったのか肩がびくつと上下する。

ルイズ嬢がこちらを振り向こうとした瞬間俺は飛びかかった。

「きゃっ、な、なに？」

うむうむ、いい感じで驚いている。

久しいなルイズ嬢よ。

「あんた……。うちの近所にいたヤツ？」

「ウオン！」

「やだ、久しぶりじゃない！元気してた？」

まあまあだな。火竜の肉は意外とうまかったと言っておこう。久闊を叙していると、いきなりルイズ嬢が俺の口をつかむ。

「なんで……。あんたが、使い魔になりに来ないのよ！」
ぐわっ。

理不尽だルイズ嬢よ。

それは俺のせいでは……。あれ？俺一回あの鏡っぱいの避けたな。そのまま通るとルイズ嬢の使い魔だったとか？

まさかね……。

このことは俺の胸の中にしまっておくでしょう。

「はあ……。もう済んだことよね……。」

しばらくいきり立つと唐突に氣勢がなくなった。

だ、大丈夫かルイズ嬢よ。

俺でよければ力になるぞ？

背中をぽんぽん叩く。

「あんた、意外といいやつよね……。」

こちらをすぎるような眼で見ってくる。

「だからどうして、これの前に来てくれなかったのよ!」
しまったぶり返した。

「あのくお二人は知り合いなのですか?」

ナイスタイミングだ、アリア嬢よ。

よくやった。

「えっアリア?いたの!」

それはひどいのではないかルイズ嬢よ。

俺と最初からいたぞ?

「うう……。どうせわたしなんて……。」

ほら、落ち込んでしまつて……。

というか知り合いか二人とも?

「ア、アリア、気付かなくて悪かったわ」

「うう……。いいですよ。それよりルイズさんはゴスペルさんとお知り合いですか?」

「ゴスペルってあなたの使い魔につけるって言つてた名前よね?こいつ?」

抱きしめた俺を顎でさしつという。

「はい!ゴスペルさんはわたしの使い魔さんです!」

「うらやましい。わたしもこいつがよかったわ……。使い魔交換しない?」

「だ、だめですよ。ゴスペルさんはわたしのです」

アリア嬢が俺をルイズ嬢からもぎ取る。ちょっと痛い。

「そうよねえ……。はあ……。」

「そ、それより早く学院に戻りましょう。歩かないといけませんから急がないと」

「アリアは飛んで帰ったらいいじゃない」
ルイズ嬢がふてくされる。

そうか、飛べなかったねルイズ嬢……。

だが、そんな子に育てた覚えはないよ。

ベシベシと尻尾ではたく。

「あたっ、ちよつと痛いつてばわたしが悪かったわよ！」
よろしい。

アリア嬢は飛べるようなので俺が学院まで送ってやろう。

「ん？のせてくれるの？」

「ウオン」

「やった！ありがとう！」

「えと、どういうことですか？」

「あっアリアは飛んでくれていいわよ。こいつが乗せてくれるならすぐに着くから」

「は、はあ」

なんだか納得がいつてない様子のアリア嬢だが後回しだ。

まず小僧を尻尾でつかみエアシユーズを装備する。

なぜか山脈で使っていたにもかかわらず装甲も装備品もすべて取り払われてここにいたので改めて装備しなくてはいけなかった。

「あっ忘れてたわ。そいつも連れて行かなきゃいけないんだった」
「はかもの、勝手に呼びだしたんだから忘れてやるな！」

「うう、悪かったってば……。そんなに怒らないでよ」

そうはいかん。夫人にしっかりと教育するように頼まれているからな。

それは後にするとしてサクツと乗れ、禿のいう通りだとしたらまだ授業があるのだろうか？

ルイズ嬢を急かす。

よいしょと言いつつルイズ嬢が俺にまたがる。

積載重量は大型犬程度のサイズの見た目からすると余裕でオーバーだが無問題。

状況についていけないうちのご主人（仮）を置き去りにして浮かび上がる。

いつも使っていた安全ベルト（尻尾）が使えないのでうにょとよくわからない何かを使って固定する。

覚えているだろうか？一番最初にこの体で覚えた特殊能力である。最初のころは次々と新しい能力に開眼して忘れ去られていたがしばらくして思いだし、今ではそこそのサイズの岩程度なら5、6メートルぐらいの範囲で動かせるようになった。

詳細が不明なのでうにょとした何かと呼んでいる。

それはともかくとして数メートル浮き上がりアリア嬢が飛ぶのを待つ。

しばし茫然としている様子だったが、すぐに気を取りなおし飛び上がる。

「ゴスペルさんって何者ですか？」

「わたしにもわからないわ。けどこれだけは言えるわ。万能」

「万能、ですか？」

「そう、動物のくせに料理もお裁縫もわたしよりこなすわ。腹立たしいことにね」

ふっそれくらい造作もない。

うにょとした何かを使えばこの手でもできない物はない。

「はあ、すごいですね・・・」

アリア嬢は素直に感心している。

いい子だ。あとでもふもふしてあげよう。

前を飛ぶ魔法使いどもが結構離れているとはいえまだ空を飛んでいる・・・。

キラン、俺の目が光る。

ルイズ嬢やるかね？やってしまうかね？

「許可するわ。やりなさい！」

イエス、マイレディ。

こういうときのルイズ嬢との意思疎通レベルは異常。

「え、えつなにがですか？」

当然付き合いが短いアリア嬢には分からない。

「アリア大丈夫よ。ちょっと憂さ晴らしをしてるだけだから・・・。
あなたはゆつくりきてちょうだい」

なにか悟ったかのような慈愛に満ちた目をしてアリア嬢にいう。

「さあ、行きなさいゴスペル！」

モチのロンだ。

俺のおもちやをいじめる者どもに天誅を、否！人誅を！

バリア200展開、一部装甲、ダッシュアタックブースターオン、
進路オールグリーン。

行きます！

加速開始！

「え、ちょっとルイズさん、ゴスペルさん！」

そして俺、アリア嬢の使い魔のはずなのにまるでルイズ嬢の使い魔
のよう、不思議だなあ。

アリア嬢に影響が出ないところまで引き離して・・・俺たちは風にな
った・・・。

我をとめられる者などいないわ！！

あつという間に前方の集団に追い付き追い越した。

その過程で「な、なんだ突風が！」「きゃーマリコル又が落ちたわ
っ！」「ぶ、ぶつかる！」などと聞こえた気がしたが完全スルー。

一足先に学院に到着。

風をまとい、優雅に着地する。

「よくやったわ。さすがね」

「ウオン！」

訳：あたぼうよ！

ルイズ嬢と俺は互いに成果を実感する。

「ちよつとすつきりしたわありがとう」

お礼が素直に言える子はいい子。ナデナデ。

「ちよつとくすぐったいってば」

いい子は褒める、悪い子は叱るこれ子育ての常識。育てたことはな
いが。

「う、うう・・・」

おっと忘れていた。

この小僧どうしよう？

「そいつがいたわね・・・。わたしの部屋に運んでくれる？」

まあいいだろう。案内せい。

「こつちよ、ついてきて」

それで、部屋に着くと

「その辺に転がしといて」

といわれたので実行した。

「アリアを迎えに行かなくちゃ」

それもそうだなと尻を突き出した形で突っ伏す小僧を置いて部屋から出ていった。

広場に着くと遅れてきた連中が次々と着地してきていた。

その中にアリア嬢の姿もあった。

こちらの姿を認めると近寄ってきた。

「もう、だめですよ二人とも！」

ぷんぷんといった擬音がつきそうな怒り方だった。

正直言つて全く怖くない。

だが、まったく悪びれた様子のない俺たちに徐々に涙目になる。

俺とルイズ嬢はそこまでいって初めて悪びれる。

すいませんとまったく思っただけですいませんでした。

しばらくもふもふとごまかして、くすぐったいですよとか言い出したら俺の勝ち。

ルイズ嬢がうらやましそうにこちらを見ているが知らん。

それより君らは授業でなくていいのかね？

広場にはもう俺らしいないが。

キョロキョロとあたりを見回す俺の様子に二人の顔が焦りに彩られる。

「アリア！行くわよ！」

「はい、ゴスペルさんは此处で待っていてくださいね〜」

ルイズ嬢に手を引かれアリア嬢が飛ぶように通路の向こうに消えていく。

なんだか急展開な一日だった。

てか、ルイズ嬢友達いたんだな。よかったよかった。

召喚ばーとつー（後書き）

おかしいな・・・まるでルイズの使い魔みたい。
そして気付けば教育係・・・ちよつと書いた時のテンションがおか
しかったようです・・・。

説明と常識（前書き）

そろそろ毎日更新は打ち止めかもしれません。

説明と常識

過程をすっ飛ばして現在、ルイズ嬢の部屋。

小僧説明中。

要約するとこんな感じだ。

俺、平賀才人。高校二年17歳。

名前は才ある人だけであらゆることがオール並み。

負けん気と好奇心が強いけどどこか抜けてるそんな俺。

刺激が欲しくて出会い系に登録したよ。げへへへへ。

登録したけど通信機器のノートPCが壊れたから修理して帰っている途中だったんだ。

そしたら道にファンタジーの塊のような謎の鏡Xが現れたんだ。

持ち前の好奇心を発揮してその鏡に入ってみたんだ。

それで気を失って気が付いたらここにいた。オーマイガー！

要約以上。

「それほんと？」

夜食のパンをついばみつっ、ルイズ嬢が疑わしげに問う。

それはそうだろう。

こんな話をいきなり信じたら詐欺や怪しい宗教に引っ掛かりそうだから教育的指導をしなくてはいけない。

ちなみにまったく関係ないが俺とアリア嬢も夜食のおこぼれにあずかっている。

ハグハグ

人型にならないと買えない加工食品は貴重だ。

「嘘ついてどうする」

サイトという小僧が言う。

まったくもってその通りだとも思う。

嘘をついたところだ意味などないし、この世界において一瞬でこの設定が作れるのなら物書きになるべきだろう。

サイトは窓から外を見てため息をつく。

気持ちは分かる。月が二つもあるからな。

地球人からしてみれば現実を突き付けられているようなものだろう。その後も問答は続き、アリア嬢と俺はなぜここにいるんだろうという気がしてくる。

飽きたから寝たいんだが。

しばらくするとサイトが狂った。

具体的に言っているとカメラを探して何故かルイズ嬢を押し倒し、何故かブラウスのボタンをはずそうとした。

アリア嬢はびびって俺の後ろである。

混乱しているようだったし、実害が対してなさそうだったので初回は見逃してやった。

事実、ルイズ嬢に男のせつない部分を思い切り蹴りあげられていた。

「ほあああああああ……」

とても痛そうである。

ルイズ嬢の脚力は俺との追いかけてそこでそこ鍛えられているはずなのできつと痛い。

ルイズ嬢は追撃を与えるつもりか立ち上がる。

だがサイトのお願「家に帰して……」と弱弱しく口から出た言葉に追撃は取り消しになったようだ。

するとサイトがしつこく異世界から来たというので、ルイズ嬢が証拠を求めた。

股間を抑えつつ立ち上がると鞆からガサゴソと……ノートパソコンを取り出した！

良いもの持つてるじゃないか！って最初に言ってたな。と忘れてた。

ルイズ嬢も俺の後ろで警戒バリバリだったアリア嬢も「なにこれ？なにこれ？」と興味シンシンだった。

かくいう俺も死んでからだいぶん経っていたので何年ぐらい分技術が進歩したのだろうとウキウキしていた。

OSの立ち上がりの時点で自分の使っていたものの2世代前の物だったことに驚いた。

こちらでは軽く20年は過ぎたはずなので、こんなの―たりんの一般高校生がそんなに古いノートをもっているわけがない。

どういうことだ？謎が残った。

ともかく勢いに押されてルイズ嬢は一応信じる？ことにしたらしい。次はルイズ嬢のターン。

サモン・サーヴァント效能の説明。

サイトの奴はギャーギャー言っていたがルイズ嬢の「死んでみる？」発言により黙った。

サモン・サーヴァントトというのはどうやら使い魔が死ぬまで次の召喚ができないらしい。

よかったな才人よ。ルイズ嬢がやさしくて。

どこがやさしいかって？殺されないだけ優遇されてるだろ。

ガクつとうなだれたサイトの視線が自分の手に向かう。

「ああ、それね」

「うん」

「わたしの使い魔ですっていう、印みたいなものよ」

ほーあれが・・・地球にもあったルーン文字みたいな形だな。

または楔形文字とも言う。

サイトの視線がこちらに向く。

ん、なにかようか？

「あれも？」

「たぶんそうよ。昔はなかったもの」

「は、はい。わたしと契約した時に出たものです」

「文字っぽくないな―」

なんだ、何のことだ？

ゴスペルはまだ自分のルーンを見ていません。

「確かにそうね」

ルイズ嬢が近くに寄ってきて目の下あたりを覗き込む。

そこにあるのか？確かに契約の時は顔面が異常に痛かったが。

「これ・・・小さな文字が集まっているのね」

「そうなんですか？」

アリア嬢もよってくる。

いまさらだがやつと空気から脱出できたな。

「あっほんとうです」

「ヘンな発現のしかたね」

ええい、じろじろ見るなうつつとうしい。

体をブルンブルンさせる。

「きやいきなり何すんのよ！」

「うう、ひどいです・・・」

貴様らが悪い。

俺たちが戯れていると考え込んでいたサイトが言う。

「……わかった。しばらくお前の使い魔とやらになつてやる」

「なによそれ」

ルイズ嬢が振り向きいう。

「なんだよ文句あんのかよ」

「口の利き方がなつてないわ。『なんなりとお申し付けください、

ご主人様』でしょ？」

ルイズ嬢は得意げに指を立てて言う。言ってることは厳しい。

アリア嬢の「ちよつと言いすぎですよルイズさん」という発言なん

ぞ何のそのである。

「でもよー使い魔つて何すんの？」

もつともである。

何をするんだろう？俺も知らん。

お願いします先生方。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「どういうこと？」

「使い魔が見たものは、主人も見ることができるよう」

「はあ」

へえ。

「でもあんたじゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」
えばって言うことではなからう・・・。

「君、ついてないなあ」

状況を理解しているのか分からなくなるほどぼけつとした声である。
俺もそう思うがな。

ところでこっちはどうなんだろうか・

「アリアはどうなの？」

「わたしですか？うゝんわたしにも見えないみたいです」

「そっちの君も、ついてないなあ」

カチンときた。

何やら不当に貶められた気分だ。

やってやるうじゃないか・・・。

視覚情報を共有してやればいいんだろ？

根性出せ！俺の中の何かよ！

目だ、目なのだ！開眼せよ！

と無茶ぶりをしてみたら・・・。

「わわっ！いきなり何かが見えました！」

なんとかなったらしい。

蓄積してきたエネルギー総量から考えると微々たるものだが力を使
うな視覚共有。

「うらやましい・・・」

心の底から出てくるような、ゴゴゴとバックに背負っているような
声が出ていた。

普通に怖い。

「つ、使い魔は秘薬とか主人の望むものを見つけてくるんですね
！ルイズさん！」

怖かったのか話題の転換を図った。

アリア嬢・・・君を責めることは俺にはできない。

「秘薬ってなに？」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……」

話題の転換成功。アシスト才人、アリア嬢フアインプレー。

「はぁ」

へえ、そんなことも仕事のうちなのか使い魔って大変だな↑あんたもです。

硫黄ぐらいなら再構成で作れるが・・・コケか、場所と種類を教えてもらえるならってところだな。

「あんた、そんなの見つけてこれないでしょ！秘薬の存在すら知らないのに！」

「無理だ」

努力しようぜ……。

ルイズ嬢は苛立ちながらも言葉を続ける。

「そしてこれが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！でもあんたじゃ無理ね……」

「人間だもん……」

人間でも盾ぐらいにはなるだろ？↑思考がナチュラルにこれ

「……強い幻獣、ゴスペルとかだったら、並大抵の敵には負けないけどあんたはカラスにも負けそうじゃない」

「うっせ」

いやいや、カラスは結構強いと思うぞ？やり方次第では幻獣にもそこそこ戦えるだろう。

目玉ねらったりとか、目玉ねらったりとか・・・俺相手ではただの的だが。

「だから、あんたにもできそうなことをやらせてあげる。洗濯。掃除。その他雑用」

「ふざけんな。そのうち絶対帰る方法を見つけてやるからな！」
頑張れ。

「はいはい。そうしてくれるとありがたいわ。あんたが別の世界と

やらに消えればわたしだって次の使い魔を召喚できるもの」

「この野郎……」

才人よ野郎ではなくて女郎だ。

ん。アリア嬢おねむかね？もついい時間だし、じゃあ帰ろうか。

「ルイズさ〜ん。わたしたちもう帰っていいですか？」

「泊まってるきなさいよ。ゴスペルも一緒に」

「そうですか？じゃあ泊まっていきますう……」

夜に弱いのかね、アリア嬢は？

「おい、俺はどこで寝ればいいんだよ」

ルイズ嬢は床を指さす。

「犬や猫じゃないんだけど」

俺見た目犬だけだな。

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

毛布はくれてやるらしい、投げ渡した。

それからルイズ嬢はブラウスのボタンに手をかける。

プチプチとボタンをはずしていく。

「なな、なにやってんだよ！」

お前はみるな！

「げふう！」

後ろ向きにうずくまる才人。

さて次は……

「寝るから、着替えるのよ」

「ぐっ俺のいないところで着替えるよ！」

「なんで？」

「だ、だってね。まずいだろ！やっぱ！」

「まずくないわよ」

おまえだ！

「あたっ！なにするのよ！」

馬鹿もんが！嫁入り前の娘がなにやっとなるか！

「うう〜なに、私が悪いの？」

当たり前だ！

「魔法使いつてそうなの？男に見られても平気なの？」

「男？誰が？使い魔に見られたって、なんとも思わないわ」

「あぶっ！」

馬鹿もんが！

「なに？使い魔もダメなの？」

コクコクコクコク激しく頭を上下させる。

「わかったわよ……。あんたこっち向いちゃダメだからね」

「わ、わかった」

しぶしぶながら納得したらしい。

ふう、こんな罨が待っていたとは……。

そうして今度は洗濯頼んだとパンツが宙を飛ぶ……。

とりあえずサイトの前に行く前にたたき落とし、こっちを向こうとした才人とルイズ嬢にアタック！

「グハッ！」

「あたっ！バカになったらどうすんのよ」

おまえはすでにバカだ！安心しろ。

「なによこれもダメなの？」

コクリうなずく。

「わかったわよ……。明日メイドに頼むわよ……」

よろしい、もうよからう。

さあ、アリア嬢寝るなら布団におし。

「うう、だっこお」

やれやれしょうがない子だ。

うにょんとした何かで抱き上げ布団へゆっくりと下す。

さて、俺も寝るか。

「あんたはこっちよ」

床に向かおうとしたところでルイズ嬢が自分の隣をぽんぽんたたく。

……いや、それはそれでどうなんだ？毛がつくぞ？

「いいから早くしなさい」

はいはい。よいせつと。

「ふふふ、こうするのも久しぶりね。おやすみなさい」
ルイズ嬢はパチンと指を鳴らし灯りを落とす。

俺もつかれた・・・主にこの数十分が。
だから寝よう。

・・・おやすみ。

説明と常識（後書き）

原文ってどこまで使っていていいんでしょうか？

ちよつと使いすぎてしまった気が・・・。

よければアドバイスください。

そして、常識を正すのに忙しい獣いかがでしたでしょうか？

オリキャラアリア嬢のプロフィールってあった方がいいのかな？

感想お待ちしてます。

おはよう、 ” 俺は ” 元気です。 (前書き)

どうしよう・・・サブタイがっらい・・・。
もっと区切ればつけやすいんだろっけど・・・。
どうしたらいいんだ！な18話です。

おはよう、”俺は”元気です。

コツケコツコーとは聞こえないが雀がちゅんちゅん鳴く程度には朝である。

俺の朝は基本的に早い。

起きても動かないことがほとんどだが。

イメージとしては老成したドラゴンが宝をため込んだ後はぐーたら過ごすようなものである。

意識は覚醒している。

だが動く気力がわかな・・・。

ふんっ！

布団を俺様から奪おうとした愚か者に制裁を加えた。

ルイズ嬢やアリア嬢をニヤニヤ見ている程度なら、なにこいつ気持ち悪い程度であつたが俺の至福の時を邪魔した罪は重い。

「なにしやる！」

なにつて・・・攻撃？

首をかしげるとなぜかため息をつかれた・・・。まあいいか。

しかしもう起きねばならぬ時間か・・・起きるがいい二人とも。

アリア嬢をぺしぺしたたきつつルイズ嬢を布団からたたき落とした。

「ふぎゃ！な、なによ！なにごと！」

朝である。

「朝だよ。お嬢様」

「あさですかあゝ？」

なぜだろう同じ生き物なのにこの反応の差は。

おそらく起こし方の違いです。

「はえ？そ、そう……。つて誰よあんた！」

オイオイもう忘れたのか？頭の弱い子だな。

あーあーふにやけまくった顔がもはや痛々しい。

元が良いだけに残念度も高い。

「平賀才人」

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日、召喚したんだっけ」
ん、アリア嬢？起きろよ二度寝するなよ？

「うにゃ、おはようございます。みなさん」

「おはようアリア」

あいさつが返ってくるがこれは本当に起きているのだろうか？
朝に弱かったのか？アリア嬢よ。

それとも眠るのが遅かったただけか？

「使い魔、服」

才人が椅子にかかっていた服を投げつける。

大変だな才人よ。

まあ頑張るといいと俺は思う↑他人事

「下着」

ハッ！

「あべぶっ」

ルイズ嬢をはたいた後はクローゼットから一番下から取り出す。
なぜ場所を知っているのかって？

そいつは聞かないお約束である。

あれだ、勇者は家探し強盗が合法なんだ。

「痛いじゃない、でもありがと」

俺とルイズ嬢の基本スキンシップはたく攻撃。

ルイズ嬢って実はM？

「服」

「さつき渡しただろ」

確かにそうだな。

「着せて」

バシッまたはたく。

「いだっ」

「平民や動物は知らないだろうけど、貴族は下僕がいるときは自分で服なんて着ないの」

「服ぐらい自分で着ろっつの」
まったくだ。

「あつそ。生意気な使い魔にはお仕置。朝ごはん又キね」
胸を張って勝ち誇る。

悲しくなるからやめておけ。

そして、自分で着るともう一回はたいてうにょんとした何かで着せる。

「ありがと、明日から自分で着ろって？いやよ」

べしべしとだんだん威力を上げつつはたく。

「いだっ、いだっ！ちよつと痛いわよ！わかった、わかったから！」
よろしい。

そしてアリア嬢よ。

突っ伏して寝てるんじゃない！

「わぶっ」

とつとと起きろ！

「ううゝおんぶゝ」

甘えるな！

まったくしょうがない奴だ。

背中に乗せて歩き出す。

ルイズ嬢が「アリアには甘くない？」とか不満たらたら言っているが知らん。

みんなで部屋から出る。

するとタイミング良く前方に並ぶ扉の一つが開く。

出てきたのは女だった。

背が高くサイトと同程度だろう。

肌は褐色で、燃えるように赤い髪をしている。

そして、胸が大きく、胸元を開き、ムダに色気を出していた。

ルイズ嬢と見比べ露骨にため息を吐いてみた。

「アンタ！」といって殴ってきたが今は拳を痛そうに抱えている。
クッククク。

「おはよう。ルイズ。アリア」

ルイズ嬢は痛みでしかめた顔をさらにしかめると、それはもういやそうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「おはようございます。キュルケさん」

いつの間に再起動がかかったのか俺から降りて挨拶をするアリア嬢。
「アリアの使い魔はそっちの子？」

俺を指さし普通に聞く。

「はい！ゴスペルさんです！」

「朝から元気ね」。使い魔にさんづけって、まあ、あんたらしいわね」

「ありがとうございます」

アリア嬢それは皮肉では？良いのかそれで……。良いんだろ？うな、気付かない方が幸せってあるものだ。

「で、ルイズの使い魔って、それ？」

才人を指さし、あからさますぎるほど表情と声音で喧嘩を売っていた。

「そうよ」

「あつはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

ここまで来るといつそすがすがしい。

そこまでルイズ嬢をいじめたいか。

まあその感情は否定できないが……。

そして才人よ。

いくら巨乳でも、そんなに目を皿のようにしてみることはなからう？

「『サモン・サーヴァント』で、平民喚んじやうなんて、あなたらしいわ。さすがはゼロのルイズ」ルイズ嬢の顔に朱がさす。

これは怒りなのか羞恥なのかどちらなのだろうな？

「ルイズさんをいじめちゃだめです」

アリア嬢……。このタイミングでそれは……。

「うるさいわね、アリア！わたしはいじめられてなんかいないから

ね！」

ああ、ほら、落ち込まないで。

君は確かにいい子だよ。機微には聴くなさそうだけど。

よしよしとアリア嬢を慰めていると散々バカにして今度は自分の使い魔を紹介するらしい。

「フレイムー」と部屋に向かって呼びかけるとのっそりとザコ筆頭である火トカゲが現れた。

こいつらが集まると暑いからあまり好きではない。

「うわあ！真っ赤な何か！」

才人がトカゲから距離を取る。声に喜びのニュアンスは含まれていない。

ビビったらしい。

「ガアガアアガ」

訳：おいこら、その火トカゲ俺に喧嘩売ったら山にいた火竜どもみたいになることは理解しておけ。

「キュルキュルル」

訳：わ、分かりやした。旦那には刃向いませんのでご勘弁を。

「ガガガアアア」

訳：それだけはいつときたくてな。まあほどほどに仲良くやろつや。飽きてきたのでいかは訳のみ。

F：へい、よろしくおねげします。

G：おう、よろしくな。

F：ところで旦那が火竜山脈に出るといふ最強の獣殿でよろしいんです？

G：最強の獣？それは知らんが火竜を定期的に狩っているのは俺だな。

F：やはりですか・・・

G：なんだ、なんだ？どんな感じに伝わっているんだ？

F：なんでも火竜50匹を同時に落としたとか、山を半壊させたりとか、

隕石を降らせたりとかですかね？これ実話ですかい？

G：あゝ確かにやったなそんなこと。

F：マジですかい……。

G：事実だな。自分でも暇だったからって少しやりすぎたと思ってる。今後も自重はしないが。

F：暇だったから……。俺旦那には逆らいやせん。

G：懸命だな。

F：そろそろご主人たちの話も終わりそうっすね。

G：だな、またそのうち会う機会もあるだろう。じゃあな。

F：へい。

いまさらですがハルケギニアには先住言語という謎言語が存在しており大体の動物が意思疎通ができるのです。

苛烈な口争いから外れているうちのご主人のもとへ向かう。

「キュルケさんの使い魔さんとお話してたんですか？」

話……。まあ話をしたな。

「どうしてキュルケさんとルイズさんはあんなに仲が悪いのでしょうか？」

運命なのだよ。

「おうち同士の中が悪いという話は聞きましたけど……。」

いや、じゃあそうなんだろ。

「不思議ですね？」

不思議でもなんでもないと俺は思う。

「あつキュルケさん先に行行ってしまいましたね。わたしたちもご飯を食べに行きましょうか」

そうだな、ただ飯が食える……。あれ？俺の食事って何になるんだ？なんでも食えると思うとか……。食えない物は存在しないが。

「ルイズさん。早く行きましょう」

「そうね……」

不安が募る。

人の文化圏で生肉なぞ食べたくはない。

あれは、うまくない。

才人を見上げると食べ物に関する不安はないらしく、むしろわたし閃きましたとでもいわんばかりの顔に頭のうえで電球が光る幻視をした。

結論から言うと俺の食事は生肉の予定だったらしい。

食べたくない駄々をこねたら食堂に連れていつてもらえた。

「才人が動物のくせになんてぜいたくな・・・」とか言っていたが知らん！

俺を一般生命体のカテゴリーに当てはめるな。

食堂の床に皿を用意されムダに高そうな絶対に残る量の食事の一部が与えられた。大盛りである。

ルイズ嬢一行の方に目を向けると・・・。

そこには「ちょくん」とでも擬音としてつきそうな才人がいた。

床に置かれているのは俺の物と比べるのもおこがましいほどわびしい食事があった。

才人よ強く生きるんだぞ・・・。

「ちょっと待て！ルイズ！あれは！あれはどうなの！」

才人がこちらを見て喧嘩を売ってきた。

「よそはよそ。うちはうち」

「動物以下・・・」

良い言葉だよなルイズ嬢。

そして才人よ強く生きる・・・俺のはやらん。

「ルイズさんそれはちょっと・・・ひどいのでは？」

「アリアさん！もっと！もっと言ってやって！このサドご主人様に！」

「ひどくないわよ。むしろここで食べさせてあげること感謝してほしいくらいだわ」

「そ、そうですか・・・」

アリア嬢リタイア。

才人よ、強く生きるがいい。

俺の物は俺の物。

嘆いている物は無視して食事に戻ることにした。
かぶりつくのは床が汚れそうだと思ったのでムダに技巧をこらして
獣ハンドでナイフとフォークを使い食べた。

その様子が珍しかったのか周りにいたガキ共がアリアに許可をもら
い俺に貢いでくれた。

結果、総計でもともの3倍は食べたと思う。
才人の嘆きの顔が面白かった。

おはよう、”俺は”元気です。（後書き）

サブイベント入れてて気づきました。

あれ？全部やるうとしたらまずくない？

次から気をつけようということにしました。

なのでどうしてもやってもらいたいというイベントがございましたらお知らせください。主要イベントはやりますのであしからず。外伝も可。

それとアリア嬢のプロフは必要だと感想で言われましたのでついでに作りました。

名前：アリア・ラ・フォロン・ド・エーデルフェルト

年齢：16歳

魔法：水のトライアングル？（予定、変更の可能性あり）

身長：ルイズと同程度

胸囲：シエスタ並み

見た目：金髪碧眼。イメージとしてはハイスクールD×Dのアーシアから持ってきました。

備考： トリステインの田舎貴族の両親のもとに生まれる。

両親に溺愛されていたため世間知らずなところがある。

家には平民の使用人が多く、貴族貴族しくは育てられなかったため、周りの平民嫌いやルイズに対する扱いに心苦しく思っている。

両親が動物嫌いので昔からペットが飼いたかったが言い出せずにいた。

獣、警戒される（前書き）

どうも、今日も今日とて更新です。

最近どうにもほとばしる何かが抜けて書いている今日この頃。
何となくで19話です。

獣、警戒される

食事も終わりご機嫌の俺は散歩に行こうと外に出ようとした。

「ゴスペルさん待ってください!」

なんだろうかアリア嬢よ?

食事が終わったのでこちらとしては当面、用はないのだが?

「授業で使い魔を連れていかなければいけないのです」

ふむ、最初くらいは付き合おう。

ルイズ嬢たちは先に向かったのか、すでに食堂にはおらずこちらも教室を目指すことにした。

「こつちですよ」と先導するアリア嬢が大変ほえましかった。思わず足をかけてしまうほどに・・・。

いろいろあつて教室に到着すると、石造りの講堂がそこにあった。年月を感じさせる冷たい石の感触。

明かりを窓から多く取り入れようとする構造。

ああ、歴史的建造物・・・。

文明が発展していなくてよかったと思う数少ない機会である。

「ゴスペルさんどうかしましたか？」

アリア嬢に声をかけられはつとする。

なんでもないと首を振り席へと向かう。

ルイズ嬢の近くは何となく近寄りがたい雰囲気が出ていたので一個下の列の本を読んでいる青髪の少女の近くに陣取った。

それにしてもこの世界はずいぶん背が低い16歳が多いな。

このちみっこも同じクラスということはやはりそういうことなのだろう。

稀にキュルケ嬢のような背の高い女性が生まれるのだろう。

「あつタバサさん。おはようございます」

青髪幼女はタバサというらしい。

アリア嬢の挨拶にちらっと、本から目を上げこちらを見ると再び本に目を落とした。

知識欲が旺盛なのだ。好感が持てるぞ。

いつもの事なのか特にリアクションをせずにアリア嬢は真面目にしている。

そんなだから・・・。

つい、いたずらがしたくなる。

しかし、いいいたずらか思いつかなかったので威力を最低限まで落としたミニボムをあちらこちらにセットした。

すこしこちらをジロジロと見てくるタバサ嬢は気になったが気にしない。

うむうむと自分の行いに感心しているうちに中年の女性が入ってきた。

ふくよかな・・・自分を偽るのはやめよう。

昔ながらの魔女ファッションをした太った中年のおばさんであった。「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシユブ

ルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとてもたのしみなのですよ」

ほう、気が合うなおばはん。

俺ももういい年だというのにあちこち見ると尻尾がぶんぶんいうのが抑えられん。

「おやおや、変わった使い魔を召喚したんですね。ミス。ヴァリエール」

おお、あんたもそう思うか、やはり気が合うな。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

・・・さて、命の貯蔵は十分か小僧？

「ゴスペルさん。どうかしましたか？」

ゆらりと立ち上がる俺を見てアリア嬢がどことなく青い顔をする。

だってな？あれ一応うちの子だしね？報復って大事だと思うんだ・

・。

・・・だから尻尾を放そうかアリア嬢？

「だ、だめですからね？」

えー。ぶーぶー。

「違うわ！きちんと召喚したもの！こいつが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろ？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

黙らせるのに一番いいのは何かな？リュウセイゲンかな？

「ダメ」ですからね？」

「ミセス・シュヴルーズ！侮辱されました！かざつぴきのマリコル又が私を侮辱したわ！」

ほう、かざつぴき・・・お似合いだな。

「かざつぴきだと？俺は風上のマリコル又だ！風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪でも引いているみたいなのよ！」

なんだ侮辱か・・・。

ルイズ嬢・・・グッジョブ。

そして風上にいられると汗臭そうだからせめて風下にしてもらいたいと俺は思う。

そして、ルイズ嬢とかぜっぴきの間に火花が散る。

いいぞーもつとやれー俺にも参戦させろー。

取っ組み合いでも始まるのかと思いわくわくしていたら。

ミセス・シュヴルーズが杖を振る。

すると二人ともすっとんと席に座った。

なにやったの？なにやったのー？↑おもちゃを見つけた子供のよう・・・。

「ミス・ヴァリエール、ミスタ・マリコルヌ。みつともない口論はおやめなさい」

ルイズ嬢はしょぼんとしている・・・さあ、あのガキイタメツケヨウ。

ダカラシッポヲハナソウカ？

「ひう、だ、だめですう」

「お友達をゼロだのかぜっぴきだのと呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

笑いが漏れる。

サンダーボール、セトアップ・・・。

そのとき、シュヴルーズ教諭は、厳しい顔で教室を見回すと杖を振った。

笑う生徒たちの口はどこからか出現した赤土に塞がれる。

「あなたたちは、その格好で授業を受けなさい」

笑いが消え去る。

シュヴルーズ教諭・・・グッジョブ

さて、サンダーボール消すか。

「では授業を始めますよ」

そうしてまともな教師シュヴルーズによる授業は始まった。ひたすらに世界を放浪していたので久しぶりに受ける授業というのはなんだか・・・無性に懐かしかった。

内容だけ聞いていると貴族は技術職のように感じた。

ただ・・・俺は畑で働いている魔法使いを見たことがないと言っておこう。

魔法なんて便利なものが使えるんだからもっといろいろな技術が発達していてもいいと思うのだが。

そこどころどうなのだろうか？

考え込んでいるとどうやらルイズ嬢が前に出て実施することになったらしい。

金とか俺でも作れるのできつと大丈夫だろう。

しかしそんな俺の思惑とは別に周りは不穏な空気に包まれる。

キュルケ嬢がシュヴルーズ教諭に忠告している。

しかし、シュヴルーズ教諭に聞き入れる気配はない。

「ルイズ。やめて」

キュルケ嬢・・・顔面蒼白である。

そんなにまずいのだろうか・・・？

そんな空気の中、今勇者が立ち上がる・・・。

「やります」

そして教卓へと歩を進める。

なぜだろう？さきほどからダースベーターのテーマが聞こえる気がする。

一歩一歩を踏みしめるように緊張の面持ちで向かっていく。

そして永遠かと思われる沈黙の中・・・ルイズ嬢がシュヴルーズの横に立つ。

ん？そこな青髪少女よ。

なぜ机の下に回り込む？

「危険」

そうか危険か・・・やはりそういうことか・・・。

アリア嬢よ。君も机の下にもぐっていなさい。

「え？なんですか？」

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

時間がない・・・いいから潜れ！

「きゃあ！な、なんですか」

無理やり引きずり落とし机を盾にする。

対衝撃体制！急げ！

ルイズ嬢は杖を振り上げると、目をつむり、短くルーンを唱え、その杖を振り下ろす。

ええいつ間に合え！ドリームオーラ展開！

その瞬間上に置かれた机ごと爆発した・・・。

凄まじい爆風が教室を蹂躪する。

その衝撃によりあちらこちらに設置してあったミニボム達が・・・。

(あつ)

連鎖爆発が起こる・・・。

爆発源の近くにいたシュヴルーズ教諭は黒板にたたきつけられている。

尊い犠牲である。

ルイズ嬢も同じく黒板にたたきつけられ残骸に埋もれている。

・・・尊い犠牲である。

生徒席の方は無事かというと爆発から派生した使い魔式ピタゴラス

イッチにより、阿鼻叫喚の地獄絵図・・・。

爆発の被害も軽いものとはいえない・・・。

主にミニボムが原因で・・・。

アリア嬢はドリームオーラ圏内にいたため無事のようにあるが・・・。

キュルケ嬢が立ち上がりルイズ嬢を指さす。

「だから言ったのよ！あいつにやらせるなって！」

「もう！ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーが蛇に食われた！ラッキーが！」

ちなみにラッキーとは使い魔。ピタゴラススイッチによりヘビへとさよならしたカラスの名である。

生きているか？と前方をみるとシユヴルーズはときたまぴくぴくと痙攣を起こしているの、死んではいないらしい・・・。

お悔やみ申し上げる。

その顔を煤だらけにしルイズ嬢がガレキの中ムクリと立ち上がる。

大騒ぎの教室を一瞥すると

「ちよつと失敗したみたいね」

さすがの一言である。

当然、他の生徒たちから猛然と反撃をくらう。

「ちよつとじゃないだろ！ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロじゃないか！」

ルイズ嬢の前途は多難である。

飽きたので言い争いはスルーすることにしてアリア嬢のそばで寝る。

「お疲れ様です」

うむ、苦しゅうない。

青髪少女がこちらをじろーっと眺めてくる。

・・・何か用かね？

「あなたは何者？」

・・・普通動物に何者かなんて聞かかね？

俺の前途も多難そうである。

獣、警戒される（後書き）

話を忘れてきているのでアニメでも見ようかなと思います。

フーケ・・・マジでどうしよう。

それと、感想ありがとうございます。大変励みになります。はい。

決闘（前書き）

どうもお久しぶりというほどでもないけれどお久しぶりです。
今回は展開に非常に迷いました。

正直投げかけました。

頑張ったので読んでください。

決闘

あのあと、ルイズ嬢は罰として掃除を命じられていた。
正直頑張ってくれとしか言いようがなかった。

アリア嬢は手伝いたそうにしていたが他の授業があつたためあえなく断念。

ルイズ嬢はきつと働かないので頑張れ才人、と俺は思った。

去っていく俺たちを見てルイズ嬢は仲間になりたそうにこちらを見ていた、が、とりあえず振り向きざまにため息をついておいた。

なにやら二度目の爆発音と被害者の悲鳴が聞こえた気がしなくてもないが俺はきつと何も気づかなかった。

イベントも終わったので広場で昼寝をしていたかったが、アリア嬢がついて来て欲しがつたのでしぶしぶと教室移動につきあつたのであつた。

ああ、俺は何と律儀なのだろう。

数度の昼寝を終えいい加減腹具合的にいい時間になった。

するとアリア嬢が

「きつともう終わっていると思うのでルイズさんたちを迎えに行きましょう」

とのたまつたので現在それに同行している。

「あつルイズさ・・・」

発見したようである。

向こうもさすがに食堂へ向かおうと移動を開始していたようである。しかし、何やら様子がおかしいというか・・・端的に言うと才人からは陽気なオーラが、ルイズ嬢からは・・・怨念じみた雰囲気を感じ取った。

あれは・・・爆発寸前である。

それを見てアリア嬢も言葉に詰まったのであろう。

陽気な才人の声が聞こえてくる。

「ゼロのルイズ。なるほどねえ。言い得て妙ですねえ。成功の可能性ゼロ。それでも貴族すんばらしい」

ルイズ嬢は無言であった。

先ほどから言っているがあれを見てなお才人は陽気に浮かれていた。ある意味すごい。

生殺与奪を握っている相手にあの態度・・・やるじゃないか。

「才人さん・・・」

アリア嬢ですらのちの展開が読めているらしい。

終わったな才人よ。

「ルイズお嬢様。この使い魔、歌を作りました」

恭しく小馬鹿にした様子で才人は頭を下げている。

「歌ってごらんない？」

無表情である。

あれは許容点を越えてなお耐えている表示である。

散々俺が小馬鹿にしてきた甲斐あってルイズ嬢は大変我慢強くなった。

お父さんはうれしいよ。

誰がお父さんとか言う突っ込みはともかくとしてそろそろ限界のようだ。

才人よ・・・勇者だな。

「ルイルルルイズはダメルイズ。魔法ができない魔法使い。でも平気！ゼロのルイズは女の子だもん」

自分で言って才人は爆笑している。

ぷぷぷぷぷ。

才人め勇者すぎるぞ。ぷくくつ。

いやー道化ってはたから見ていると楽しいものだな。

「才人さん・・・いいすぎです」

おや、アリア嬢の不興も買ったらしい。

才人・・・味方が減ったぞ！おめでとう！

ルイズ嬢に視線を移せはプルプルと震えている。

「こここ、この使い魔ったら、ごごご、ご主人様に、ななな、なんてこというのかしら」

声まで震えている・・・相当我慢していたようだ。

俺とやる時は基本的にすぐ怒ってすぐ追いかけてここに発展するからな・・・新しい。

「あの、もしかして怒ってます？それも・・・猛烈に？」
さすがである。

まだ火の勢いが足りないと感じたのか自分で油を注いでいる。
少し見直した。

「ゼロっていった回数だけご飯又キ！」

「うわあ！ごめん！言いすぎた！もう言わないからそれだけは！」
往生際が悪い才人はルイズ嬢へとすがりつく・・・はたから見ていると特殊な趣味の人のようだ。

「ダメ！ぜえーったい！ダメ！これ絶対！例外なーし！」

才人強く生きるよ。

まあ、今回は自業自得だけだな。

寸劇を見た後、何事もなかったようにルイズ嬢と合流し食堂へ向かう。

アリア嬢の中で先ほどの事はなかったことにされたらしい。

ただし、才人好感度マイナスを残して・・・。

食堂でエサを与えられないサイトに対してにっこり笑ってスルーしていた。

女というのはこれだから恐ろしい。

もちろん俺はきちんと食事を取った。

いや、まあ、食べる必要性はないのだが、嗜好品だから。

才人は気がつくといなくなっていた。

心底どうでもいいが。

そして現在デザート待ち。

まだかな♪まだかな♪

「あんた本当に動物らしくないわよねえ」

なにやらあきれた様子でルイズ嬢が言う。

「いいじゃないですか。かわいいですよ?」

かわいいといわれても別にうれしくはないが、よいということには賛成である。

「というかデザートはまだか?」

ざわざわと先ほどからうるさいが。

「あれ才人さんじゃありませんか?」

アリア嬢の発言によりそちらの方向を向く。

「あのバカなにやってんのよ!」

何やら才人が決闘を挑まれているらしい。

なにがあつた!?

さすがの俺も急展開すぎて少しついていけないぞ。

よくよく話を聞くとイラつときた才人が二股バカに二股してんじゃね?よバカ!的なことが起こって二股が露見したバカが平民の分際で!ということになったらしい。

ばれる奴が悪い。

真理である。

二股を隠す技術もないのに二股をするのが悪い。

真理である。

二股が許されるほどの甲斐性がない奴が悪い。

真理である。

イコール貴族のバカが悪い。

頑張れ才人、今回限定で応援してやろう。

俺は女の涙が嫌いだ。

嬉し泣きと俺がいじめて涙目にしたときは別だが。

ルイズ嬢とアリア嬢が必死に思いとどまるように言っているが聞く様子がない。

すこし見損なっていたかもしれない。

魔法というチートを使ってくる相手に挑みかかるとは・・・なんとバカなんだろう。

いやきつと何か考えがあるに違いない。

何やらムダに自信にあふれている気がするし。

というわけで決闘場であるヴェストリ？だかの広場へとやってくる。

「とりあえず、逃げずにきたことは、誉めてやろうじゃないか」

気障である薔薇の花とかもって何がしたいんだろうか？ぶっちゃけ非常に気持ち悪い。

「誰が逃げるか」

そこでルイズ嬢が二股男へと駆け寄る。

「ギーシュ！」

「おおルイズ！悪いな。君の使い魔をちょっとお借りしているよ！」

「いい加減にして！大体ねえ、決闘は禁止されているじゃない！」

「禁止されているのは、貴族どうしの決闘だよ。彼は平民だ。問題はない」

ルイズ嬢は言葉に詰まる。

いや、普通そういうのは決闘の禁止とかいろいろ省略されていていかようにも解釈できるという落ちじゃないのか？

最初から”貴族どうしでの”決闘の禁止とわざわざ明記しているのか？

なんというお役所仕事・・・。

「そ、それは、そんなこと今までなかったから……」

「ルイズ、もしや君はその平民にその乙女心を動かしているとか？」

気障である。言い回しが気色悪い。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔がみすみすボロクソにやられるのを黙って見ていられるわけじゃないじゃない」

ルイズ嬢、激怒である。

「ボロクソって・・・」

才人よ。その発言に関しては俺もやや同感である。もう少し言い方ってものはなかったのだろうか？

「君が何と言おうと、決闘はもう始まっている！」

先手必勝よろしくその発言で才人が駆けだす。

反応は買うが、決闘というからには最初ぐらいきちんと音頭をとって始めようぜ二人とも。

二股男——ギーシュは走る才人をニヤニヤときしよい笑みで見つめると手に持った造花を振った。

花びらがひらりと一枚宙を舞い、地面から女騎士型甲冑が生えてくる。

これだから魔法は見ごたえがあつて困る。

（しかし何故に女型？）

俺の素朴な疑問はさておき、それが才人の前に立ちふさがる。

「うわ！」

いやなんでもありな世界でそこまでビビっちゃいかんだろ。

順応性が足りんぞ。

「僕の名は青銅のギーシュ。したがって青銅のゴーレム、ワルキュレーがお相手する」

全身の出現と同時にそのゴーレムは駆け出す。

思ったよりは俊敏である。

そしてそのまま吸い込まれるようにサイトのボディへと拳が収まる。才人は腹を抱えてうずくまる。

「き、きたねえぞ」

それを聞いて俺は思った。

（ああこいつ、本物のバカだった・・・）

まさかの展開である。

まさか勝算があると思つて挑んだと思つたのに無策だったとは・・・予想外にもほどがある。

本物である。本物のバカである。

俺の期待を返せ！

「あのゴスペルさん？今は心配するところだと思つのですが・・・なぜ怒っているんですか？」

アリア嬢が何か言っているがなんかもうどうでもいい。

やる気がうせた。

才人とかマジどうでもいい……。
帰っていいかな？

「僕は貴族だ。魔法を使って戦うのは当然の事だ」
確かに当然だ。で、帰っていいかな？

「わかったでしょ？ 平民は絶対メイジには勝てないのよ」
「どいてろ」

才人が立ち上がる。

ルイズ嬢の親切に何たる仕打ち。で、帰っていいかな？

「ほう、手加減が過ぎたか」

割と本気で感心しているようである。

「いきなりだったから油断したただだよ」

やせ我慢にもほどがある！

「どうして立ち上がるのよバカ！」

「ムカツクから」

「えっ？」

「メイジだか、貴族だか知らねえけど、おまえらムダに威張りやが
って」

「なに訳わかんないこと言ってるのよ！」

ククッ

「まあ、ルイズの持ち物を壊しちゃ悪いし、ここで謝れば許してや
るよ」

「バーカ、全然効いてねえよ。おまえの人形弱すぎ」

ククッバカだ！ バカがいる！ しかし、こういうバカは嫌いじゃない
ぞ？ その根性が本物かどうか見せてもらおう。

「そうかい……」

ギーシュの顔が怒りに染まる。

そして一方的な暴虐が始まるかと思われたとき、俺は割り込む。
ていつ。

才人に向かうワルキューレを弾き飛ばす。

「なっ僕のワルキューレが・・・！」

「ゴスペルさん！」

才人の前に立つ。

「なんだ、おまえも止めに来たのか？」

「いやいや、そんなつまらな・・・無粋なことをするわけがないじゃないか。」

やる気があるというなら力を貸してやるよ。

—— ムラマサブレード招来

なぜか空から一本の日本刀が飛来する。

なぜ空？喚んだ本人にも分からない。

「使えっていつのか？」

やる気があるならな。

「ちよつとあんた！なにやってるのよ！」

「変わった剣だね。まだやる気があるというのならそれを使ってもかまわないよ。その気がないなら僕にこう言うんだごめんなさい、とね」

「ふざけないで！」

才人が刀に手を伸ばそうとする。

「ダメ！ダメよ！これ握ったら本当にギ―シュは容赦しないわ。いい、これは主人のわたしの命令なんだからね！」

そしてそれをルイズ嬢が慌てて止めにかかる。

やっぱりなんだかんだいって甘いなあ。

「俺は元の世界にや、帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」

独り言をつぶやくようにサイトは言う。

その瞳はルイズ嬢すら見ていない。

「だからなによ！」

「寝るのは床でもいい。飯はまずくたっていい。しょうがねえからなんだってしてやる」

そこで一度言葉を区切り才人はルイズ嬢を振り払い刀をつかむ。

「下げたくない頭は、下げられねえ！」

言葉と共に思い切り引き抜く。

才人のその行動にギャラリーから歓声上がる。

暇人どもめ。

刀を抜いたサイトに再びワルクューレが襲いかかる。

そして才人がワルクューレを一刀両断・・・あれ？

いやたしかにダメージがあるからムラマサブレードを選択したが、武器は攻撃力が上がるだけで反応速度とかには影響しないはずなんだが・・・。

才人の左手——ルーンが光り輝いている？

もしやあれの効果か？俺のこれにも何か効果が？

謎だ謎が増えてしまった。

焦ったギーシュが慌てて薔薇を振り花びらを落としワルクューレを造り出す。

その数六体。

先ほどまでのサイトには必要ないと一体しか出していなかったのだろう。

ワルクューレたちが才人へと踊りかかる。

あわや才人絶体絶命かのように見えるが、才人はその手に持った刀を高速で振りぬきワルクューレたちを真つ二つにしていく。

先ほどまでとはまるで別人。

その運動性能は俺に匹敵するやもしれん。

すべてのワルクューレを斬り伏せると転身。

ギーシュの顔面へと鋭い蹴りを炸裂させる。

ギーシュは吹き飛び、才人が追撃に出ようと跳躍するのを見ると、頭を抱える。

ザシユツと耳元で音がしたのだろう、背筋の凍る思いをしながらギーシュはおそろおそろまぶたを持ち上げる。

ひらけた視界にはギーシュの顔の横に刀を突き立てたサイトが映っているはずだ。

「続けるか？」

才人はつぶやくように言う。

ギーシュは首を振り否定の意を示す。

戦意は完全に喪失したようである。

「ま、参った」

震えた声でギーシュは言った。

様々な思いの交錯した決闘は終わった。

この一件を始めとしてこれからもトラブルは続いていくのだろう。と感慨にふけてみた。

正直歓声がうるさい。耳がよいのだからやめてほしい。

ルイズ嬢とアリア嬢が才人へと駆け寄って安否を確認している。

才人の奴は先ほどまでへたっていたというのに刀を握ったとたんあれである。

一体どうなっているというのか。

とりあえずムラマサブレードは回収しておこう。

才人の手の中にある刀は霞のようにその存在感を薄れさせ消えていく。

そして完全に消えたと同時に。

「あ、あれ？」

ルイズ嬢にのしかかるようにして崩れ落ちた。

「ちょ、ちよつと！・・・寝てるし」

「ルイズさん大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわよ！重いからこれどかして！」

「は、はい！ゴスペルさん手伝ってください！」

やれやれ人使いの荒いご主人だ。

決闘（後書き）

なんか微妙です。

このままキュルケまで言っ飛ばさおうかと思ったのですが長いかなと思ったのでわかることにしました。

あまり間をおかずにアップできるといいな。

なんだか書いている途中から小説とアニメが混じりました自分でも何書いているか分からない。

良いんでしょうか？

夜（前書き）

ども、続きなので同じ日に更新してみました。
日を分けた方がよかったですかね？

夜

そして夜。

何故またルイズ嬢の部屋にいるのでしょうか？

そして昨日とは違いアリア嬢も着替え等準備万端であるし。
疑惑に満ちた視線でアリア嬢を見る。

「一人で寝るのってさびしいじゃないですか」

アリア嬢は甘えん坊だったらしい。

ルイズ嬢的にはどうよ。

「あんた、冬あったか、夏涼しいじゃない」

カイロ兼アイスノンですか・・・いいけどな、別に。

確かに冬は体温上げて夏はちよつと冷たいくらいまで下げているけどな！

そのときぐうぐうと抜けた音が鳴る。

寝ていてなにも食べていない上にイベントがあつて忘れていた怒りがぶり返したからなご愁傷様。

「あの「ダメ」まだ何も言っていないんですが・・・」

「まだ、昼と夜の二回分抜いただけでしょ。あと二回はご飯又キ」

「カウントしてんのかよ・・・」

「さすがに四回は抜きすぎではないでしょうか？」

アリア嬢はやさしいな。

「アリアはやさしいわね。でもダメ。決闘とかご主人様無視してやつちゃうし？」

ルイズ嬢は非常である。

俺的には死なない程度では好きにやれ。である。

さて寝る準備が完了したな。寝るか。

ルイズ嬢も外見てないでサクッと寝ろよ。

と、そんなルイズ嬢にサイトが忍び寄る。

「これで俺が餓死したらどうすんだよ？使魔の管理もご主人様の

義務なんだろう、あん？そこにとどうよ、ねえ、ご主人様、ねえねえねえ！」

おまえの厚かましさに俺、脱帽。

「汚いっば飛ばさないでよ。もうわかったわよ……今回は特別に勘弁してあげるわ」

「よかったですねえ」

そだな。

「えっマジで！ああ、お優しいごしゅじんさまあ。もうゼロなんて言いません。たとえ魔法がゼロだろうと、胸がゼロだろうと、ええ、言いませんとも」

あ、これは終わった。

ギリリ、ルイズ嬢の目が鋭く光る。

「胸が……なんですって？」

「しまった」

「ご愁傷様です」

アリア嬢も意外と容赦がなかった。

もしくはすでに誰か踏んだことがあったのだろうかその地雷。

「やっぱ、ご飯又キ！プラス、今夜は部屋で寝るの禁止！」

今夜は冷えるぞー？才人凍死するんじゃないだろうか？

さすがに可愛いそうである。

全身筋肉痛並みには痛んでいるはずなので。

そうして才人はワラと共に蹴りだされる。

「ルイズさん。さすがに死んじやうと思うのですが……」

「別に反省したら入れてあげるわよ」

「ルイズさんはなんだかんだ言ってやさしいですよね」

まったくである。

「な、なに言ってるのかしら！さっさと寝るわよ！」

焦ってしまっただけなんだかとて……からかいたい。

「そうですねえ。わたしもう限界です。才人さん忘れちゃだめですよ」

パタリそんな擬音がつくぐらいすやつとアリア嬢は眠った。

「はあ……。この子は……。」

気持ちは分かる。毒気が抜かれるのだよこの子には……。

「ゴスペル、寝ちゃってたら起こしてよね」

了解した。

――数分後。

才人があの火トカゲにさらわれる気配がする。

問題はないので静観をする。

しかし、さらってどうするのだろうか？

利用価値があるとは思えない。

――さらに数分後。

「そろそろいいかしら？」

いいんでないか？どうせいないし。

ルイズ嬢が扉をあける。

「ちよつとは反省した？あやま……。ってなんでいないのよ！」

遅いぞルイズ嬢。

開けた時に気付こうよ。

「ゴスペル！あのバカどこに行ったか分かる！？」

まあ分かるが……。外に出て扉の一つを見つめる。

「あそこ？あそこは……。あんつのバカ！」

ズカズカと扉に向かうルイズ嬢。

帰っていいかね？

アリア嬢の横で寝てくるよ。

踵を返し部屋へと向かう。

ガシッ

おや？

「あんたも来るのよ！」

なぜ！？

めんどくさい……。

「いいから行くわよ！」

引きずられキュルケ嬢の部屋へとやってくる。

なぜ俺が・・・。

バンッ威勢のいい音を立て扉が開かれる。

「あら？」

「ルイズ」

間の抜けた顔のサイトがキュルケ嬢に押し倒されている。

「キュルケ！」

「あら、取り込み中よ、ヴァリエール」

それは失礼した。

では！

「あんたは帰らないの！」

なぜいる必要があるし。

「いいからいなさい」

はい。

「ツエルプストー誰の使い魔に手を出してんのよ」

「しかたないじゃない。恋と炎はフォン・ツエルプストーの宿命。

恋に身を焦がすことこそ本能なの」

情熱的だな。いうほどサイトを好いているようには見えんが。

ルイズ嬢はサイトを見やり一言。

「来なさい」

そうだ。サクツと帰ろうそして寝かせろ。

「待って！彼はあなたの使い魔かもしれないけど、れっきとした人

間よ！恋路を邪魔するなんて横暴じゃない！」

ふむ、一理あるな。

そしてキュルケ嬢はその豊満な体をサイトに押し付ける。

「うわ！」

才人は驚くがそれは一瞬の事で自分の顔にあてられた胸に、バスト

に鼻の下を伸ばす。

言いなおしたことに深い意味はない。

「ねえ、才人」

すっかりたぶらかされた才人はキュルケ嬢の望む言葉を吐く。

「そ、そうら。おうほうらぞお」

舌が回っていない。

ああ、男とはなんて哀れな生き物なんだろうか……。

あつ俺の事は一般大衆との比較対象にはならないのであしからず。

ルイズ嬢がプルプルと怒りに震えている。

「そ、そう」

そして気を静めるように息を吸い込み言う。

「でもあんた、朝になったら十人以上の貴族に串刺しにされるわよ」

「えっ？」

ふむ、道理だな。ここまで気の多そうな女はさぞ男を困っているだろう。

才人の目が泳ぐ。

理解できるものがあつたのだろう。

それともボロボロな窓の様子からみてすでに何かあつたのか？

「た、確かにいろんな意味でやばい、かも……」

やはりあつたらしい。

「もう一度言うわよ。来なさい」

すべてを理解した才人は名残惜しそうに立ち上がる。

「あらお帰りになるの？」

瞳を潤ませ上目遣いと言うキュルケ嬢に才人の動きが止まる。

……女こわい。従姉のあいつ怖い……。プルプル。

何やらトラウマを刺激される俺。

一足先に帰っていいですか？

だめですか。そうですか……。

止まった才人の耳を引っ張り正気に戻すルイズ嬢。

「いつもの手なのよ。正気に戻りなさい」

なおも才人は痛がつているが……早く帰ろうよー僕おうち帰るー。

そしてサイトを引きずるように俺たちは部屋を出る。

「ふんっ、まだあきらめないわよ」

とても怖いセリフが聞けた。

女こわい。

動物でよかったと思う今日この瞬間。

部屋に戻るとルイズ嬢は部屋に鍵をかける。

・・・さて、俺関係ない。

アリア嬢。寝よ寝よ。

「まるで盛りのついた犬じゃないの！」

怒髪天を突くというのだろうか、不可視の何かがルイズ嬢の髪を持ち上げる。

つかつかつかと才人の方へ向かって歩くルイズ嬢。

「ごめん！」

そしてそのまま通り過ぎる。

しかし本当の恐怖は此処から始まるのだ。

スツ引き出しから何かを取り出すルイズ嬢。

「なにそれ？」

「乗馬用の鞭よ」

「ムチ？」

「わたし間違ってたわ。あんたをつい人間扱いして」

・・・まあ人それぞれだろう。

「うそつけ！」

アリア嬢。なんかルイズ嬢が怖いのだ。

「ふふふ、ゴスペルさんは甘えんぼですね」

君はあれが怖くないというのかつ。

さすがはご主人。

「よりによってツエルプストーの女になんて尻尾を振るなんてえー

ーーーーツ犬———ツ！」

バシンツルイズの一振りで床板が破損する。

「ひう！お嬢様どうかお気をお静めに・・・」

「あ、甘かったわ、のの、野良犬なら、野良犬らしく扱わないとね」

こら犬に失礼だぞ。

「ははは・・・、待て！まずは冷静に・・・」
壁に追いつめられる才人。

「フン！」

「うわ！」

「てい！」

「マジやめて！」

「やつ！」

「お願い！」

俺にはなにも聞こえません。

「なによ！あんな女のどこがいいのよ！」

・・・なにこの発言？

才人が鞭をふるルイズ嬢の手をつかむ。

「は、放しなさいよ！バカ」

「おまえ、もしかして」

なんだ？突然に真剣になつて？ルイズ嬢も怪訝そうな瞳で才人を見ている。

「俺がお前のベッドに忍び込まずにキュルケとあんなことしてたから」

・・・は？

「はあ！？」

「俺にやきもちとか？」

ガンッ

「はうあうううう・・・」

ルイズ嬢のひざ蹴り、どこにあつたかかわ聞かないでやってくれ。
ルイズ嬢の追撃うずくまった才人の頭を踏みつける・・・。

「ルイズさん、なにかあつたんですかあ？」

ごしごし目をこすりながらアリア嬢・・・なんというタイミング。

「た、助け「なんでもないわ！寝てなさい！」」

「はい、ふにゅ」

才人・・・生きるよ。

「で、あたしが！あんたをなんですって！？」

「いえ・・・なにかの誤解でした・・・」

「あんたが誰と付き合おうとかまわないけど、あの女だけはダメ！」

「だ・け・・・」

「キウルケのツエルプストー家とヴァリエール家は昔から不倶戴天の敵同士！ツエルプストーの女に糸くず一本、犬一匹とられるのは屈辱なのよ！分かった！？」

「はい・・・。なんとなく・・・」

ああ、眠い・・・おやすみなさい。

くかー。

ぐほあつ。

「ちよつと起きなさい」

いやルイズ嬢、今のはちよつとでなかったと思うのですがね？

「あのときでた剣あんたが出したのよね？」

まあ、そうですが何か？

「あれ、あいつにあげてくれない？」

断固としてNO！

「いいじゃない別に」

いやです。

「あの・・・？」

「なによ」

なんだよ。

「会話が成立しているような気がするのなんでしょう？」

「なんとなくよ！」

いばつていうな。しかし、何となくだ。

「はあ、で結局俺の剣はどうなるんだ？」

「しかたないわね。明日は虚無の曜日だし・・・買ってあげるわ」

「うそ、マジで？ケチのくせに珍しい」

「あのねえ、使い魔に贅沢させたらくせになるでしょ。必要なもの

は買ってあげるわ」

「そいつは？」

「こいつは仕方ないのよ。与えなかったらわたしより豪遊するわ。絶対。それでこれ見よがしにするのよ。性格悪い……」

よくわかつてるじゃないか。

「そいつ本当に動物か？」

「私も時々不安になるわ……」

いいじゃないか。不思議生物。楽しいぞ？

「はあ、もう寝るわよあんたも寝なさい」

「あ、ああ」

「あんたも起こして悪かったわね」

そう思うなら起こさんでくれ。

ふあ、おやすみ……。

夜（後書き）

なぜかサクッと終わる予定が予定より長くなってしまった。なぜ？

剣、買いました。（前書き）

ついにデルフさん登場しました。

しかし、タバサの外伝を入れようかと思っていたらどこに入れたらいいか分からない・・・。

気がつけばPV10万ユニーク1万越えてました。

ご愛読ありがとうございます。

剣、買いました。

今日はゆつたりと過ごすのである。

「アリアも行くでしょ？」

「えっと・・・」

行かないよな、アリア嬢？

「えっと・・・」

行きたくない俺と行きたいルイズ嬢、間に挟まれたじたじアリア嬢。ことの始まりは数分前・・・。

深い理由なぞない。

ルイズ嬢、昨日、才人の剣、買う、約束、した。

アリア嬢、聞く、へえ。

ルイズ嬢、言う、一緒に、行こう。

俺、反対。

以上である。

ほら深い理由などこにもない。

「ゴスペルさんは行きたくないんですか？」

あんな獣の受付制限かかるところ誰が行くか。

人型なるの疲れる。飽きた。

「いいじゃない行きましょう」

Noである。

もしくは行くなら置いていけ。

「しかたないわね・・・。アリアだけでも行かない？」

「えと、わたしも今日は、ゴスペルさんと一緒に留守番してます」

「しょうがないわね」

はあ、と一つため息をつきルイズ嬢。

「行くわよ。才人」

「お、おう」

去っていく二人。

行つてらーである。

さて二度寝、二度寝。

「行っちゃいましたねー」

というか、いまさらだがこの部屋ってルイズ嬢の部屋でなかったか？

アリア嬢の部屋にいまだ訪れたことがない、この不思議。

気にしたらきつと負けである。

アリア嬢の膝枕で、ぐでーっと寝る俺。

勝ち組である。

ああ、日差しが暖かい・・・。

「ふふふ、毛並みが気持ちいいですね」

俺の背中をなでるアリア嬢。

カトレア嬢を思いだし、少しだけ戦慄が走るが杞憂だったらしい。

まあ、あんな異常なスキルの持ち主がぼんぼんいたらおちおち外も

歩きたくなくなるから、当たり前といえは当たり前。

外からは「蹴り落とされたいの？」とか低い声で言っている声が聞

こえたが、まったく物騒だねえ。

ああ、すやすや。

「もう寝ちゃったんですか？」

まだ意識はシャットダウンされてないがな。

「ふあ、なんだかわたしも・・・」

頭の下から膝が抜かれる。

代わりといわんばかりに背中というよりは腹にかかる重量感。

「おやすみなさい・・・」

そうして二人で日向ぼっこするある日の話。

諸君！昼である！戦争である！

などと言ってはみたが現在ヒモのこの身である。

そのようなことがあるうはずもなく日当たりのいい中庭で頂いている。

あぐあぐ。

「器用ですねー」

相も変わらずナイフとフォークを使用しての食事。

ニツコニコとアリア嬢がほほえましいものを見る感じである。

おいしいので無問題。

ちなみにちよっとヒモになるのもなあ？と思った時に以前作り置きしておいた金塊を渡してみたのだが落とし物として届けられてしまった。

アリア嬢の善良性に涙が出た今日この頃。

さらば、俺の努力の結晶。きつともう帰ってこない。

「アリアさん少しよろしい？」

「はい？」

誰かがアリア嬢に話しかける。
名前なんてどうでもいい。

「変わった使い魔を召喚したのね」

「はい、自慢の使い魔さんです」

うむ、なにやらムズムズする。

「こ、これあげてみてもいいかしら？」

なにやらチーズケーキのようなものを取り出す。
なぬ？くれるのか？

「いいですよ」

スツと目の前に差しだされる皿乗リケーキ。

くれた人と皿を見比べる。

ええの？

「どうぞ」

「ウオン！」

訳：サンクス！

相も変わらずナイフとフォークで丁寧に食べる。

ああ、至福……。

ごくり、どこかで喉が鳴る。

「ア、アリアさん、触ってみてもいいですか？」

どうやら触りたいらしい。

「ゴスペルさんどうですか？」

「ウオン」

訳：いいんじゃない？

「どうやら、いいみたいです」

付き合い短いのに俺の言いたいことがもう分かるとは、やるなアリア嬢。

「で、では、失礼して」

おそろおそろといった感じに手が伸びてくる。

カトレア嬢ほどではないがなかなか玄人な気配のする触り方。

「ああ・・・」

なにか恍惚としている。

・・・危ない人か？

そのまま、十分ほどされるがままにしておいた。
ようやく満足したのか。

「ご、ごほん、ありがとうございます」

いい捨て、すたこらと去っていった・・・。

「なんだったんでしょね？」

俺にも分らない。

なんだか変な人に会ったそんな昼。

「おお～～～すっげえ、ピカピカだ」

なにやら見た目重視の剣片手に感嘆の声を上げる才人。

「ふふふ、気に入っていただけ？」

自慢げにキクル嬢が言う・・・。

ああ、面倒事の気配しかない。

俺はただ一日まったり過ごしたかっただけなのに……。

「どういう意味？ ツエルプスト」

ああ、すでにお怒りのようである。

「ルイズさん、落ち着いて……」

「いやね、アリア。落ち着いているわよ」

嘘だっ！

アリア嬢が引きつった笑いをルイズ嬢に向ける。

ルイズ嬢たちが帰って来て、しばらくしたらキュルケ嬢となぜかタバサ嬢がやってきた。

すると、剣を取り出し才人にプレゼント。

タバサ嬢は我関せずと読書中。

ルイズ嬢の沸点を刺激。↑今ここ。

何がどうなったし。

「才人にお似合いの剣を偶然見つけたから、プレゼントしただけじゃない？」

嫌味ですか、当てつけですか、分かります。

「後をつけたってわけ？」

「なさけないわね。こんな安物の剣も買ってあげられないなんて」
なにやらもつたいぶるな。

タバサ嬢がその発言を受けて考えるように虚空を見つめている。

……値切ったのか、値切ったんだろぅなあ。

ルイズ嬢にはきつと不可能な手で。

「この剣ゲルマニア製の業物だそうよ？ やっぱり剣も女もゲルマニアに限るわね。あなたみたいなトリステインの女がかなうわけないわ」

言いきるなあ。

そこんとこどうなのよアリア嬢。

「えと、そんなことはないと思うのですけど……」

アリア嬢は冷や汗をかいている。

心労たまりやすそうな性格してる子だからな。

頑張れ。

応援するだけである。

「へ、へんだ！あんななんか、ゲルマニアで男漁りすぎて相手にされなかったから、わざわざ隣の国まで留学してきたんでしょ！」
杖をつきつけ合う二人。

見世物か。

「二人とも、だめですよっ」

頑張れアリア嬢。

あゝ酒とつまみはどこだったかな。

「言ってくれるじゃない」

「ほんとうのことでしょ」

一触即発、まさにそんなとき。

二人の手から杖が風によって取り上げられる。

「タバサさん」

タバサ嬢の尽力らしい。

興味がないと思っただがな？

タバサ嬢に視線が集まる。

「室内」

そうかそれだけの理由か・・・。
だよな。

「じゃあ、才人に決めてもらいましょうか」
才人に二人が詰め寄る。

「お、おれ？」

「そうよ、あんたの剣でもめてるんだから」
二本を手に取り見比べる才人。

見比べた後自身に詰め寄る二人を見る。

頑張れよーどっちでもいいから。

「どっち！」

「どっちもってだめ？あはは・・・」

フンっと力を入れて、二人の足が才人の顔面に突き刺さる。

どうでもいいがパンツ見えるぞ、はしたない。
「自業自得です」

アリア嬢も今回はサイトの味方でないらしい。
才人を蹴飛ばした二人は向き合う。

「いい機会だから教えてあげる。あたしね、あんたのこと、だいつ
きらいなのよ」

「気が合うわねえ。実はわたしもよ」

「「決闘よ！」」

おーい、決闘は禁止だろう？

「マ、マジ？ちよつと、お二人さん・・・」

「こら、うるせえぞ！バカ女ども！」

才人の方からなにやら聞き覚えのない声がある。

「バカ？」

「女ども？」

言い争っていた二人は、非常に怖い顔をしてサイトを見やる。

「ひう、ご、ゴスペルさん・・・（ガクガクブルブル）」

アリア嬢が負けました。

残念。

「ち、ちがう！俺じゃない！」

才人さようなら、君の事はきつと二日くらいは覚えているよ。多分。

「剣」

剣？剣がどうかしたかねタバサ嬢。

「「ん？」」

視線が才人の手にしている剣に集まる。

「人が寝てるところ起こしやがって」

カタカタと剣がしゃべる・・・。

シールだ。

「あの一、この剣しゃべってます？」

「おでれえた。こんな、あほ面のくせして、てめ使い手かよ。どう
りで目も覚めるわけだ」

「使い手？なんだそれ」

確かに何それ？

「それって、知性をもつ剣、インテリジェンスソードじゃない。またあなた、変なものの買ってきたわねえ」

確かに。

「知らなかったのよ。こんな気色悪いもの、すぐ返品するわえ」。

「今年だ？つか、ここどこだ？コラ。答えろ、コラ」

「あはははは、俺これにするわ」

「「えええええ！」」

才人グッジョブだ。

「俺、才人」

「デルフリンガーだ。ヨロシクな兄弟」

「ど、どうしてわたしのとこにだけこんな変なのばっか……。はあ……。」

「げ、元気出してください。ルイズさん！きっといい事ありますよ！」

「じゃあ、それちょうだいよ……。」

「だ、だめです！ゴスペルさんはわたしの使い魔です！」

ん？俺？

「はあ……。」

まあ、元気出せよな。イロモノご主人様」

「はあ……。」

さて、変剣♪変剣♪

つんつん。

「おう！なんだコラ！」

おう、しゃべるしゃべる。

ガジガジ。

「なにしゃがる！」

「ゴスペルさん変なものの食べちゃだめです！」

ぺっ、マズ。

材質はなんか変な感じがするが、鉄か？

「おいコラ、嬢ちゃん！変なものとは言ってくれるじゃあねえか」

「ごめんなさい！あのそういう意味ではなく」

「お、おい。デルフやめとけて」

「相棒、どっちのみかたでえ！」

「えっ、いや、それはねえ？」

アリア嬢の方を見る。

なんか、ムカついたので剣に八つ当たり。

ガンガンッガンガンッ

「うおお！やめやがれ！」

『やだ』

剣だし・・・指向性をもって念話で話しかけてみた。

「はっ？てめ今しゃべりやがったか？」

「なに言ってたんだデルフ？」

「そうですよ。ゴスペルさんはしゃべりませんよ？」

「てめ、もう一回しゃべりやがれ！」

『・・・』

やだね。

ガンガンッガンガンッ

「その剣、壊れてんじゃないの？」

「さびさびだしね。叩いてたら治るんじゃない？」

「おめえら、なめたこと言ってたんじゃないやねえ！俺様のどこが壊れてる
って言うんでえ！」

さびてるじゃん。

「さびてますし」

「さびてるしな」

「だから相棒！てめえは、どっちのみかたでい！」

『おもしろい剣だな』

「てめ、やっぱりしゃべれるんじゃないか！」

「ねえ？ やっぱ壊れてるんじゃない？ その剣」

「うゝん」

「だからあ、こっちの剣にしましょ」

「ぶり返さないでくださいゝ！」

混沌とした夜は続く。

いい剣買ったな！ ルイズ嬢！

そしてガンガン叩いていても叩かれている本人以外止めないこの不思議。

ああ、楽しいな。

新しい仲間が増えたそんな夜。

剣、買いました。（後書き）

デルフの味方はいません♪

だつて剣ですから♪

わたしデルフ好きなんですよね〜。

いい剣ですよねこれ。

そしてタバサ嬢途中から空気。

う〜ん、無口っ子は難しい。

ご意見、感想、批評はいつもお待ちしておりますのでできれば書いていただけると作者がヒーハーします。

アンチだと打たれ弱い作者は割とすぐにノックダウンしますが・・・。

全体を見てここはこうした方がよかったのでは？みたいなストーリーに関するものでしたら言っていただけの方が作品改善になると思うのでお待ちしております。

タバサの冒険1（という名のストーキング）（前書き）

どうも、間を開けずにこんにちは。

今日のは短いです。

何となくでやっているのだから、あれになったら消してしまうかも。感想で頂いたタバサ嬢との絡みです。

とりあえずやってみました。

といってもまだアレな段階ですが。

タバサの冒険1（という名のストーキング）

本日も快晴である。

今日は暇つっげふん、げふん、んんっ、謎多き少女タバサ嬢の素性を探りに出ている。

今日の昼ごろ竜に乗って、どこかに行くようなのでつけている次第である。

アリア嬢には・・・まあ、いいじゃないか。

それにしても驚いた。

近頃の竜はしゃべるのだな。

火竜どもは人語を解さなかったので、風竜というのが特別なものかもしれない。

最近めつきり減った装甲フル装備で現在空の上を尾行中である。

意外と早いのでダッシュアタック装備で最強のステルス性能を誇るインビジブル使用中である。

横付けしていても一切こちらに注意が向かないこの不思議。

なぜか使用時間無限という究極のステルス性能。

世界はご都合主義に満ちている。

もっとも、攻撃を数回するとけるとという致命的欠陥が抱えられていたりするが。

ゲームの仕様にそんなものはなかった。

むしろあったらダメだろう。

まあ、数回だけでも持つというのなら一回ごとに張り直せばいいだけの話だ。

さてはて、話を戻そう。

どうやらタバサ嬢は吸血鬼退治に行くらしい。

そんなステキなイベントに一人で行くとは・・・うらやましい。というわけで勝手についていくのだが。

むう、城が見えてきた。

タバサ嬢って実はお偉いところの人？
いやいや、依頼を受けに行くのか？
まあ、ついていけば分かるだろう。

「通して」

やっとの到着。

シルフィードという風竜は外で待機である。

あの図体でこんなところに入ってこられたらたまったものではない。
来たそうにしていたが・・・。

そんなことは置いておいて、謁見の間風の部屋である。

実際そうなのであろう。

伝令というか護衛っぽい人が扉の前に控えていたし。

この部屋の主人はというとタバサ嬢とそうは変わらない様子の少女である。

タバサ嬢に陰険とか悪辣とかヤンデレあたりをつけるとこんな感じかもしれない。

タバサ嬢が入場すると、根性ねじ曲がつたようにやけ顔をして、
いかにも待ってましたとタバサ嬢を見る。

「え？」

非常に間が抜けた顔である。

ぽかんと口をあけている。

何があつたのであるのか？

すると今度はその顔が怒りに染まる。

喜怒哀楽の激しい少女である。

「きちんと知らせたはずよね？今回の相手」

タバサ嬢はその言葉にうなずく。

「その相手を言ってごらん？」

「吸血鬼」

だよな！どんな奴なんだろうな？楽しみだ。

「だったらわかるだろ？ピクニックの気分で出発できる任務じゃないよ？」

そうなのか？

まあ、どこの世界でも偉そうにしてそんなイメージはあるが。

ああ、ニンニクとかネギとか嫌いなのかな？

ためまかった落とし穴に落としてみたい・・・。

俺が妄想を膨らませていると、なぜかイラッと来ていた少女がタバサ嬢に何かを押しつける。

「ふん。これが最後の任務にならなきゃいいね。せいぜい無事を祈らせてもらっわ、シャルロット」

なんだか嫌味な子だな。

あれかな？お仕置が必要かな？

タバサ嬢が去っていく。

追いつける範囲にいる間は先にいっててもらおう。

タバサ嬢が完全に姿を消すと少女は荒れた。

「なんだい！あの人形め！すましちゃって！」

さてと、たしか前に作ったネタが・・・。

ガ~~~~ンッ

「がっ！」

そのとき少女の上にタライが出現。落下。直撃。

「あ、あっ」

ふらふらと足元がおぼつかない少女。

「きゃっ」

ガコンッ

足元にあつたタライに躓き二度目のタライヒット！

「イ、イザベラ様！ご無事ですか！」

俺グッジョブ。

そしてイザベラ嬢な、把握。

いいリアクションだった。

しかし、ちよつと威力がありすぎたのか気絶してしまった。

改良の余地ありだな。

タライを回収してタバサ嬢を追いかける。

ふっ、いい仕事したぜ。

ニヒルな気分。（ー、ー）ニヤ・・・

タバサ嬢たちを付け回し続け数十分。

ようやく目的地に着いたらしい。

だんだんとシルフィードが下降していく。

さて、堂々と目の前にいてもおそくはばれないだろうが、スニークミッションである。

着地に合わせて草かげに隠れる。

「化けて」

タバサ嬢がシルフィードになにやら言っている。
化ける？　どういうことだろうか？

「いやいや！　どうして！」

いやであるらしい。

「化けて」

「うつつ・・・」

とても嫌であるらしい。　ためらいまくりである。

「あとでいっぱいご飯もらうんだから！　お肉たくさん！　わかった？」
タバサ嬢がうなずく。

しかし、そこそこ大きい竜がここまでガキっぽいと竜の威厳とかは
絶無である。

くそう、ファンタジーめ。

シルフィードはなにやら呪文らしきものを呟く。

ん？　これエルフどもの使う精霊の力とかいうのではないか？

やば、此処にいるとばれるかも・・・。

エルフ曰く、この身はなぜか精霊の力とやらに満ちているらしい。

ゆえに近場でそれを使おうとするとなにか大きな存在がいるらしい
ことが気取られる危険性が高いのだ。

俺のよく使うつうにょんとした何かも、これの一種らしい。

呼び方が気にいっているから変える気はないが。

ともかくそういうわけではれるかもしれん。

おつむ弱そうならあれなら大丈夫かも知れんが。

・・・というか、なんで隠れているんだっただろうか？

あれ？　ばれても特に問題が・・・ない？

開き直って、ここから動かないことにした。

「我をまといし風よ。　我の姿を変えよ」

やはりあの、便利魔法か！

使っている途中でなにやら首をかしげていたが、そこはあれ、気に
しないことにしたらしい。

ゆつくりとシルフィードの体に風がまとわりついていく、やがて青い渦になり視認ができなくなる。

中では何が起きているのだろうか？

やがて渦がはれるとそこには二十といったところの若めの女性体が出現した。

くっ便利魔法め！

というかなぜに全裸なのだろうか？

「うゝゝゝゝ、やっぱりこのからだ嫌い。きゅいきゅい」

わりとタバサ嬢に似ているな。

髪青いし。

スタイルとかは段違いであるが。

しかし、表情はずいぶんとガキっぽい。

需要はありそうだな。うん。

「二本足つてぐらぐらするからきらい！歩きにくい！きゅいきゅい！」

気持ちは分からんでもない。

この形態に慣れてからというものの人の形というのは道具を使うのに適しているがそれ以外にはぶっちゃけ微妙であるからして。

しかし、たまにはなっておかないとなり方を忘れてしまいそうだ。

それ以前に竜は人になれたのか？

やっぱり、レア種であるのだろうか？今度本人に聞いてみよう。

ぶーたれているシルフィードを放っておいてなにやら鞆を「ごそこそするタバサ嬢。

そして取り出したものを差し出す。

「なにこれ？」

「服」

「いや！布なんか体につけたくない！動きづらいんだもん！きゅい！」

その感性は俺には分からん。

もっと重そうなものつけているし。

「人間は服を着る」

「う~~~~。ごわごわするの~~~~あ！お姉さまってば、今回、最初からわたしを变身させるつもりだったのね！服まで用意してか
らに！」

タバサ嬢はいきり立つシルフィードにうなずくと杖を渡し、マント
をシルフィードに身につけさせる。

「・・・へ？」

ポカンとするシルフィード。

「どういうおつもり？」

「あなた、騎士。わたし、従者」

なにやら、作戦があるらしい。

タバサ嬢、結構強そうであるのに、いまさらであるが吸血鬼は手ご
わいのかもしれない。

タバサの冒険1（という名のストーキング）（後書き）

吸血鬼ちゃん助けるべきかな？

切実にご意見ください。

感想でも、活動報告でもかまいません。

性悪っぽいので助けるべきか、助けざるべきか・・・。

少し集まるまでは投稿を控えようかなと思います。

タバサの冒険2（前書き）

意見が集まらない！

くうそんなにダメかこの話。

いつそ消すべきだろうか？

あまりにも集まらないのでつつづきつつp。

タバサの冒険2

村到着。

仰々しく出迎えられている、タバサ嬢一行。

おもしろそうなのでしばらく眺めていたが・・・つまらなかった。
村長の家に行くらしいが隠れてついていくのも飽きたので。

街を見回ってみることにした。ウロウロ（（「エ」）

なんというか・・・まあ、ありがちな田舎である。

力仕事が多いのか男も女も平均以上の筋力を身につけているようではあったが、山にある村ということでは普通だろう。

姿を現して、無垢なワンコの振りをしてみたが、犬にかまうほど暇ではないのかすべからくスルーであった。

大人なんか嫌いだ！

その点、子供は純真でいいよね。

最初は警戒していたが、こちらに害意がないと分かると、むしろかまってくさいとわいてきた。

よい子である。

なにか一人違和感を感じるお子がいたが、きっと気のせいだろう。
何を違和感に感じていたのかはよく分からなかった。

ともかく、遊んでいたのだが外は危ないからと親に一人また一人とさらわれていき暇になってしまった。

俺、何しに来たんだっけ？

「出てこい！吸血鬼！」

それだ！

そうだよ。それを見に来たんだよ。

なにやら騒ぎが起こっているので、そちらを見やる。

タバサ嬢たちもご到着のようであった。

「誰が吸血鬼だ！失礼なこと言うんじゃない！」

「アレキサンドル！おまえたちが一番怪しいんだよ！よそ者が！ほ

ら吸血鬼を出せ！」

「吸血鬼なんていねえよ！」

「いるだろうが！昼だつつのにベッドから出てこねえババアが！」

「おつかあを捕まえて吸血鬼とはどういうこつた！病気で寝てるだけだ！言つただろう？」

なんだ、よくある排他主義者どもか、興味ない。

まあ眺めているか。

「だせ！」だの「病気だ！」だの、生産的とは思えない討論はつまらん。

さすがに見かねたのかシルフィードが割つて入り、逆に叩きのめされていた。言葉で。

タバサ嬢がフロアに入つたが焼け石に水。

最終的には村長が出張つて事なきを得た。

この村長くなさそうだな。

後継が育っていないと即、瓦解するだろう。

育っているようには全く見えないからもって十年かな。

結局家に押し入り、それでも容疑は晴れなかったらしい。

タバサ嬢が村長に何か言つたのか若い娘がそろつて村長宅へ向かつていく。

なぜか脳裏にドナドナが流れた。

せつかなのでその集団についていったみた。

「なにこの犬？」

ひまなのじゃ。

「かまつてほしいの？」

かまうがいい。

「うーん、おとなしくできる？」

「ウォン」

「わかつてるのかな？まあ、いいか。ついておいで」

かまつてはもらえなかったがついていくことは許してもらえたらしい。

てくくと娘その一についていった。

「なにその犬？」

娘その二が現れた。

「なんかかまってほしいみたい」

「番犬代わりにはなるかしらね？村長さんに頼んでみましょう」
なにやら家の中にもついて行っていいらしい。

「村長さんに許可もらってきた」

「・・・はいわね」

「だっていたらきつと気がまぎれるもん」

「それもそうか・・・」

「よかったわねあんた。いいみたいよ」

知らないうちに確定したらしい。

犬な見た目に感謝。

家に着くと、娘のたまった部屋でかまってもらえた。

暇なよりは断然といい。

しかも吸血鬼来る可能性大。

すばらしい。

計算通り。(「」)ニヤ・・・

本当は計算してないけどな！

本能に忠実に遊んでただけけどな！

やがて、夜も深まり、娘たちも寝るらしい。

不安なのかあちこち握られて動けん。

これでは吸血鬼が見にいけないいつ。

これは今日は動くなという啓示なのだろうか・・・。

とりあえず感覚センサーを最大に張り巡らし、ふて寝する。

——ピクッ

何者かが敷地内に新しく入ってきた気配がする。

吸血鬼か！

娘たちを起こさないように一つ一つ丁寧に手をはがし、吸血鬼（仮）
の進行方向から目的地を割り出す。

この部屋ではなかった・・・。

ふざけんな！これでもかという囃を無視するな！

腹が立ったので進行方向に先回りしてやろつとそそくさと移動する。ちらりと視線を窓に向けると、タバサ嬢らは何がしたいのかよくわからんが庭で堂々と酒を飲んでいるらしい。

俺も飲みたい。

などと思っていたら先を越されてしまった。

バリント

「……きいやあああああああ！」

目の前の扉から悲鳴である。

1・助ける

2・無視

3・吸血鬼チェック（見るだけ）

4・被害を考えず現在位置からアトミックブレイザー

5・吸血鬼をボコス（手段を問わず死なない程度に）

さてどうしよう。

1とか正直他人がどうなってもいいし、2とか無視したら何のためにここに来たか分からないし。

4は・・・少しやってみたい気がしたが吸血鬼が見れないことには変わりないので3か5だな。

考えること1秒、浮かんだ考えをすべて破棄した。

とりあえず行ってみよう。

結局こうなるのである。

特攻！

扉を破壊部屋の中へ。

普通に開ける？どうでもいいわ！

勢いよく部屋の中に扉を弾き飛ばす。

なんかに当たったのか、一瞬吹き飛ばす速度が緩むとそのまま窓にぶつかった。

「いやあああああああああ！」

御用である！御用である！

あれ？

部屋を見回すと叫び声を上げる毛布の塊が一つと……だけであつた。

吸血鬼は！？

どこよ！どこにいるのよ！

あなたが吹き飛ばしました。

ぬあああ！なにか致命的なことをした気がする！

ええい！その塊！吸血鬼はどこじゃ！

窓から登場、シルフィード&タバサ嬢。

「きゅ！あんたが犯人？」

ん？右見て、左見て、後ろ見て……？

「あんたよ！あんた！きゅいきゅい！」

ちがわい！

「ちがう、あれはアリアの使い魔」

「きゅ？そうなのね！見たことあるのね！きゅい！」

おや、有名人？

「なんとかわいいなさいなのよ！」

『ああもう、うるさいやつだな』↑念話でなくて、先住言語ということ

「うるさいとはなんなのね」

『事実として、騒がしいだろう』

「そんなことより、なんでここにいるのね！きゅい！」

『吸血鬼がいると聞いて見に来た』

つけてきましたとは言わない。これ大事。

「あんたバカなの？きゅいきゅい！」

「なんて言ってるの？」

「吸血鬼を見に来たと言ってるの！バカなのよ！きゅい！」

「あなたは吸血鬼を見た？」

見損ねたので首を振る。

「そう。あなたはもう帰った方がいい。アリアも心配している」
激しく首を振る。

誰が帰るか、吸血鬼を見るのだよ。

「わがママをいわない」

『見るまでは帰らん』

タバサ嬢がシルフィードを見る。

「帰らないと言ってるのね」

「仕方がない。今回は助かった。ありがとう」

どういたしましてだ。

ぶっちゃけ何もしらんがな。ガハハ。

あっそっすいえば叫んでいる少女ガン無視していた。

タバサの冒険2（後書き）

このままいくと思わず吸血鬼ちゃんを殺してしまいそうだ。
吸血鬼生かすか殺すかプリーズ。

ちなみに救済意見が現在一通。

ノリで書いていたら現時点で殺す寸前でした。

というかこの話知らない人って多いのだろうか？

ネタばれしておく

少女Ⅱ吸血鬼です。

タバサの冒険（ノーマルルートEND）（前書き）

どうもアンケートお答えありがとうございます。

前回うおおおんてな感じでアピールしたら皆さん感想に下さって・

・・・。

やさしいですね。ありがとうございます。

これで作者はまだ戦えます。

さて感想の中で塵にしちゃっていいんじゃない？というご意見もあったので

アンケートがもらえなかった時期に書いたこちらもアップします。

ノーマルと銘打ってますが個人的にはバッドな終わり方をしました。内容もいまひとつです。救済ルートを今日の19:00にアップするので

見たくない方はスルーでもかまいません。

本編は救済ルートで行くので。

これからも道に迷ったら突発的にアンケートを実施する事があると思います

どうぞご協力お願いします。

タバサの冒険（ノーマルルートEND）

シルフィードとタバサ嬢が頑張って少女を慰めた結果。

まだ若干ガクプルしているが少女は話せる程度まで精神を回復した。

「……お、男の人がいきなり入ってきて。わたしの身体をつかもうとしたの」

「どんなひとだったの？」

シルフィードが尋ねる。

嫌われているのかシルフィードを見ると、ひ！とうめいて俺を間に挟ませる。

俺は盾かこら。

「お、おねいちゃんもメイジなの？」

俺の後ろからタバサ嬢に尋ねる。

ふむ、メイジが嫌いなのか？

「わたしはメイジじゃない。ちょっと騎士様の杖をあずかって磨いていただけ。安心して」

予想は当たりらしい。

「魔法を使わない？」

「使えない」

堂々としたものである。

知らなければまるで嘘をついているように見えない。

心拍もお正常で血圧も変動していなさそうだ。

「ところで……この犬お姉さんの？」

「わたしの友達の犬」

……っ！

アリア嬢、タバサ嬢は君を友達と思っているらしい。

驚愕の事実。

やや、関係のないことを挟み少女はやっと自らに何があったのか話し始めた。

「寝てたら・・・、耳のそばで荒い息がしたの・・・。そして目を開けたら男の人が立って、わたしをじっと見つめていたの。わたし、びつくりして叫んだの」

少女は泣きそうな顔をして、俺を押しつぶしながらタバサ嬢に抱きついた。

・・・重いんだが。

「口から・・・。口から牙が生えてて・・・。だらだら涎が垂れてきて・・・、扉が吹き飛んできて・・・。ひっ・・・。えぐ・・・。」

「泣きだした。
・・・重い。」

「もう大丈夫。その人は見覚えある人だった？」

「・・・暗くて分かんなかった」

吸血鬼はどうやら、痛い思いをさせてやったら、もとい、俺が吹き飛ばした扉に乗ってさよならしたそうだ。

俺は・・・悲しい。

タバサ嬢たちは娘どもに説明をしに行つて、自分たちの部屋に戻つた。

なぜか俺も一緒である。

尻尾放してくれ、少女よ。

「あなたも此処で寝ればいい」

というタバサ嬢のありがたい一言によって俺の就寝場所は決定したのである。

シルフィードの奴は薄情にもいいきみなのねとでも言わんばかりの笑みを浮かべそそくさと布団に入ってしまった。

俺、おまえに何か恨まれるようなことしたか？

「おいで」

タバサ嬢の声で正気にかえる。

少女はいまだにおびえているらしい。（主にシルフィードに）
壁際でタバサ嬢の背もたれになってやりつつ、少女も加わり団子三兄弟。

「おねえちゃん、眠らないの？」

「うん。吸血鬼が来たら、騎士さまを起こさなくちゃいけないから」
「大変だね」

「それが仕事だから」

「おねえちゃん、まだ子供だよね」

タバサ嬢のペタンコな乳を触りながら少女はつぶやく。

まあ、子供だからな。

「子供なのに、えらいなあ。いっしょうけんめい、いっしょうけんめい働いてえらいなあ」

少女はタバサ嬢を見上げる。

さすがに身長差が多少はある。

「おねえちゃんのパパとママはなにをしているの？」

「パパはいない。ママはいる」

「そう。わたしのパパとママはねメイジに殺されたの。わたしが
見ている前で、まるで虫けらみたいに……。だからわたしメイジは
きらい。おねえちゃんのパパはどうして死んじゃったの？」

さすがはガキである。ガンガン聞くな。

「殺された」

まあ、そういうこともあるだろう。

よくある。よくある。

「魔法で？」

「魔法じゃない」

「じゃあママはどうしてるの？」

「寝たつきり」

重い……。重いなあ。

寝物語の内容ではないだろう。

「おねえちゃん、人形みたい」

「どうして？」

「あんまりしゃべらないし……。笑ったりしないし。全然表情が変わらないもの」

あと、ちっこいというのを加えておけ。

それとこれは無感情というわけではなさそうだぞ、少し観察したらそう思った。

無邪気そうな眼をした少女だが……。なぜだろう？

いや、なんでもないな。うん。

「あは、本当にお人形みたい」

タバサ嬢を見上げさういう。

そうして少女はタバサ嬢に体重を預け眠った。

そのあと、ずいぶんと反応の遅い村長がやってきたりしたがおおむね何事もなく、朝がやってきてタバサ嬢もやっとな眠りに就いた。

翌日。

昨日騒ぎを起こしていた馬鹿どもが謝罪にやってきた。
なにもしていないのにそれを理由に謝るとか意味が分らん。
シルフィードも笑っていた。

タバサ嬢を従者扱いして、小馬鹿にして。
演技であるはずのそれを演じるものは、とても、とても楽しそうだった。

そして日が傾きまた夜が始まった。

その日の夕食後・・・。

『あついまさらだがシルフィードよ』

「なんなのね。きゅい」

『少女の部屋に侵入した輩なら俺は分かるぞ?』

「もつと早く言うのね! きゅいきゅい!」

『素で忘れていた。聞かれなかったしな』

「そういうのは聞かれなくても教えるのね! というよりどうしてわかったのね! きゅい!」

『匂いで』

「どうしたの?」

そのとき、パリーンツ! と窓の割れる音と、「きいやあああああ
!」やら「いやあああああ!」悲鳴が響く。

集まっていた娘たちの物のようだ。

横の部屋なのでうるさい。

あわてたタバサ嬢たちがバタバタと出ていく。

どれ俺も行くか。

のそのそ行く俺が行く。

部屋に入ると、すでにいいところは終わってしまったようで正気を
明らかに保っていない男に氷の矢が突き刺さるところだった。

あれが吸血鬼か。

なんだかイメージと違うな。

狂犬病とかグールと言われた方が納得できる。

いや確かにあれだけ突き刺さって生きていることには驚愕を覚えるが……。

とどめをさすのか、地面に落ちた奴に土をかけ火をつけた。

吸血鬼はタバサ嬢に燃やされその場で灰になっていった……。

やっぱり吸血鬼なのか……。

「お姉さま！大変！村のみんなが！」

シルフィードが何やら血相を変えてやってきたが、どうせこの吸血鬼の家が焼き討ちになったただけだろう？

俺は見に行くこともせずタバサ嬢に与えられた部屋で寝た。

一時間もすると二人も帰ってきたが、雰囲気が暗かった。

タバサ嬢はいつもどおりなのでシルフィードが暗いのだろう。

それを確認するとまた寝た。

誰かがやってきたようだノックの音がする。

「さ……、さつきはごめんなさい。おねえちゃんみんなのために頑張ってくれたのに……、わたし、失礼なこと言っちゃった」

やってきたのは少女であるらしい。

何やら話していたがタバサ嬢はどこかへと出かけていった。

血の匂い（……）のする少女と。

——ピー

ガバツ

「おねえさま！」

寝ていたと思っただがシルフィードが起き上がる。

「きゅ、あのバカ娘はもうすこし安全ってものを考えるのね！」
行くようだ窓から飛び立つ。

「あんたも来るのね！きゅい！」

やれやれ、俺もタバサ嬢のもとへ向かおうか。

変化したシルフィードの背中に乗り目的地へと向かう。
目的地上空。

タバサ嬢は木に絡め取られてにげられないようだ。
今にも少女の牙が首に突き刺さらんとしている。

「おねえさま！」

シルフィードが突風を吹かす。

その風は少女を思い切り吹き飛ばす。

（ふむ、ついでだ、喰らっておけ）

——パルスビーム！

「がつ！」

これでマヒって動けまい。

「……っ！」

タバサ嬢が杖を手に行っているのを見てさらに驚愕する。

まあ、動けるわけがないんだが♪

すかさず、杖を手にしたタバサ嬢の魔法によって少女は氷の矢に貫かれる。

「……風竜？使い魔？どうして？」

凄まじきは吸血鬼という種の生命力か……。

麻痺が解ければ、氷の矢に貫かれぼろ雑巾のようになってもまだしゃべることが可能らしい。

「風韻竜」

いや、質問の答えになっているのか？それは？

「伝説の古代種かぁ……。そんなの今でもいたんだ……。さっきの口笛かぁ……。そっちの狼さんは……。？」

「知らない」

「おねえちゃんも知らないのか……。？」

ちよつと先住魔法で喉を細工する。

「それはそうだ。俺も自分がなんなのか正確には分からんのだからな」

便利だよな魔法ってたいいていの事がなんとかなる。

シルフィードがしゃべれて俺がしゃべることができない道理はない。そして、驚愕の気配が漂ってきてなかなか面白い。

タバサ嬢の警戒レベルが一気にマックスになった。

「あなたはなにもの？」

俺へと杖を突き付ける。

「さつきも言つたろう？自分でもわからん」

「ならあなたは敵？味方？」

「うむ、タバサ嬢の事はそこそこ気にいりだしたので、敵対はできればしたくないかね？」

「そう、ならいい」

いいのか？

——パルスビーム。

「うぐっ」

「これこれ、逃げようとしてはいかんよ」

少女はタバサ嬢の注意がそれるとばれないように逃走を図ろうとした。

「ねえ、おおかみさん、おねえちゃんお願い。殺さないで。わたしは悪くない。人間の血を吸わなきゃ生きていけないだけ。人間だつて獣や家畜を殺して肉を食べる。どこも違わないでしょ？おねえちゃんそう言つたよね。おおかみさんもそう思うでしょ？」

少女は今度は命乞いを始めた。

俺的には生きぎたないのは嫌いではないが・・・なあ？

「そうだな。その通りだ。否定はせんよ」

「だったらこのまま放って行って「だが・・・」えっ？」

ニヤリ

「それは別に見逃す理由にはならないと気付いているか？」

「性格が悪い」

「それは勘弁してくれこの姿になる前から根腐りしていてね」

希望が見えた相手をつき落とすのは楽しくて仕方ないのだよ。

「そもそもだ、少女よ。血を吸わなければいけないというのは殺す必要があつたのかね？」

「えっ？それは・・・。そうしないとばれちゃうから・・・」

「つまりは必要なかったということだろう？それに君はいささか生きるためというよりはすいすぎていたように思うのだがね？」

誰かに聞いた話だと最悪処女性の高い人間の汗でも生きていけると
いう話だったからな。

「それに、あの村長なら頼めば血ぐらい分けてくれたのではないか
？」

「そんなわけない！」

「まあ、そう思うというならそれもいだろう。そろそろお別れの
時間だ。タバサ嬢私がやるかね？別にかまわんが」

「いい。わたしがやる」

「今回は君がそういうのなら否やはないが、人を頼ることも覚えて
おくといい」

「や、やめて！来ないで！」

タバサ嬢は無言で近づくと土を油へと変えたものをかけ火をかける。
「どうして！悪くないんでしょ！どうして！」

火の中少女が叫び声をあげるが、火の勢いに比例するかのごとくそ
の声は弱弱しくなっていき、やがては潰えた・・・。
空を見上げ淡々とタバサ嬢は言う。

「わたしは人間なの。だから人間の敵は倒す。・・・それだけ」

その横顔はいつもかわらず無表情であつたが、なぜか悲しげに見えた。
こうしてとある村の吸血鬼事件は人知れず本当の幕を降ろすのであつた。

少女でできた灰と・・・どこかさびしげなタバサ嬢を残して・・・。

【ノーマルルートエンド。吸血鬼救済ルートが解放されます。】

タバサの冒険（ノーマルルートEND）（後書き）

とりあえず最初に書いていた吸血鬼死亡のノーマルルートです。

今日の19：00にまた救済へんが出るのでよかったです。また見てや
ってください。

また、評価、感想等々いただけると作者はとても喜びますのでお忙
しくなかったら

ぜひに

お願い申し上げます。

タバサの冒険（吸血鬼ゲットだぜEND）（前書き）

どうも前話も見てくれた方ありがとうございます。
本編はこのルートに沿って進めていきます。

タバサの冒険（吸血鬼ゲットだぜEND）

タバサ嬢が少女を慰めている。

なんだかとても珍しいものを見ている気がする。

・・・ふむ、思いつきリネタばれしてみるかいりいと。

『あゝテス、テス。聞こえているかねタバサ嬢？』↑念話ということ

バツ！凄まじい勢いでタバサ嬢が振り返りこちらを見やる。

「だれ？」

「おねえちゃん・・・。どうしたの？」

『注意しておく君以外には聞こえとらんよ。この声は。気をつけてくれたまえ少女が不審がつているよ』

その言葉を聞いて警戒度は依然高いが少女を慰める作業に戻った。

『不振がられないようにそのまま聞いてくれたらいい。最初の誰？という質問に答えるとその場にそれができそうな不審者は一匹しかおるまい？それで間違いない』

それを聞くとこちらを相も変わらず無表情で見つめてくる。

よしてくれたまえ照れるじゃあないか。

『なぜこのようなことができるかと聞かれれば分からんと答えるしかないので聞かんでくれ。ちなみにこのようなことができるは今知ってるのは君だけではあるな。ルイズ嬢の姉あたりであればできることを悟っている可能性もあるが・・・まあ、せんなきことだ。今はいいだろう。』

もう一度こちらに視線をくれる。

『なぜ、とでも言いたそうな顔だな。なに、深い意味はない。言いたいことがあつて使うことにしただけなのでな。ああ、できれば他の人間や動物には言わないでくれるとうれしい』

『さて本題だが、襲ってきたというかこの部屋に来たのは間違いな

くアレキサンドルだったか？昼間村人といさかいを起こしていた男だよ』

不審な目つきでこちらを見てくるタバサ嬢。

「なぜそんなことが分かるかと言えば、匂いだな。俺の鼻はなかなか大したものだぞ？」

「さっきと言っていることが違う」

ぼそりタバサ嬢がつぶやく。

「どうしたのね？おちび。きゅい？」

シルフィードが不審がる。

『人聞きが悪いな。見たかと聞かれたので俺は見る事ができなかつたからそう答えたというのに。』

肩をわざとらしくすくめて見せる。

『それに今教えてやっているのだから大した違いはあるまい？』

納得したのかうなずく。

『今のところはこんなところだ。俺と話したければそう言ってくればつきあおう。少女が落ち着いてからになるだろうがな』

そうしてタバサ嬢は慰めモードに本格的に戻った。

落ち着かせようた食べさせたものは、吐きもどすなどなかなか難儀しそうであったが俺は知らん。それでもってまあ色々あって朝方にようやくタバサ嬢は眠った。

いろいろが気になったらおおむねバッドルートと同じであるからしてそちらを参照してくれ。大したことはないので流してくれてもかまわない。

タバサ嬢が寝て起きて昼。

「あなたも来る？」

「そんなやつほっておくのね。きゅい」

『遠慮させていただこう。ちと、やる事ができてな』

シルフィードは無視である。

「そう」

そうしてタバサ嬢は出ていった。

アレキサンドルをつけるらしい。

ご苦労なことである。

今回はこちらもちらでやるがあるので、別行動である。

さて違和感のもとへ問い詰めに行こうか……。

やたらと血の匂いのする少女もとな。

こわいこわいと部屋で引きこもっている少女のもとへやってきた。

コンコンッ

「だれ？」

「ウオン」

「？」

キイイ

扉が開かれる……。

「おねえちゃんと一緒にいたワンちゃん？どうしたの？」

とりあえず少女を部屋に押し込む。

「ちよつと、くすぐったいってば」

少女がベッドに腰掛け対面する。

『さて、本題に入ろうか吸血鬼』

「ワンちゃんすごいね。しゃべれたの？」

『誤魔化そうとしなくてもいい。君から漂う血の匂いがすべてを語っている』

「それは、昨日襲われたからだよ」

『ふっ、血を一滴も流していないのに？口からにおう香りはどうなんだね？』

「あーあ、ばれちゃったのか。鼻がずいぶん利くんだね。おねえちゃんは知ってるのかな？」

『いいや、しらんよ。タバサ嬢らは昨日君を襲ったということになっているアレキサンドルをつけ回しに行っている』

「そつちもばれてたんだ。ワンちゃんすごいね」

少女はわずかに驚いた顔をする。

『……イヌではないと思うのだが？』

やや顔をしかめつつ言う。

「そうなの？じゃあおかみさんかな」

『だと自分では思っている』

「じゃあ・・・しゃべるおかみさんは、いったいなにものなのかな？」

少女から殺気が漏れる。

『さあ？自分でもよくわからないな。所詮そんなものだろう？』

「なんで、おねえちゃんには言っていないのかな？」

『吸血鬼というものに興味があつてね。おもしろそうじゃないか』

「くつだらな理由。でも知られたからには死んでもらわないとね」

『ほう、やる気かね？』

少女と俺の間に火花が散る。

「ここでやったら、ばれちゃうからね。森まで付き合ってくれる？」

『ふっ、応じるところかね？』

「なんなら、力——」

『まあついていくんだがね』

ズコッ

「気が抜けるな——もう」

『仕様なのでそこまで気にしないでくれ』

「じゃあいこつか」

『うむ』

そうして出ていく俺と少女。

一見何の変哲もない少女が犬を散歩に連れていく情景。

だが、その実態は己が命をかけたデッド オア アライブの戦いの場に向かう人外どうしであった。

あえて周辺をねらうことで爆風が少女を襲う。

『ほらほら、最初の威勢はどうしたね？ん？』

土ははじけ、木は倒れる。

そこにはただ暴虐があった。

「このっ！眠りを導く風よ！」

俺のいいように怒った少女は新たな魔法を唱える。

疾風一陣、風がこちらに向かって吹いてくる。

『しまった！』

風の直撃、意識を混濁された俺は崩れ落ちる。

「ははは、わたしをなめるからよ！」

近づいてきてこちらを蹴飛ばそうとする。

『なんてな』

「え？」

感のいい人は気付いていたかもしれないが解説している時点で眠っているとかあり得ない。

——パルスビーム

「あああああああ！」

『どうだね？しびれて動けまい？』

電気属性のチップは麻痺効果がなくても一定時間動けなくなる念の入れよう。

仕様が一体どうなっているのやら。

「な、なにをしたの・・・？」

『おやおや、もうしゃべれるのか。手加減がすぎたかね？』

俺に刃向ったのだせいぜいあがいてもらおうじゃないか。

——バルカン

ガガガガガッ

少女に次々と着弾する。

「あっ！、がっ！、やめっ！」

『うん？死んでしまったかね？』

少しやりすぎた気がしないでもない。

頭は避けたとはいえ体のあちこちに穴があいている。

「や、やめて・・・」

弱弱しい声で少女がうめく。

『おお、まだ生きているのか。吸血鬼とはすごいな』

「おねがい、おおかみさん。殺さないで、わたし悪くない。人間の血を吸わなきゃ、生きていけないだけ。人間だっておおかみさんだつて食べるために動物を殺すでしょ？おねえちゃんも言ってたよ。どこもちがわないでしょ？」

『そうだな。それはその通りだ』

少女は俺のその言葉に希望を抱く。

「でしょ？なら——」

『が、今君を殺そうとしている俺には関係ない話だろう？殺されそうだったから殺す。なにかおかしいかね？』

そしてその希望をたたき壊す。

ああ、プライド高そうな種族ってなぶった感じがナイスだなあ。

「そ、そんな・・・」

『おかしくはないだろう？秘密を知った俺を君は殺そうとしたのだから、殺される前に殺す。当然だろう？』

「もう、おおかみさんには手を出さないから、見逃して・・・」

『もう？すでに手を出したのだから、これからの話は必要ないだろう？誰かが言っていたよ。殺そうとするなら自分も殺される覚悟を持ってとね。まあ俺には関係ないが』

口にバスターの発射口を用意しチャージを開始する。

「いやだ！死にたくない！」

チャージされてる力が分かるのかおそれおのく少女。だがもう遅いのだよ・・・。

チャージ完了。てえ！

一際のどの奥が光り輝く。

「きゃあああああ！」

ポフンッ

「へっ？」

『ぶはははははは！』

口から発射されたのは花束だった。

バグったときにやるチャージショットで出る、あれである。

死の危険から一転花に囲まれた少女はひたすらにうるたえる。

『がはははははっ、ひいっ、おっかしい。きゃあだつて、きゃあ、花束にきやあ！』

俺はいたずらがこの上なく成功したのを感じ転げまわる。

『な、なによっ……』

今だ状況がうまく把握できないのか困惑する少女。

『あー笑った、笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだ。まあ、なんだ？少しは懲りただろう？』

「えっ、あつ、ええ！？なに、なんなの！あれ演技！？」

『なかなか役者だったろう？』

「は、ははは……」

なにか魂の抜けたような気の抜けた笑い声を上げる少女。

いや、ナイスだったな。思わず激写してしまった。

『しかし、実際問題かなり派手にやったからタバサ嬢が来るのも時間の問題だぞ？タバサ嬢は君をサクッと殺してくれるだろう』

「そ、そうなの？」

『おお、タバサ嬢は強い上に容赦がなさそうだ』

「た、たすけて？（にこっ）」

『ぷっは！面の皮が厚いな、さっきまで殺してやるといった相手に助けてとは！』

「だ、だつて……」

いじいじする少女。

ああ、楽しかった。

『しかし、そうか、ここでお別れか。吸血鬼的にはきっと短い生だったな。あの世に行っても達者でやれよ』

「助けてくれないの！？」

驚愕の少女。

おいおい、さつきまで命かけて戦っていた相手にそれを言うか？

『なんで俺がそんなに面倒なことをしなくちゃならん』

「ほら、わたしかわいいし、ね？」

『ぶつははは！それを本気で言えるとは・・・ひい』

やばい、この楽しいわ。

「な、なによ！文句ある！」

『いやいやないよ。ククツもつとも俺はロリコンではないから、あきらめてくれ。もう40センチは身長が欲しいところだな』

「そこはほら、将来に期待ってことでさ」

『まあ、おもしろいから助けてやってもいいんだが。メリットが少ないなあ』

「せいしんせいいいお仕えさせていただきます」
全力で土下座する少女。

どこで覚えたそれ。この世界にはそんな風習あったっけ？

『そうさなあ、いくつか条件が飲めるなら考えてやらなくもないなあ』

「なんでもお申し付けください！」

おおう、すつごく卑屈だ。

『まず第一に俺が与える血以外を吸わない。できるか？』

「えっと、どういうこと？」

まあ、分かんだらうなあ。

『俺が人間から少しばかり血を集めてやるから、それ以外は吸うなということだ』

「人間の血をくれるんだったら・・・たぶん」
たぶんて・・・。

『まあいい。実際ある程度はこつちも思考錯誤だ。次にこつちが最重要だが俺に絶対服従、都合のいい駒になつとけ』

「あんまり無茶言われんければ・・・」

『約束できるな？』

「うん・・・」

まだ若干迷いがあるらしい。

『返事は、はいだ!』

「はい!」

『これは契約だ。それを守る限りは俺の庇護下においてやろう。ただし破れば・・・』

あえて明言を避ける。

「やぶるとどうなるのでしょうか!」

びしっ綺麗な敬礼である。

だからどこで覚えた!?

『知りたいか?』

ニヤ。

「いえ、知りたくないです」

耳をふさいでガクブルする少女。

『なに遠慮するなしっかりと教えてやろう』

耳をふさいでいる手を取り払い耳元で言う。

『破ると・・・こうなる』

——メテオレッドサン

空から隕石が飛来する。

「ひい!」

一つまた一つと、轟音を鳴り響かせクレーターが生まれていく。

5つつも莫大なクレーターができると少し静かになる。

「やぶりません!」

『ん?まだ早いぞ?大物が残ってる』

「えっ?」

言うが早いか、今までで一番大きな隕石が降ってくるのが目視できるようになる。

「まさか・・・あれも?」

『ふむ、ちとやばいな。俺だけならいいんだがおまえだと死ぬかも』
「逃げましょう!むしろ逃がして!」

そそくさと走り出す少女。

本当に死にそうだな。

予想していたものより隕石がでかいのである。

せいぜい一メートルかと思ったら三メートルはありそうである。

この星大丈夫かな？

少女を口に咥え効果範囲外まで走る。

「おおかみさん！頑張ってください！」

100メートルも離れた頃ドッガアアアン！背後から凄まじい音と衝撃波が襲いかかる。

体が浮き上がり少し飛ばされる。

「あは、あたし生きてる……。生きてるよ……」

少女の精神にダメージを与えすぎた気がする。

後ろを振り向くと先ほどまでにできていたクレーターが一つのクレーターと化していた。

うむ、やりすぎた。

『で、わかったか？少女よ。あれが襲ってくるか、もっとすごいので殺しにかかる』

「逆らいません！そこまで命知らずじゃないです！」

『よろしい。契約成立だ』

少女がさめざめと生を実感しているところを見て一言。

『ちと、やりすぎたか？』

まあ、気にすることはないだろう。

威力が高すぎて敬遠していた物の実験ができたと思えば、良い収穫になった。

俺がうんうんとやっている上空から

「なにがあつたの？」

タバサ嬢がシルフィードに乗りやってきた。

『なに、ちよつとおしおきをな』

「おしおきってなんなのね！あのクレーターはなんなのね！きゅいきゅい！」

『うるさい奴だな主人を見習え』

タバサ嬢は初めこそ珍しく驚きの表情を浮かべていたが、もついつもの無表情である。

ポカッ

「いたいのね！きゅい！」

「しゃべらない」

「横暴なのね。きゅいきゅい」

「しゃべらない」

そしてシルフィードもいい加減黙った。

「なにがあつたの」

訂正、なんだか少し怒ってる？

『ネタバレするとそこで泣いているのが吸血鬼だ』

「——っ！」

「きゅ？お姉さまどうしたの？」

むっ、意外な弱点これ一人が限界らしい。

シルフィードにも話しているつもりだった。むつかしい。

てかあれだな、竜形態のシルフィードがしゃべれるのだから、俺に出来ない道理はないな。

先住魔法という名のうにょとした何かを使って声帯を作り変える。

「あーです、です。よししゃべれているな」

「あんたしゃべれたのね。きゅいきゅい」

シルフィード、タバサ嬢の命令を守らない子。

せっかく一回見逃してもらったのに・・・。

ポカポカ

ああ、ほほえましい。

「いたっ！いたいのね！きゅいきゅい！」

それにしても吸血鬼もいるのに緊張感がない。

まあ、さめざめ泣いた後に神に祈っているような吸血鬼だが。

「まあ、いろいろと置いておいてタバサ嬢よ」

「なに」

お仕置を中断してこちらを見やる。

シルフィードが助かったと目で言ってくる。

いや助けてないし。

「この吸血鬼っ娘、俺が回収することになったから」

「ダメ、任務」

「まあまあ、もう悪さしないっていうから」

「ダメ」

「あれだ、村にいるアレキサンドルとやらが吸血鬼ってことで・・・
後始末頼んだ！」

風のように去るべし！

ガブッ

「ひゃあ！」

「ふあはは！さらばだたはさひよう！ふあた学園で会おう！」

啞えた者のせいで締まらないがともかくグッバイ。

俺は本気で駆け抜けた。

「きゃあああああ！」

・・・ここまで来れば大丈夫だろう。

ぺっ

「あたっ」

少女が落下する。

「もう少し丁寧にあつかってほしいんだけど」

「贅沢言うな。タバサ嬢からかばって連れて来てやっただろうが」

「それはそうなんだけど・・・ぶっ」

不服そうである。

隠す気もないようである。

なんと不遜な、命の恩人に向かって。

ここは・・・よし。

「お仕置がいるか・・・」

ぼそり言葉が漏れる。

「うそうそ！ごめんなさい！助けてくれてありがとうございます！」

土下座である。

安い頭である。

グワシッ

頭に足に乗せる。

「そうそう、感謝の気持ちを忘れんようになあ?」

悪党である。

我ながら小悪党にしか見えん。

「うぐぐつ」

足を降ろし、考える。

「おまえ特技は?なんかあるか?」

「はっ先住魔法が使えます」

「それだけ?なんかもつとないか?」

「ええと・・・」

「うゝん、助けるべきではなかったか?」

真面目に何に使おうか、使い道が・・・。まだガキだし・・・。

「とりあえず実験するか・・・」

「実験つてなにをするの?」

「ん?攻撃の威力実験――」

「お世話になりました!」

凄まじい勢いで走りだす。

「まあ待て、冗談だ」

少女を頭からはたいて地べたに寝かしなあがら一言。

「うう・・・絶対本気だったよ」

そんなことはないと思う。多分きつともしかしたら・・・。

ちよつと自分でも不安になってきた。

「まあそれは置いておいて・・・」

「おいておかないで!」

「うるさい、だまれ」

頭に一撃。

「はい・・・」

よし、おとなしくなった。

「とりあえずアレな。俺の命令以外でグールだっけ?あれ作っちゃ
いかんから」

タバサ嬢がそう言っていた気がする。

「はい・・・」

うむ、わかればいい。

「では、残る問題はあれだな。食料事情」

「どうするの？」

ふむ、案としては二、三あるがこの場でできるのからいつてみるか。

—— 分解、再構築開始

作るのはあれだな生前に作った万能血液「血液君EX」ネーミングはちとあれだが、効果は凄まじいんだぞ？ありとあらゆる血液型に対応する輸血用血液、常温保存可、冷蔵なら3年は保つ・・・味まではしらんが。

まあ、大したもんだろう？

とにかくそれを作る。

組成やらはまだしつかりと覚えていたはずだ。

「えっ？なに？」

中空に光が集まり一つの形を再構築する。

ある意味究極チート。

—— 生成完了

「ふう、疲れた」

「なにこれ？血？」

「まあ、血だな。ちょっと飲んでみる」

「ええ、これを？」

「我がまま言つと消し飛ばすぞこの野郎」

「い、いったただつきまーす！」

最初から素直に飲めよ。

ずるずるずる

パックから血が吸い取られていく。

きゅぽんっ

最後まで一気に飲みやがった。

「おい、味はどうなんだ」

「なにこれ、おいしい・・・」

「そうか実験は成功だな」

いや良かった。下手すれば毒だからな。

しっかり育てて有用な駒になってもらおう。

「もつとちょうだい！」

「あ？一日分はそれだけだが？」

「えーもつとほしい」

露骨に不満そうである。こいつ立場分かってんのか？

「それでは一日分に足りないのか？」

「うん、たりない。たりない」

そうか、そうか。

「ちなみにそれがあとで嘘だと発覚した場合、問答無用でひたすら
蹴って殺すから」

笑顔で告げる。

「すいません、一週間は保ちます・・・」

「素直でよろしい」

まあ、一日一つぐらいが妥当だろう。

「しかし、どうするか？」

「なにが？」

「君の住むところだ」

「えーおおかみさんとおなじところでいいでしょ」

「俺はいいが・・・」

アリア嬢がなあ・・・。

それに、

「メイジがほとんどの学校の中に行きたいのか。まあそれもいいか。
タバサ嬢もいるが・・・自殺願望があったとは意外だったな」

「ごめんなさい。わたしがわるかったです」

「自分の否を素直に認めることがまともな人の第一歩だ」

俺はきつと認めない。

「しかしどうするか・・・」

じろーっと顔を見る。

「なあ、おまえさんよ。金があつたら街で生活できるか？」

「たぶんできるけど」

「そうか・・・なら金は与える、最低月一で餌をやりに行つてやるから街で暮らせ」

血液君EXは常温でも二月は保つのである。

「ええ、街つてどこ？」

「王都」

距離的にそうなる。

「むりむり！殺されちゃうつて！」

「なんとかしろ、でなかったら、山の中でさびしく暮らせるぞ」
山の中一人で暮らせる？あれ？いい考えじゃないか？

「わかつたわよ・・・」

むっ納得されてしまった。

こうして俺は吸血鬼のガキを扶養する羽目になったのだつた。

ああ、俺つてお人よし。

・・・異論は認めん。

なんだか今日はとても疲れた。

タバサ嬢に敵対されないといいな。

まったく世界はままならない。

いつも、こんなはずじゃなかったことばかりだ。

「あつそういやおまえ名前はなんだ？」

「言ってなかったっけ？」

「聞いていない」

「わたしの名前はエルザ」

「そうか俺はゴスペルだ。好きなように呼べ」

「じゃあ、今まで通りおおかみさんって呼ぶね」

「まあいいが、あんまり舐めた口きくと消毒するから気をつけるように」

「消毒って・・・何するの？」

「なに大したことはない。小一時間ほど火柱が追いかけてくるだけだ」

「たいしたことあるよ！？すつごいたいたしたことあるよ！？」

「うるさいな、早速やってほしいのか？」

エルザはあわてて口を手でふさぎ、首をぶんぶんと振っている。

「そうか、残念だ・・・」

心底残念そうな俺の様子に、きつと、エルザは自分に逃げ場がないことを改めて悟ったことだろう。

性悪臭い性格は少しづつ従順になるように矯正していこう。

一息にやると人格が崩壊する恐れがあるからな。うん。

俺は新たな目標に向けてニヤついた笑みを浮かべた。

エルザはそんな俺を見て戦慄を覚えていたようだが・・・カンはいらしいな。

せいぜいこき使ってやろう。

タバサの冒険（吸血鬼ゲットだぜEND）（後書き）

感想にあった調教ルート、

おもしろそうだと思ったのでとりあえず布石だけ打ってみました。

評価、感想等々いつでも募集してますのでお気軽にお願いします。

また、こういう展開面白そう、といったものがあつたらどしどしいただける。

もしかすると創作意欲が発揮されて書くことがあるかもしれません。
アイデアありましたらご一報を。

なんか日に日に書く量が増えている今日この頃。

既存ルートがないほうが書きやすいことに気づく……。

あれ？ブレイクするしか無くな？な今回でした。

ご意見いただきましてタイトル変更しました。

帰還（前書き）

最近教習所に通い出したクヤです。

2日で座学が8個も終わりました・・・。

調子に乗って短期なんか頼むんじゃないかなかった・・・。

帰還

再起動を果たしたアリア嬢と才人をぼろぼろにした後に俺にからかわれ続けたルイズ嬢。

ルイズ嬢はお疲れのようである。

「だれのつ、せいだとっ……」

怒りのボルテージが上がっていく。

まあまあ、それよりなにか用があったからアリア嬢の部屋に来たのではないかね？

からかうのはほどにして本題を促す。

意思疎通ができるからこそその荒技である。

「そうだったわね……」

「それでどうかしたんですかルイズさん」

「アリアは今度の使い魔品評にするの？」

使い魔品評？何をするのだそれは。

言葉的に俺がやるのだろうか？

「あつわすれていました……どうしましょうルイズさん？」

「そうなの。でもこいつなら勝手になにかやるから心配ないわ」

「そうなんですか？」

期待に満ちた目でこっちを見るのやめい。

「そうよ。それよりも！問題は才人よ……」

「才人さんが？どうしてですか？」

「なにも特技持ってないのよ……」

「えっ？こないだギーシュさんを倒した剣はどうなんですか？」

そうだなそれがあるな。

「あつだめだめ。なんかあの時の奇跡みたいなの？」

いつの間にかルイズ嬢からのしごきから復活していたサイトが言う。

「えっと、つまり……」

「今は、だめだめなのよ……」

ルイズ嬢、頑張ってくれ。キミならできる！（なにが！？）

「というわけで、なにかいいアイデアない？」

なるほどそれが本題か……。

「……」

考え込むアリア嬢。

「ないわよね……」

露骨に落ち込むルイズ嬢。

「えと、その……ごめんなさい」

気まずい空気が流れる。

「俺はパンツ洗いでいいと思うんだけどな？」

パンツ洗い？

「あんたは黙ってなさい！」

ちよつと待とうかルイズ嬢よ。

「……っ！ なにかしら？」

いやそんなに後ずさらずなくても……下着類はだめだといったよね？

「いや、でも……それは」

「グアアア！」

訳：問答無用！

まったくこの子は！ この子は！ あれほどダメだといったのに！

「いやああああ！ ごめんなさい！ 許して！」

NO！

ビシンッビシンッ捕まえてお尻をはたく。

由緒正しいお仕置方法。

「才人！ あんた使い魔でしょっ、ひんっ、たすけ、ひんっ、なさいよ！」

「悪いルイズ……俺にはできないんだ……」

悲劇の主人公よろしく盛大に天を仰いで自らの無力を嘆いているかのようにしていた。

口元がにやけていたのでなにを考えているのかはばればれであったが。

「あんた！ひうつ、おぼえて！ひんつ、なさいよ！」

尻をはたかれながらも気丈であるな。

スピードアップ。

「いいやあああああ！」

ただ、ルイズ嬢の絶叫だけが響いていた。

「ルイズさん・・・大丈夫ですか？」

「うう・・・もうお嫁にいけない」

大げさな、たかだか尻が真っ赤になっただくらいだろう？

途中からは腹を抱えて笑っていたサイトにも鉄拳制裁が飛んだが、文字通り飛んだ、ブロンズフィストというやつが。

それで、結局才人はなにをするんだね？

「もういいわ。あいさつだけさせる・・・」

まあ、無難だな。

「あの・・・なんていうか、がんばってください！」

アリア嬢は拳を握り締めて応援する。

「ありがとう・・・」

そのことばにルイズ嬢は力ない笑みを浮かべたのであった。

帰還（後書き）

前がきで言いましたが教習所に通い出したので更新が遅れることになると思います。

楽しみにしてくださっている方には申し訳ないですが、すみません。

姫様来襲（前書き）

ども、お久しぶりです。

地震が起きましたね・・・皆さんご無事でしょうか？

わたしは懲りもせず教習所に通っておりますが・・・停電しても授業を行うそのガッツに脱帽です。

そして見極め落ちました・・・。

だって嫌いな人が横に座って余裕を持てって無理だもん。

それで少し時間があいたので久しぶりに投稿です。

姫様来襲

——そして前日

なにやら今回の使い魔お披露目の会はお姫さんも見に来るらしい。その出迎えのために生徒一同大集合である。

めんどくさいので俺はふけたが。

屋根の上に登りのんびりとしている。

下界では俺を探して右往左往している子や姫さんを一目見ようとガヤガヤと騒がしいのがいる。

（ああ・・・平和だ）

その場のテンションに行動が如実に表れる俺は基本的に平和主義者である。

・・・細かいことは気にするな。

俺は平和主義者である。

ただ享樂的で刹那的な生き方を心にかけているだけだ。

アグレッシブなニートと言ってくれ。

最近ではヒモのようだが・・・。

まあ、要所では手助けしてやろうと思っただけできつと無問題。

そういうことにしておこう。

世界というのは都合よく動くものだ。

そして視線を下に移せば、なにやら仰々しい「。。。様のおなぐり」が行われている。

なぜ当日に来ないのだろうか？

今日は前日である。

王族と言うのは思いのほか暇なのであろうか？

（うらやましい事だ）

などと、自分の事は棚上げで考えているとキラリッなにやらこちらを見る気配を感じた。

きつと気のせいだな。

眼の端に映る青い髪の少女はきつと幻影である。

こちらを見ているような気がするのも気のせいである。

だってほら、手に本をもっているではないか。

ああ今日も空が青い。

視線を完全に外し、空へと目を逃がす。

・・・本当にいい天気。

外にほとんどの人間が集まっている中、宝物庫あたりに接近する気配があつたりしたが・・・とてもあやしいな。

泥棒だつたりするのもかもしれない。

まあ俺には関係ないことである。

だって俺の物ではないので。

などと思っても逃避をしていたら下ではイベントが終了したのか人が散り始めていた。

大騒ぎしていた割にはあつさりとした終わり方である。

今あそこにミニボムを投げたらどうなるんだろうか？

うずうずする自分を抑えるのは思いのほか大変だ。

バンッ

「見つけました！」

屋根にあつた窓を開けアリア嬢が現れた。

今の今まで頑張つて探していたのか肩を激しく上下させている・・・

御苦労さまである。

「そこから、う、うごかないください」

そろりそろり窓から身を乗り出しゆっくりとこちらに向かってくる。

プルプルしていて小鹿のようである。

(・・・ふむ)

すこし、食指が動いた。

——アイスステージ

「へっ？」

予定通りである。

さて問題です。

三角お屋根がつるつる氷になったら上に乗っていた人はどうなるでしょうか。

「・・・きゃあああああ！！！！」

もうわかっただろう。

最初から分かる？まあ様式美だ。そこまで気にしないでくれ。

それで答えは・・・滑るでした。

「ひいやあああああ！！」

俺の横を滑走していくアリア嬢、涙目である。

ガッ

「おちっ！おちっ！」

おお、屋根の端をつかむことに成功したようである。

あれだけの速度が出ていながら端とはいえ持ちこたえるとは・・・やるな！

「たすけてくださいー！」

とりあえずアリア嬢の眼前に移動。

「・・・ゴスペルさん？」

なにやら不穏なものでも感じ取ったのであろうか、声は疑惑で満ちている。

ハッハッハ、俺がそんな薄情なことをするわけがないじゃないか。

俺はアリア嬢に手を差し出し・・・ていつ

屋根をつかんでいた手を押してみた。

さて、どうなったかという・・・まあ、当然落ちるわな。

「いいやああああ！ゴスペルさんのバカーーーーーー！」

アリア嬢の絶叫がこだまする。

出来心だったんだ。つい、ね？

そしてアリア嬢は帰らぬ人に・・・冗談やってないで助けるか。

落ちるアリア嬢を追いかけて空へとダイブ。

（アイ キャン フライ！）

言わなければいけない気がした。

と冗談を繰り返しつつ、アリア嬢を回収。

背中に装着。

正しく装着である。

そして宙でくると回りランディング。

得点を付ける人間がいたらきつと10点の札が上がっていたことだろう。

「ぐすっ」

おや？少しやりすぎたかね？

「ひどいです・・・」

俺を使い魔にしたのが君の運のつきだ。

あきらめてくれ。

ところで・・・そろそろ降りないかね？

ユサユサと体をゆすってみる。

ミス！アリア嬢はしがみついていたのはなれない！

「・・・いやです」

なにやら断固とした意思を感じる。

この後しばらくトライし続けたがアリア嬢を降ろすことはかなわなかった。

「あんたたちなにやってんの？」

何と言われても……。

現在地、ルイズ嬢の部屋。

呆れた目を向けてくるルイズ嬢。

ムリだといいつつ無駄な努力な演技指導中才人。

あきらめたのではなかったか？

まあ置いておいてこれ本題。

しがみついてるアリア嬢。

……ちよつといじめすぎたかもしれん。

あれから軽く数時間が経過したが一度も俺から降りないアリア嬢。

どうしてこうなった……。

あなたのせいです。

うるさいわあ！

失礼、何か不本意なことを言われた気がしたもので。

だから、てめえのせいだよ。

あーあーなにもきこえない！

となにやら宇宙意志的ななにかと通話してみたりして現実から目を

そむけて見た。

当然、現実は何にも改善されていない。

「だからどうしたのよ……」

ルイズ嬢はなにか自分に重なることがあったのか、アリア嬢を痛ま

しげな目で見ていたかと思えばとても遠くを見ていた。

はて、どうしたのだろうか？

すべてあなたが原因です。

なにやら不本意なことが聞こえた気がした……気のせいだ！

「ゴスペルさんが悪いんです」

平行線である。

いいかげんうつとうしい。

頑張って耐えた俺は実はいいやつ。

原因が何を言っているのか。

頑張って耐えた俺は実はいいやつ。

・・・。

勝った。

さてむなしい勝利はともかく、どうしたものか。

コンコンッ

おや御客さんかね？

「はいはいーい。今開けまーす」

才人が何やらノリノリである。

剣舞のまねごとにも飽きていたのだろう。

ガチャリ

「うおっ」

フードをかぶった不審者が侵入してきた。

なにもの！

「だれ？」

部屋に緊張が走る。

ガバッ

「ああ、ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！会いたかったわ！」

「姫殿下！」

おおっ、不審者改め姫さんがルイズ嬢に抱きついている。

「ええっ！」

あっこら、上で暴れるんじゃない。

「ルイズ。本当に久しぶりね」

「いけません姫殿下。このような下賤な場所に・・・」

姫さんを振りほどき臣下の礼を取る。

状況についていけない3名を残し時は過ぎていく。

「そんなことを言わないでルイズ。わたしたちお友達じゃない」

「もったいないお言葉です姫様」

二人の世界が展開される。

「あのーどんな知り合い？」

こくこく。

アリア嬢が才人に追従する。

才人、お前には空気が読めない略してKYの称号を贈ろうと思う。

「姫様がご幼少のみぎりお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「幼馴染と言つてちょうだい。ああ、ずっと会いたかった・・・」

「姫様・・・」

またしても二人の世界が展開する。

姫さんの目にはうつすらと光るものが。

ルイズ嬢がそれを見つけると

「ごめんなさいね。お父様がなくなってからこうして心を開いて話すことができなくて・・・」

「姫様・・・それにしてもお手紙をいただいた時は驚きましたわ」

「ああそっか。お姫様が来るから俺にあわてて芸を・・・」

ピキッ

学習しない生き物である。

むしろもう、これはチャレンジスピリッツにあふれているとほめるべきなのだろうか？

「こりませんね」

ドゴガッ

「黙ってなさい！それに姫殿下の前でなにぼさって立っているのよ！」

地面に頭をつかまれ叩きつけられる才人。

「いいのです。楽にしてください」

そうか楽にすればいいのか。

「あら、あなたは・・・」

「ひ、姫様にはお初にお目にかかります。アリアと申しますっ」

立ち上がり、気をつけを言うアリア嬢。

テンパリ具合がすごいな。

ん？おおう、外れた！

グッジョブだ姫さん。

「はじめまして、ルイズのお友達？」

てかさつきまで気づいてなかったのね。

「はい姫様。それでこっちのケダモノはうちの近所に時々やってきたバカです。今はアリアの使い魔ですけど」

オイオイひどいなルイズ嬢。

あんなにかまってあげたというのに・・・。

そんな胡散臭そうな目で見ないでくれ。

「まあ、あなたが噂の」

噂どんな？リーク元は？ルイズ嬢？

「ふふ、二人ともいい使い魔を召喚したわね」

「とんでもない！こんな下品で変な生き物一生の不覚ですわ」

「ぐほあっ」

「えと・・・」

即否定のルイズ嬢となんといつていいか分からないアリア嬢。

ちなみに間に入った音は再び頭を打ち付けたサイトによるものである。

「ふふっ」

さすが王族余裕の笑みである。

打ちつけられる才人を嘲笑ったものでないと俺は信じている。

「抜け出してきたからそろそろ失礼するわ」

「抜け出してきたんですかつ！早く戻らないと・・・」

急げ急げと扉の前。

ルイズ嬢と抱きしめあってさようなら。

「使い魔さん方、明日の品評会頑張ってくださいね」

えったるいしやだ。

「ふっご期待ください」

壁に片腕をつきカッコつける才人。

・・・似合わない。

「なっ姫様に向かってあんたはなにを！」

「ゴスペルさん……。さすがにその態度はどうかと思います・・・

」

ルイズ嬢は才人に鞭をもつて踊りかかり、アリア嬢はあくびなぞする俺にあきれる。

そして才人・・・回避スキルがすごいなおい。

鞭をかわし続けるって・・・普通にすごいぞ？

とくにルイズ嬢も才人たたきスキルの値が上がっているはずなので特に。

おおうつ！真剣白刃取り！

才人の回避能力は本物だな。

そんな愉快な二人をどこかさびしげな眼で見つめる姫さん。

「やはり、自由と言うのは一番の宝ですね」

呟くように言うフードをかぶりこちらに背を向ける。

「さようなら」

さびしげな背中を見せ姫さんは去って行った。

「姫様？」

ルイズ嬢の疑問の声だけが、ただ夜に響いていた・・・。

品評会、そして・・・（前書き）

ども明日試験です。

なんでこんなことやってるんだろう？

一応次の話もできているので明日も更新するかもです。

品評会、そして・・・

品評会当日となった。

当然俺は姿をくらませている。

アリア嬢には悪いとは思うが・・・悪いと思うただが・・・正直見世物になるのはいかなものだろうか？と俺は思うわけであって最近お気に入りになりつつある屋根の上で日向ぼっこである。

暇なら出てやれよという俺の良心的な何かが訴えているが・・・知ったこっちゃない。

最近どうにも自分が丸くなりすぎている気がする。

生前の人間不信レベルマックスな俺は一体どこに行ったのだろうか？親しい人間には昔からやや甘いところはあった。

だが・・・だが・・・いつからこんなにふぬけてしまったのだろうか？

何か大事なものをなくした気がする・・・。

取り戻せと俺の中の何かが叫んでいる！！・・・気がしなくもない。

正直言つてそこまでの熱意はたぶんないが。

「見つけました！またここにいたんですか！」

アリア嬢に見つかったようである。

ここのところ疲れていたり、あわてている様子しか拝見していないように思う。

俺のせいだという突っ込みは受け付けていないのであしからず。

そしてこんなことをうだうだ考えているうちに

「ゲゲツ」

引きずられていたのだが頭を窓枠に強打した。

そこまで痛いものではないのだが反射的にそういう声が出た。

「あっごめんなさい。大丈夫ですか？」

謝るならやらんでくれ。

精神的にはもういい年なんだから落ち着いて過ごしたいんだよ。

うそだっ！！なんてものが聞こえてきたが・・・幻聴まで聞こえるとは・・・やはり歳か？

「そろそろ順番が来てしまいますから早く行きましょう？」

やれやれ、粘っていても結局は連れて行かれるのか。

本気で抵抗したらそりゃあ簡単に逃げられるが、それは面白くない上に怪我をさせてしまうかもしれない？

そこそこ気にいった子を物理的にいじめるのはあまり好きではない。精神的にねちねちとやるからいいのだよ。

例えばそうだな賭けをしてどんな無理難題を言われるのかと戦々恐々としている様子をながめたりとか。

まあ俺の趣味嗜好は置いておいて、いくとしますか・・・。

「次は～アリア・ド・エーデルフェルト！」

「は、はい！」

会場からほほえましい笑い声が漏れる。

アリア嬢緊張に弱いらしい、大変だな。

俺は堂々とステージの中央まで歩いていき。

足の関節を曲げ・・・身を低くすると・・・自分に雷を落として前方に放った。

轟く轟音。

視界が白の奔流に覆われすべてを覆い隠す。

そのすきに俺は次の準備を済ませる。

すべてが終わった後、驚きに絶句している観衆を放置してアリア嬢を啜えその場を去る。

「えっ？」

アリア嬢からは困惑の声が聞こえるが知らん。

「「オオオオオオオオオッ！！」「」」

俺たちが会場から姿を消すとやつと理解が追いついたのか歓声が上がった。

俺はこの後の事を考えると楽しみに緩む顔を隠すことができずにいた。

気悦に顔の歪む狼とそれに啜えられた少女という何とも狩獵者と哀れな犠牲者という構図がそこにはあった。

誰か良識的な人間が見れば少女を救わなければという余計な使命感すら抱くかもしれない。

そして興奮冷めやらぬ中、次の組がステージへと上がろうとしている。

ああ、もうすぐだ。

そしてついにステージの中央に次の組が到達する。

なんとも哀れである。

なんにも知らずにその場所に立ってしまったのだから・・・。

そしてそれは起こった。

ステージの中央、その場所が炸裂する。

ぱっびょえ〜ん！ぱっびょえ〜ん！

哀れ生徒は吹き飛び、爆風が連鎖的にステージの上を覆う。

しかし音は気が抜ける音。

生徒を助けようと踏み出す勇者はことごとく足元からの爆風に成すすべもなく吹き飛ばされる。

「きゃああああ！」「襲撃か！？」「などと観客が騒ぎ出す。

チエケラチヨ！チエケラチヨ！

繰り返すが音は気が抜ける音。

なんともコメディちつくな光景である。

その様子を俺は非常に満足げな様子でしばらく眺めるとその場を去った。

会場を少し離れるとアリア嬢が話しかけてきた。

その顔は爆風の余波による煤でなかなかに愉快的なことになってはいたが。

「あれは、ゴスペルさんの仕業ですか？」

イエス・アイ・ドゥー

うなずき肯定の意を示す。

「すごいんですね！」

おおっ、きらきらした目で俺を見上げるアリア嬢。

正直・・・予想外です。

ネタばらしをしておく、雷で目くらましをしたときにムダにステルスマインを設置してみた。

ようするに見えない地雷である。

ただ、殺傷能力を極力落としてその分カラフルな爆煙と愉快的音を仕込んである。

きちんと吹き飛ぶ親切仕様。

うむ、その身一つで空飛ぶ人間はとても面白かった。

じゃ、かえろかえろ。

アリア嬢を頭で押していく。

「えっ？見ていけないんですか？」

うみうみ。

人氣が完全になくなるとゴロンッ・・・至福の時である。

「ゴスペルさん、寝るの好きですねー」

アリア嬢に頭をなでられながらごろごろとすべてが終わるのを待った。

ちなみに俺の芸は評価が高かったがそのあとにやったことで点数が相殺されたらしい。

なぜばれたんだろうか？

俺を除けば順当にタバサ嬢のシルフィードが優勝のようである。

インパクトって大事だよな。

ちなみにあいさつだけさせると言っていたルイズ嬢、才人組は漫談を披露して会場の笑いを取っていた。

なかなか面白かったらしい。

俺も見に行けばよかった・・・。

後悔とは・・・終わった後にするものである。

ただ、予定外だったのかルイズ嬢がすねてどこかへいつてしまった。

。あの子トラブル体质だから何かに巻き込まれてないといいけど・・・。

フラグが立ちました！

そして現在授賞式。

タバサ嬢の頭上にちっこい王冠が輝く。

似合っているぜ！

これぐらい見ておくかとやってきたわけではあるが、姫様リクエストでシルフィードがまた空を飛ぶらしい。

何が楽しいのだろうか？

火竜山脈行くと結構いっぱいドラゴン飛んでいるけど。

俺には普通の人の感性は分からない・・・。

などと思って天を仰いでいるとドゴオオオオンとなにかが破壊される音が・・・。

ルイズ嬢――！？

巻き込まれている・・・絶対に巻き込まれている・・・むしろ巻き込まれていないわけがない！

はっ。

くだらないことをやっている場合じゃないサクツと行かないと！
ダッ！

俺は空をかける。

すでにタバサ嬢は向かったらしい。

あの子もなんだかんだ言っておせっかいなところあるよな。

「わたしもいきますー！！」

さて、地上から何か聞こえた気がしないでもない。

「無視しないでくださいっ！」

ガン無視である。

あれでも俺のご主人様。こんな扱いされててもご主人様。

今行くぞっルイズ嬢！

いるか知らんけど！それでもいると確信してるけど！

到着するとすでに佳境だったらしい。

あのゴーレムマン何？

そして、才人が落下中であつた。

どうしょ？

考えているうちにタバサ嬢がサクツと救助してくれていたが。

悔しくなんてないからな！

さてルイズ嬢はと・・・いた！

おゝい生きてるか？

「あなた・・・遅いわよ！」

んな理不尽な・・・。

そのあと事態の收拾に周りが動き出したのだが、逃走した盗人は発見できず、宝物庫には犯行声明がしっかりと記してあつたらしい。

俺は見えていないのであくまでらしい。

そしてそれによると土くれのフーケという何とも頭悪そうな盗人らしい。

いつもこういうの聞くとと思うんだが、種類特定されるために貴重な逃走時間を削るってバカではないのだろうか？

ばれないようにこっそりと侵入して書き込んで去って盗まれたことが分かった時を想像してニヤニヤすることが目的なら理解できるんだが・・・今回、ぶっちゃけ強盗だし。

盗賊の美学なんだろうか？

俺には分かん。

そして姫さんが帰る時にルイズ嬢が言っていたが王宮と言うやつは

やはり一筋縄ではいかないところらしい。
俺にはかわり合いのないところだとは思うがな。
そしてこんなことを言うときつと巻き込まれるんだろうなあ・・・
でもルイズ嬢とかはなにもしなくても巻き込まれそうだしなあ。
お人よしの気のあるアリア嬢はくっついていくだろうし、ルイズ嬢
が危なっかしくて俺も付いていくことになると思うし・・・なんだ
かなあ。

明けて翌日。

才人がキュルケ嬢にえさもらってるいいなあ。

「うちの使い魔にえさ与えないでよ！」

「しょうがないじゃない。こつも自習、自習じゃ、飽きもするわよ。
ん？あなたも欲しいの？どうぞ」

「いいやつだなキュルケ嬢。」

はむはむ、うまし。

「わたしももらっていいですか？」

「いいわよ」

アリア嬢と二人で食べる。

「おいしいですねー」

はむはむ。

「にしても大ごとになったわよねーお姫様の責任問題にも発展しそうですねー」

「姫様の？」

「だってただでさえ少ない警備兵をお姫様の警護に回しちゃったじゃない？それに、もともこの学院の見学だって周囲の反対押し切ってきたらしいしねー」

「姫様・・・」

むっもう空か。

ルイズ嬢よ元気を出すといい。

「ありがと・・・」

やれやれ、いい子過ぎるな。

「ミス・ヴァリエール！ミス・タバサ！すぐに来てください！」

重い空気になりかけたそこへハゲがやってきた。

なにやら急ぎらしい。

呼ばれたタバサ嬢&ルイズ嬢に呼ばれていないキュルケ嬢&俺たちがついて学院長室に到着。

「なんであんたたちがいるのよ！」

小声で怒るといふなかなか高難度な技を披露するルイズ嬢。

「いいじゃない。おもしろそうなんだもの」

それを軽くあしらうキュルケ嬢。

なんだろう同年代のはずなのにこの余裕の差は？

「わたしだけ仲間はずれはいやですから」

君は子供っぽいな。

そのあといろいろあって・・・なんかまあ、ねえ？

フーケ討伐に行くことになりました。

大人が道案内だけって・・・人としてどうなんだ？

学院の教師ども。

それと、あれだよな。

みんな何かしら称えられて送りだされるのに、ルイズ嬢だけ誉められずに汗をかいていた学院長。

結局才人を称えることで誤魔化した。

その時のルイズ嬢の目と叫びたらもう・・・ぷぷ。

思い出したら笑ってしまう。

あともうひとつ、心配だからでついて来てくれたタバサ嬢とてもいい子。

俺に疑いの視線を向けてこないともっといい子。

まあ。そんなわけで出発である。

みんなでドナドナしてのんびり旅路である。

ふにゅー気が抜ける。

ところでキュルケ嬢と才人よいちゃつくのは構わんが、俺に被害が来ない形で一つ。

ああっ痛い！痛いってば！

毛を抜かないでルイズ嬢。

いくら才人がきらきらの剣につつつを抜かしていても俺関係ないから！

「ルイズさん。お、おちつきましょう？」

「いやね、アリア。わたしは落ち着いているわよ？とーっても・・・」

「ひゃい、そーでしたかつ」

おおっ、なんという負のオーラだ。

君はこの世すべての悪でも背負っているのかい？

などとだべってりくだらないことをやってたりしていたらついてしまった。

帰っていい？

「だめよ」

「だめです」

おおっ、考えが読まれた・・・ニュータイプかつ！

やれやれ、仕方がないな。

では突入！

「ちよつと先走りすぎよ！」

「ゴスペルさん！」

知らん！

たのつもー！

扉を破壊、そして侵入。

モファアアアア

「げほっげほっ」

ちよつと埃ためすぎでは？

「おいおい、大丈夫かよ？」

ちよつとよろしくない。埃嫌い。

「大丈夫ですかゴスペルさん？」

大丈夫！。

「なにもないわねー。手掛かり探すの？」

しばらくこそごととやる。

ん？タバサ嬢どうかしたかね？

「破壊の杖」

・・・タバサ嬢の手にはあのとき持ち出された箱が・・・

「「えっ」」

そんなバナナ。

「ねえねえ、破壊の杖ってどんなものかしら？開けてみない？」

「ルイズも待つてるし早く戻ろっぜ」

「ちよつとくらいいいじゃない。もうあけちゃった」

やるが早いかすでに箱は開きその全容をさらけ出していた。

「なによこれ、変な形」

「これは！？なんでこんなもんが！？」

「才人さん？」

これは驚いたな・・・なんでロケットランチャーがあるんだ？

「きゃあああああ！」

その時ルイズ嬢の悲鳴が響く。

「ルイズ！」

ルイズ嬢！

小屋の屋根が吹き飛び視線の先にはゴーレムが現れる。

魔法使い諸君が攻撃を加えるが・・・。

タバサ嬢の竜巻やキュルケ嬢の炎は土塊の前には効果が薄くダメージを与えられない。

唯一効くかと思われたアリア嬢の水球はわずかばかりの衝撃を与えたようだが・・・綺麗に土に吸い込まれた。

ルイズ嬢は！？

「なにやってんだ！」

急に叫んだ才人の視線を追えばその先には呪文を唱えるルイズ嬢が・・・。

「ルイズさんっ！」

ほんとに何やってんだ！

ルイズ嬢が杖を振ればわずかばかりの土が爆ぜる。

それによりその存在に気付いたかのような動作をゴーレムが行いルイズ嬢へと迫る。

「早く逃げる！」

「ガウ！」

訳：その通りだ！

「いやよ！」

あほか！

「やめろ！かないっこねえだろ！だいいち魔法だってまともに！」

「わたしは貴族よ！」

突然どうした！？

「魔法が使えるものを貴族と呼ぶんじゃない！敵に後ろを見せない物を貴族と呼ぶのよ！」

それは侍だ！

「ゼロのルイズなんかじゃないんだからっ！」

ゴーレムがその腕を振りかぶる。

それと同時にルイズ嬢の爆発が起きる。

しかし敵の質量に対しその爆発は微々たるものでしかない。
そしてついにその腕が振り下ろされる。

「ひゃっ・・・」

ルイズ嬢の顔が恐怖へと染まる。

「ルイズさんっ！」

バカたれがっ！

走る、地を砕く勢いで走る。

間に合えっ！

品評会、そして・・・（後書き）

もっと面白いネタを思いつきたかった・・・。
感想等々お待ちしております。

戦いという名の暴虐（前書き）

くはっ 卒研落ちました・・・。

明後日またいつてきます。

歩行者エエエ。

補助ブレーキ、乙。

戦いという名の暴虐

ドンツ背後から土塊の振り下ろされた衝撃が伝わってくる。
間に合った……。

「邪魔しないで！」

こんつの！バカたれが！

珍しく尻尾ではなく二本足で立ち構造上内側に振り下ろすと爪が飛び出してしまうので裏拳で頬を張る。

バカたれが！

才人が駆け寄ってくる。

というかほぼ同タイミングで踏み出したので才人が救う直前でかつさらった形になっている。

「貴族だからなんだという！死なせんよ！バカが！」

「だって……いつもいつも、みんなからバカにされて……くやしくて……逃げたらまた馬鹿にされるじゃない……」

涙を両目からこぼれさせながらいうルイズ嬢……。

そうか悔しかったんだね……。

そりゃそうだよな……罵倒されて喜ぶ人間なんか……いないと言えないわごめん。

つらかったよね。

味方がほばいない学園生活……。

頬を舐める。

涙の味を感じる……。

これがルイズ嬢の悲しみの味だね。
いいよ好きなだけ泣くといい。

「姫様との約束守れないし……」

涙の止まらないルイズ嬢。

よしよしつらかったな。頑張ったな……。

俺がしんみりしているとなおも背後から動く気配……。

「貴っ様あああああ！！！」

気がつけば土くれに向かつて飛びかかっていた。
突撃中のわずかな時間に思う。

だめだ、理性が飛びそうだ。

いやすでに飛んでいるのかもしれない・・・。

こうして考えている間にも体は本能に従い敵を殲滅せんと働きかけている。

気がつけばすべての装甲を身にまとい、ダッシュアタックを飛行以外ではじめて使う

「ガアアアアッ！！！」

自らを弾丸と化し、手始めに振り上げた腕をえぐり取り、戻りながら頭から胸にかけてを貫く。

土はもろく、いくら密度があると言ってもこの身には紙ほどの抵抗しか感じ取れなかった。

轟音と凄まじい土ぼこりを巻きあげつつ地へと足をつく。

着地した大地には幾筋ものひびが見られ着地の衝撃を物語っていた。

「うちのガキになにしてくれてるんだ！あ”あ”！」

なおも怒りは収まらず、全身を帯電させ周囲をなおも破壊し続ける。そんなふうには俺が吠えている間に自動修復機能でもあるのか周囲の地面からゴーレムは体を補強する。

「そうだよなあ！土くれだしなあ！痛みがないもんなあ！」

そう言うときヤノーダム軍団を顕現し殲滅射撃を行う。

ダダダダッ！

ゴーレムの身体にいくつもの穴ができ、だんだんと修復が追いつかなくなっていく。

しかし完全に削り取るためには少々威力が足りないようだ。

「ああっ面倒くさい！」

その言葉と共に攻撃を行っていたキャノーダム軍団はその存在がまるで幻であったかのように霞と消える。

周囲では展開についていけない人々が獣の突然の激怒にただただ

驚愕を浮かべていた。

一瞬で怒りが沸点をはるかに超え氷点下へと移動する。

「・・・失せるがいい」

聞く者の背筋を凍らせ、体の芯に響くそんな声が自然と口からこぼれおちる。

——ハイパーバースト

——メガデスバースト

——ギガキャノン3

背中に計3門のプログラムアドバンス兵器を顕現し、目の前のゴーレムへと狙いを定める。

「てえっ！！！」

フルバースト

全門発射

足が発射の衝撃により大地をまくりあげ、背中から3条の破壊の光がほとばしる。

そのうちの二つは着弾すると中規模の連鎖的な爆発を引き起こし、わずかばかり遅れて到達した一つは轟音と共にすべてをほとばしる閃光で白に染めあげた・・・。

閃光と轟音が治まるとそこにはかつての姿はなく、ただ破壊の凄まじさを物語るクレーターがあるばかりであった。

「はっ！？」

そしておもいつきりやってスッキリしたのか、正常な思考回路が帰ってくる。

「きゃっ」

「ルイズ嬢無事かね？怪我はないかね？おーよしよし」

バカな真似をして、ゴーレムへと立ちふさがった少女に駆け寄り。押し倒して体をこすりつけ怪我を確認する。

「ちよつやめ！くすぐったいってば！」

「まだだ！この程度ではやめんよ！」

「ひやつちよつそこだめ・・・」

思うまま無事を確かめていると、やがてルイズ嬢がぴくぴくと痙攣を始める。

・・・思っ存分ルイズ嬢をもふり満足した俺はようやくとルイズ嬢を開放する。

「ぜーはー。心配してくれるのはうれしいけど・・・加減つてものを考えてよね」

バカめっこの程度で開放してもらえたことに感謝するがいい！

などと俺は勝者の余韻に浸っていた。

「ちよつとまでルイズ・・・。そいつ今っていうかさっきからしゃべっていなかったか？」

世界が凍る。

声のした方を見やると才人の頬が激しく引きつっていた。

訂正、まだ正常稼働してくれていなかったらしい。

（・・・しまった！？）

俺はなにをやっているのだろうか・・・？何を口走ってしまっているんだろうか・・・？

ルイズ嬢も目を見開いてこちらを見やる。

「あんた・・・しゃべれたの！？」

「……」

いまさら感も漂うが、どうしよう・・・。

とりあえず手を舐めて顔を（ーん）ゴシゴシ。

「にゃーん」

「なんだ猫か・・・って、意味が分かんないわよー！！！」

さすがのノリ突っ込みだ b

テンションの上がったルイズ嬢は俺の首根っこをひつつかむ。

そして、グワングワンと激しくシェイク。

「ぐああおー！」

訳：ちょ、酔う、酔っちゃうから、口の中から食道を通ってなにかがリバーsthroughしてしまうから！

「大体その鎧つばいのなによ！ちよくちよく出してた気がするけど！さあ！吐きなさい！すべて吐くのよ！！！」

だから、違うものが出ちゃうから！

やあ、やめっ。

その様子を気の毒に思ったのか才人が言う。

「おいルイズその辺にしておいたら・・・」「あんたは黙ってなさい」はい・・・」

才人！弱い！弱すぎるぞ！もっと頑張れ！俺のために！！

「ゴスペルさーんっ！」

おお、救世主か！？

才人は頼りにならん！君が俺の救い主となるのだ！

かむ、かむひあーだ！アリア嬢！

へるぷみーだ！俺を救助するのだ！

グワシッ

What？

「いつからしゃべれたんですか！？なんで黙ってたんですか！？」

おおっ、スピードアップ・・・。

すでにシェイクの速度は二倍どころではない。

二乗だねきつと。もう一人増えると三乗になるんだぜ？ヒャーハー？
いかん・・・すでに精神状態に異常をきたしだしている。

「や、ゴアゲエエエ！」

いかん口が！呂律がすでに回らない！？

これでは自首すらできない！

この世に神はいないのか！？

「ねえ、ルイズ、アリア放してあげたら？」

「ちよつと黙ってなさい！（いてください！）これはわたしたちの問題よ！（です！）」

「そ、そう・・・」

ちよとまで！キュルケ嬢さすがに俺も限界なんだ！

助けてくれ！？

顔をひきつらせて呆れてないでヘルプ！

「ごめんなさいね？」

そんなウインクとかいいから！救助を！お情けをつ！

あがきにあがいて救難信号を無様に周囲に送っていると、風が逆巻き俺を空中へと持ちあげる。

神はいたのか！？

俺を救助してくれた神（タバサ嬢）へと視線が集まる。

約二名ほど目が血走っていたが・・・。

「何すんのよ！」

「なにするんですか！」

そんな視線に動じることなく淡々とタバサ嬢は答える。

「あれじゃ、しゃべれない・・・」

「あっ！？」

おおいつ！気付いていなかったのか！？

二人へとシジト目を送る。

「と、当然気付いていたわよ！」

嘘つけ！

「あは、あははは」

笑ってごまかすんじゃない！

「はあー」

「しゃべる」

少し言葉が足りない気もするがまあ意味は通じた。

「まずは感謝を、助かったタバサ嬢・・・」

「おおっしゃべってるよ」

「マジックアイテムでも仕込んであるのかしら？」

「なんで今までお話ししてくれなかったんですか・・・？」

「隠し事なんてしているから悪いのよ！」

反省しろや！

そんな子に育てた覚えはないぞ！

「つづき」

「キユルケ嬢、俺のこれは断じて道具は使用していないよ」

魔法っぽい何かは使っているかも知れんが。

「ルイズ、あなたこの子と付き合い長いんでしょ。知らなかったの？」

「知らなかったわ……。ちょっと変だとは思っていたけれど……まさか言葉を話すなんて……」

「俺に出来ないことはっ……………（考え中）……………あまりない」

「微妙に自信なさげだ！」

うるさいわ、ザコが！

「だいたい貴様が情けないから俺が怒る羽目になってぼろが出てしまったんだろぅが！使い魔なら主人ぐらい完璧に守って見せる！」

「うわっやぶへび。でもさー俺一般人だし」

「ふっ、戯言を……貴様からはチート臭がする。具体的に言っとその手とかかなり怪しい」

「これが？でもたしかにこれが光ると体が軽くなるんだよねー」

そらみるチーターめ！

自分の事は当然棚上げである。

「結局あんた何なのよ？」

「それは……」

「……それは？」

ムダにためてみる。

そして結論。

「俺にも分からん！」

「ふざけてんじゃないわよ！くそっあたりなさい！」

「女の子がクソとかいってはいかんよ？ルイズ嬢」

はっはっは、そんなに拳をふりかぶっても当たらんよ！

「まあ、まちたまえ。ふざけているわけではないのだよ」

「どこがつよっ！」

会話中もよける&殴るこれ常識。

「ならばあれだ。君はなぜ人間なんだね？」

「そんなの、人間から生まれたからでっしょ！」

「ならば石から生まれた俺は石かね？」

「はあ？」

ふりかぶっていた拳がようやく止まる。

「どういことですか？」

「簡単に言つと俺という知的意思が目覚めたときは完全な鉱物だと思っていた。衝撃を受けて割れてみたら今の完全装甲版の俺だったわけだよ」

「つまり石が割れたらあんただったと？」

「そうだな」

「くだらない嘘ついてんじゃないわよ！」

「ふっ悲しいことであるが真実ではあるよ。まあ、信じたくない気持も分かるがね」

すべては語らない。

これ、うそをつくときの常とう手段。

「石から生まれるとかおまえどこの孫悟空だよ？」

「しいていうなら、地球産の魂がこのからだに宿ったといったところか？」

「はっ？地球！？どういことだよ！？」

「まあその辺りは後で説明してやるから今は放っておけ」

うるたえる才人や何のことか分からなくて頭上にクエスチョンマークを浮かべた連中はさておき。

「さて俺の事はわかったかね？まあ、便宜上、種族電脳獣で構わんよ」

「デンノウジユウ？」

「そう電脳獣」

「なぜ？」

「俺の知識上ではこの外見は電腦獣と呼ばれていた。ただそれだけの話さ。タバサ嬢」

「そう」

「まあ、まだ疑問は尽きないだろうが帰るのが遅れてしまうし、物は取り戻したのだから帰らんかね？」

「そうですね。わたしたちゴーレムやつつけて破壊の杖を取り戻したんでしたね」

「衝撃的なことがありすぎてわすれてたわ」

「いや、一番に受けたの君じゃないかルイズ嬢。忘れんでくれよ。」

「みなさん！ご無事ですか！」

「ミス・ロングビル！」

「そういえばゴーレムを操っていたはずのフーケは？」

「ゴスペルにビビって逃げちゃったんじゃない？」

「ふふっそうかもしれませんね」

フーケ・・・フーケねえ？

ロングビル女史が茂みからこちらに歩いてやってくる。

興味がなかったんだが・・・やつちゃいけないことをやったしねえ？

あと7,8メートルそんな距離まで近づいてきたとき俺は彼女に声をかけた。

『そこで止まってくれないかね？ロングビル女史？』

「えっ？」

ふむ、思念通話は声をかけるといふ表現はおかしかったかね？まあいいか。

にこやかな笑みを浮かべたまま、ロングビル女史は硬直する。

『この声は貴女以外には聞こえていないから、周りから見ると不自然な挙動に見えるよ？気をつけてくれ』

「……」

『さて、本題と行こうか・・・フーケよ』

「……！」

『何のことか分からないとでも言いたげだね？俺の鼻を舐めてはい

けないよ。こちらら獣であるよ?」

ニヤリと笑みを浮かべる。

『正直キミなんてどうでもよかったんだがね・・・うちの子を泣かせたものだからねえ?』

ロングビル女史の顔が引きつる。

「ミス?どうかしましたか?」

「いえ、すこし爆発の跡に驚いただけですよ」

「ああ、たしかにあれすごいですもんね」

『いい誤魔化し方だ。とりあえず逃げられるとは思わん事だ。まあ俺から逃げ切れる自信があるというのなら試してみてもかまわんがね?』

わずかに首を振り、逃げる気はないのだとこちらに伝えてくる。

『正しい判断だ。さて、俺は別に君をどこかにつきだそうとは考えていないよ。ただいくつかがお願いがあるだけだ。詳しい事は今夜話そう。お互いに人の目があつてはやりにくかるう?』

肯定の意を示す首肯が返ってきた。

『よろしい。ではまた今夜だ』

「ゴスペルさんさつきから黙ってミス・ロングビルを見えていますけどどうかしました?」

「なに、爆発に巻き込まなかったか心配だったただだよ」

「そんな心配するぐらいなら控えてくださいよ」

「それはできん相談だ。何せあの時はかなり怒っていたからな。くく」

「もうっ」

きやつきやと任務の成功に湧き上がるみんな。

いやはや、少年少女たちは人を疑うことを知らないようでちょっと・・・まぶしいなあ。

「さて帰るとしようか」

空は仰ぎてなお高い・・・。

戦いという名の暴虐（後書き）

ゴスペルさんマジばないです。

マジギレさせてしまいました。

そして若干無理やり感がある感じですがようやくしゃべれることが
ばれました。

二人ほど半狂乱になっている方がいたので周りにはあまり驚きません
でしたという感じです。

感想、評価等々待つてまーす。

帰還・・・そして事後処理（前書き）

ふう、やっと話もひと段落。

なにやら文字数が多くなりました。

それと評価いただいたり、感想いただいたりありがとうございます。
励みになります。はい。

帰還・・・そして事後処理

フーケ本人を捕まえることはできなかったが、破壊の杖という名のロケランの回収に成功したので凱旋である。

学院に到着するとまさか帰ってくると思っていなかったのか大慌てで学院長に連絡が飛び、ルイズ嬢が恭しく破壊の杖をオスマン氏に献上した。

部屋には、フーケ討伐隊とオスマン氏、コルベール教諭が顔を合わせていた。

「ふおっふおっふお、よくぞ破壊の杖をもちかえってくれた。諸君らにはその功績をたたえてシュヴァリエの叙勲申請をしておいた。追って沙汰があるじやろう。ミス・タバサはすでにシュヴァリエであるので名誉勲章の方をもうしこんでおいたよ」

「本当ですか！」

「やりましたねルイズさん！」

「ふふんっ当然よ！」

「……」

貴族讓カルテットが喜びに湧き上がる。

失礼、タバサ嬢は相変わらずであった。

「ほんとうじゃ。いいのじゃ、フーケを取り逃がしたとはいえ君たちはそれほどの事をしたのじゃから」

「あっ才人さんとゴスペルさんには・・・」

そして、アリア嬢が気付く。

「すまんのう。使い魔には褒美を取らせることができなくてのう」
「そんな！？」

なに気にせんでいいよ。

いらない物をもらっても仕方がないし。

「何もいらないますよ」

部屋が何とも言えない空気に包まれかける。

「ところでミス・ロングビル？お尻を触らせてくれたら君にも・・・」

周囲から冷たい視線がジジイに突き刺さる。

「冗談じゃ！きちんとボーナスを出す！・・・年寄りのわずかな楽しみなんじゃからいいじゃないかの・・・」

聞こえているぞジジイ。

こんなエロジジイはジジイで十分だ。

「オールドオスマン？」

「はっはっは、なんでもないのじゃよ。ミス・ロングビル？」
流す気だこのエロジジイ。

「ゴホンッ、諸君らの勇氣に感謝を。そして、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定通りに執り行う」

パーティが丁度いいな。

キュルケ嬢の顔がぱつと輝く。

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。パーティの準備に励んでほしい。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

4人は一礼するとドアへと向かった。

「タバサ、行くわよ！」

「（コクリ）」

まずキュルケ嬢たちが足早に部屋から立ち去る。

ルイズ嬢は、才人をちらつと見つめ立ち止まる。

「才人・・・」

「先に行つてていいよ」

「わかったわ」

そうしてルイズ嬢も去る。

「ゴスペルさん私たちも行きましょう」

「俺もこの爺さんに用がある。先に行つててくれ」

「そうですか、早く来てくださいね？」

「ああ、善処する」

そうして最後にアリア嬢も部屋から去る。

ジジイがなにやら呆けた顔をしている。

「どうした爺さん」

「ほおうっ！お主しゃべれたのか！」

「なんだ、動物がしゃべってはいけなと誰が決めた」

「いやそんなことは決まっておらんがのう・・・」

困り顔のジジイ、ジジイとかどうでもいい。

「ならばいいだろう。それより話だ」

ジジイは俺たちに向き直る。

「そうじゃったの。なにか、わしに聞きたいことがおありのようじやな」

俺たちはうなずく。

「言ってごらんなさい。できるだけ力になろう。君に爵位を授けることはできんがせめてものお礼じゃ」

そういつて少し考えるしぐさをした後。

「ちょっと待ってくれるかの？」

「ん、ああ。べつにかまわないですけど」

コルベール教諭とロングビル女史に退室を促した。

聞きたそうにしていた二人は地部しぐと部屋を出ていった。

『後で行くからどこか適当な人眼につかないところで待っていてくれ』

ロングビル女史が完全に部屋を出る前にそう言っておいた。

二人が出て行ったあと、才人は口を開く。

「あの「破壊の杖」は、俺が元いた世界の武器です」

「ふむ元いた世界とは？」

「俺はこつちの世界の人間じゃない」

「本当かね？」

「本当です。俺は、あのルイズの『召喚』で、こつちの世界に呼ばれたんです」

「なるほどそうじゃったか……」

ジジイが目を細める。

「ちなみに俺も元はおそらくだがサイトと同じ世界の出だ」

「おそらくとは？」

「才人の口走った話と俺の記憶には符合する箇所が多かった。こんなりをしていても元は人間だったしな」

「人間じゃっただと？」

「どういうことだ？」

「なに、元の世界で死んだとおもったらこのからだになっていた。ただそれだけの話さ」
やや遠くを見つめる。

「この世界の問題にあるかは知らんが、輪廻転生のようなものだろう……」

「輪廻転生とは？」

「なに簡単なことだ。死んだ人間はリセットされて次の身体に宿るといった概念の事だ。俺の場合はリセットがうまくいかなかったんだろう。」

「だからあの時あんなことをいつていたのか……」

まあな、これも未練と言うのかな？

誰にも教える必要のないことなのだから。

「なるほどのう……君は何なんじゃろうか？」

「それは俺も知りたいな。知らないということは気持ちが悪い。ましてや自分の事ともなればなおさらに……」

ふう、ため息をつく。

思えば俺も遠いところに来たものだ。

前の世界ではろくに外を歩けなかったことを考えればこの世界の方がよほど過ごしやすいが。

「まあ、俺の事は置いておいて『破壊の杖』あれを此処に持ち込んだのは誰なんだ？」

ジジイはため息をつく。

これ以上ふけたいのか。

「あれをわしにくれたのは、命の恩人じゃ」

「その人はどうしたんですか？そのひとは、俺と同じ世界の人間だ間違いない」

才人が問う。

「死んでしまった。今から、三十年も前の話じゃ」

「なんですって？」

「三十年前、森を散策していたわしは、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが、あの破壊の杖の持ち主じゃ。彼は、もう一本の『破壊の杖』で、ワイバーンを吹き飛ばし、ぱったりと倒れ追った。怪我をしていたのじゃ。わしは彼を学院に運び込み、手厚く看護した。しかしその甲斐なく……」

「死んだのか？」

ジジイはうなずいた。

「わしは彼が使った一本を彼の墓に埋め、もう一本を破壊の杖と名付け、宝物庫にしまいこんだ。恩人の形見としてな……」

懐かしんでいるのか遠くを見つめながら話を続ける。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返しておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きつと彼は、1君らと同じ世界から来たんじゃないかな」

「いったい誰が、こつちにその人を呼んだんですか？」

「それはわからん。どんな方法で彼がこつちの世界にやってきたのか、最後まで分からなかった」

「くそ！せつかく手掛かりを見つけたと思ったのに！」

「使えんジジイだ」

「なぬ！」

「ああ悪い。つい本音が」

「ぐつ、確かに役に立たなかったのは事実じゃが」

「ついでもう一つ聞いておこうか、才人のこの手のルーンはなんなんだ？」

「ああ、そうだ。そいつもききたかった。この文字が光るとなぜか武器を自在に使えるようになるんです。剣だけじゃなく、俺の世界の武器まで・・・手に取った時にそう感じました」

爺さんはなにやら悩んだ後、結局話すことにしたのか口を開いた。

「・・・これなら知っておるよ。ガンダールブの印じゃ。伝説の使い魔の印じゃよ」

「伝説の使い魔の印？」

ほう・・・伝説ねえ・・・。

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。『破壊の杖』が使えるそうなのもそのおかげじゃろう」

「・・・どうして、俺がその伝説の使い魔なんかに？」

「わからん」

きつぱりと言い切られる。

「わからんことばかりだ」

「まいったくだ。使えん」

「すまんの。ただ、お主がこっちの世界にやってきたこととそのガンダールブの印は、何か関係しているのかもしれない」

「はあ・・・」

期待していたんだろう、才人のためいきには落胆の色が濃かった。

「力になれんですまんの。ただ、これだけはいっておく。わしはお主の味方じゃ。ガンダールブよ」爺さんはそういうと、才人を抱きしめた。

いいシーンなんだが・・・俺の感性には合わなかった。

「よくぞ、恩人の杖を取り戻してくれた。あらためて礼を言っぞ」

「いえ・・・」

「おぬしがどういう理屈でこの世界にやってきたのか、わしなりに調べてみるつもりじゃ。でも・・・」

「でも、なんですか？」

「何も分からなくても恨まんでくれよ？なあに。こっちの世界も住

めば都じゃ。嫁さんだつて探してやる」

ため息をつき才人と俺は部屋を後にする。

「なあ」

部屋を出たら才人が声をかけてくる。

「なんだ？」

「おまえも俺の世界の出身なんだよな」

「そうだな。太陽系三番惑星、地球、日本出身ではあるな」

「そつか・・・」

「どうしたね？」

「いや一人じゃ、ないんだなつてさ」

話を聞いていた時よりややましな顔つきをしてサイトが言う。

「ふむ、死んでこちらに来た俺よりも、幾分かましな状況だろう。」

まあ頑張れ」

「あんがと」

「俺はちと、よるところがあるのでアリア嬢を見かけたらそう言うておいてくれないか？」

「ああ、いいよ」

「恩に着る。ではまたな」

尻尾を振り振り才人と別れる。

さて次の用事を終わらせに行くか。

「さて待たせたかね？」

「ああ、まったよ」

「それは、すまん。お互い実りがあるような会話を心がけようか」
現在、ロングビル女史の匂いを追ってやってきた校舎裏、皆パーテ
ィーで忙しいのか人気はない。

「ヘンなやつだね。それで、要求は？」

「その前に聞いておきたいのだが、お金は好きかね？」

「好きに決まってるじゃないか！嫌いなら泥棒なんてやってないよ
！」

「まあ、そうか。それで、使い道は？」

「なんだっていいだろう」

「まあ、その通りなんだが・・・ここは正直に白状してくれんかな
？」

「ちっ、仕方がないね。こっちには拒否権がないんだから」

「嘘はやめておいてくれよ。本当に。お互いのためにならん」

「孤児院に寄付してるのさ」

ほう、感心な理由だが・・・。

目を細める。

「それは本当か？」

「ふんっ！まあ、信じられなくても無理はないさ。嘘かもしれない
しね」

「まあ、信じよう」

「そうだろ・・・えっ？」

「どうかしたかね？」

「あんたバカかい？盗人の金の使い道が慈善事業だって信じるなんて！」

「いいではないか。仮に嘘でも損するのは私だけだ。それとも本当に嘘なのかね？」

怒りはすでに冷めきつている。

別に泥棒個人に思うところなぞないよ。

「あんた・・・筋金入りのバカだね・・・。本当だけどさ・・・」
むう、コソ泥にここまでバカにされるとは・・・。

「で、要求だが・・・わたしに雇われないかね？」

「はあ！？あんた頭にウジでもわいてんのかい！？」

「むっ、しっけいな。何が詰まっているかは分かんが虫は入っていないわ」

「いやそういう意味じゃなくてね・・・。はあ・・・雇うって何をさせる気なのさ」

「諜報と換金だな主な目的は」

「諜報は分かるけど・・・換金？」

「そう換金だ。いやなに、高そうなのはたくさん持っているんだが売するためのルートは持っていないくてね。その点キミは盗品が売りさばけるのだから、そのあたりおてのものだろう？」

「いや、まあ。たしかにそうだけど・・・物は？」

「貴金属類が主だな。ほれ」

ストレージから暇にあかせて作成したアクセサリやら金の延べ棒やらをどさどさつと無造作に落とす。

「ちよっ、なにやってるんだい！ああ、もったいない・・・」

「なに、まだたくさんある」

ぴくり、いい感じに耳が動いたぞフーケ？

「ま、まあ、やってやらないこともないけどね」

金の魔力に心動かされるフーケ・・・。

ふっ所詮人間なんてこんなものよ！

「おお、そうか。じゃあ、手始めに多少時間かかってもかまわんからそれを捌いといてくれ」

「はっ？ いやいやいや！」

「何か問題があつたかね？」

「あんた正気かい？ 持ち逃げするとか考えないのかい？」

「ん？ そんな恐ろしいこと実行できる人間はそうはいないだろう。

それを見たらわかると思うが捌くだけで大金が入ってくるんだぞ？

そんな楽な仕事放つて、俺につけ狙われる一生を送りたいなんて・・・

・どんな馬鹿だ？」

自分で言うのもなんだが、街とか村範囲ならよほど強いにおいの場所に隠れていない限り簡単に見つけてデストロイだぞ？

「ははは、そうだねっ！」

やろうと思つたな・・・。

「なんだつたら、手付金としてそれらはくれてやつてもかまわんが・・・

いやまて、金銭はないから売った時の一割くらいはもととしてくれたほうがいいな」

フーケ・・・ぽかーんである。

人類総ぽかん計画である。

「あんた・・・本気かい？」

「本気も本気だが？」

「いや、負けたよ。いいよ、雇われる」

「ふむ、そうかね。じゃあ、その取り分はさっき言ったので構わない。足りなくなつたら言うといい。今後は君の自己申告に合わせ報酬を渡すから、欲しい時にはいつてくれ。いわないと無賃でこき使うからな」

「ああ、わかつたよ・・・」

なにやら頭を抱えているが大丈夫だろうか・・・。

「そうだ。さっそく依頼なんだが・・・」

「なんだい・・・？」

もう、どんな無理難題言われても自分は驚かんといった、あきらめた顔をしているな。

「ガキを一人あずかってくれ」

「はあ！？」

重ねて驚愕。

「むっ理解できなかったかね？子供を一人あずかってくれ。この学院の君の部屋でも子供一匹くらいあずかれるだろう？」

「いや、そういう意味じゃなくて・・・なんでまた？」

「前に吸血鬼のガキを拾ったんだがすっかり忘れていてな。王都に家でも借りてやろうと思っていたんだが、目の届くところにいた方がいいだろう？」

「吸血鬼っ！？マジかい？」

「マジだ」

「本当の本当に？」

「本当の本当に」

「はあ・・・なんていうか、ねえ？」

「で、返答は？」

「危険はないんだろうね？」

「もちろん。俺が生きている限りあほなことはするまい」

「わかったよあずかる」

「ありがとう。では早速拾ってくるから待っていてくれ。最高速でいつてくる」

「あ、ああ・・・」

s i d e エルザ

誘拐されてから早くも一週間近くたった気がする・・・。

誘拐じゃないし、そんなに経ってない？

そんな気がするの！

だいたい、様子を見に来ると言っただけでちっとも来ないし・・・。

こんな森の中じゃすることがないー！

そりゃあ、助けてもらったことには感謝してるし、なんだかんだいっても近くの場所に家も作ってくれたけど・・・。

暇っ！

尋ねていこうにもメイジのごろごろいる学院の中とか怖すぎるもん。なんであんなところに住んでるのよ！

あーあー、出てっちゃんおうかなー。

バンッ

「おいこらエルザ！」

「ひゃい！出ていこうなんて考えてもいないよ！ほんとだよ！」

「なにいつている？」

「あつ、うつん。なんでもない」

あぶなかった。

こんなタイミングで来るなんて・・・。

やっぱり出ていけない方が無難だね。

悪さをしたら、「俺が滅ぼしちゃうぞ？」なんてにこやかに言っている奴だもん油断できない。

「おまえを学院で飼う方法ができたから行くぞ！」

「えっ、やだよ。怖い」

「気にするな。慣れる」

えっちょっとー！

首つかんで引っ張っていかないで！

こうしてわずかながら過ごしたわが家とのお別れを迎えたのでした。

s i d e o u t

「というわけで連れてきた」

「なにがというわけかは分からないけど、その子今にも死にそうじゃない？」

どれ、うん。

なにやらぴくぴくして、ゼーはーしているな。

「ひどいよ！もっと気を使ってよ！少女だよわたし！」

これだけ言えれば十分だろう。

「ふっ年齢不詳の分際で片腹痛いわ！」

「なんですってー！」

吸血鬼のこの外見年齢が実際いくつなんだか知らないが見たまんま
ということとはなかるう。

「実際いくつなんだね。うりうり」

「くっ」

くやしそうにうつむく。

やはり外見年齢とは一致しないのだな。
確信が持てた。

「で、その子が吸血鬼かい？」
ばっ！

エルザが凄まじい勢いでフーケを警戒する。

「やめなさい」

ガコンッ

「あぶしっ」

再び地面にダイブイン。
ぴくぴくしておる。

「さて、というわけでこれを頼む。さっきの会話で見た目通りの年齢でないと分かったと思うから気を使う必要はない。むしろ、俺の下僕みたいなものだからこき使ってかまわん」

「仕事でも？」

「もちろん」

「下僕じゃないよー！」

さすがだな吸血鬼、回復が早い。
とげしっ

頭に足を乗せ言う。

「何を言うか、生殺与奪を握られている上、保護されている生命体の分際で」

「どういう関係だい？」

「殺されかけてた。助けた。そのあとだいたい絶対服従？」

「服従してないみたいだけど？」

足元でジタバタしているエルザを指さすフーケ。

「まあ、俺を怒らせる事は絶対しないだろうからよろう。なあ？」
足を話して聞いてやる。

「ふんっ。こんなことばかりしてたら反逆しちゃうもん！」

「ほほう、やってみるか？」

にやり、邪悪な笑みで顔が歪む。

「すいませんでしたー！」

すかさず土下座。

「よろしい。というわけで頼んだ」

「頼む？なにを？」

「今日からその奴とおまえは一緒に住むのだ。この学院の中だぞ、うれしかろう」

「ええー。ここっとお姉ちゃんもいるんでしょう？」

「いるな。もうちょっかいだしてこんと思うが」

「こわいよー」

「まあ、守ってやるからしっかりしなさい」

「うっー。わかった」

「おねえちゃん？誰だい？」

「ああ、そういえば知らなかったな。こいつを殺そうとしてたタバサ嬢の事だ」

フーケの顔が固まる。

「それって私も狙われないかい？」

「大丈夫だ。一言いっておく」

「そうかい・・・」

「とりわけ、重要なのは設定だな。フーケよ、おまえこの子の叔母な」

「なっ叔母」

「よろしくね、おばちゃん」

「次にいったら殺すよ・・・」

「すかさずフーケが殺気立つ。」

「だがことわ・・・ごめんなさいでした」

こいつ調子に乗りやすいなやっぱり。

乗り続けようとしたが迫力に負けたか・・・。

「それで、野党に襲われて唯一逃げだせたのがこの子で身寄りはお前しかない設定で」

「わかったよ。他に何かあるかい？」

「ああ、まだあった」

エルザのえさの件についてフーケに説明し、血液パックをひと月分与えておく。

「もうないな。エルザ、設定を理解したうえで、ロングビル女史のいうことをよく聞くんぞ」

「ロングビルってその人？さっきまでフーケって言ってなかったっけ？」

「ああ、あだ名みたいなものだ。フーケの方で呼んではいけないかな？」

「わかった」

そのとき脳裏にひらめくものがあった。

「ん？ひよっとしてロングビルの方も偽名か？」

「そうだよ。本名も教えておいた方がいいかい」

「そうだな、頼む」

「わかった。マチルダ・オブ・サウスゴータだよ」

「マチルダだな。記憶した。これからよろしく頼む」

「ああ、こちらこそ」

「ところで、いまさらだがそちらが素かね？」

「そうだよ。気にいらないかい？」

「いや、素の方が好みだ。ではな、俺はパーティーの方にも顔を出さんといかんのぞな」

なにやらマチルダが驚いた顔をしたが、なんでだろう？

「えー、パーティーわたしも行きたい！」

「俺じゃなくてマチルダに頼むんだな。ここでのお前の生活の自由は彼女が握っている」

それだけいい捨て俺はその場を去った。

帰還・・・そして事後処理（後書き）

なんか、PV数とかが最近怖いです。
増え方がおかしいですもん。

感想評価等々いつもお待ちしてまーす。

二人の会話（前書き）

どうも！本免受かりました！

やった！点数教えてもらえたんですけどね何気に満点でした！

今日はちよつと短いですが、3人称で書いてみました。

見てやってください。

二人の会話

「ああ行っちゃった・・・」

ゴスペルが去って行った方をどことなくさびしげに見やる吸血鬼の少女。

一つため息をつくとその口が開かれる。

「おねいさんほんとにわたしと暮らすの？」

どこか怪訝な表情を浮かべるエルザ。

それに対しマチルダは苦笑を浮かべる。

「そうだね。そういうことになったみたいだね」

その言葉に不機嫌の色が強まる。

「なにそれ。どういう状況でそういうことになったのよ」

本当になんでこんなことになったのやらそう思いやや遠くを見つめる。

「そうだね。運が悪かったということじゃないかい？」

そうなった状況を思い浮かべさらに苦笑。

そう、いふなれば本当に運がなかった。

欲目を出さなければそもそも何事もなく終わっただろう。

また、ルイズを泣かせたりしなければあれはきつと何もせずに傍観していたことだろう。

・・・暇だったという理由でちょっかいをかけてくる可能性も無きにしも非ずだが。

まったく自分も運がない、そんなふう自嘲する。

「わたしもあんと大して変わらないさ。悪さをして、たまたま使えそうだったから見逃してもらえて厄介事を押しつけられた。そんな程度の話さ」

その言葉と表情に何かしら共感するものがあつたのかエルザの雰囲気は幾分柔らくなる。

「そう、おねえさんもまきこまれたってわけ・・・」

「そういうことになるんだろうね……。まあ、いまの扱いに文句はないけどね……」

すでに与えられた金品を売りさばくだけで孤児院を数十年は養えてしまっただろう。

文句のあるうはずもなかった。

「で、これから一緒に暮らすわけだけでも、なにか最初にいつておきたいこと話あるかい？」

エルザは顎に手を置き少々考えと言った。

「吸血鬼だけど、大丈夫なの？」

その表情からは不安が見て取れた。

迫害されるだけの能力を持つ吸血鬼に無条件に信じろというのは無理があるだろう。

「ふっ、一度死の危険に直面したらたいいの事はどうとも思わなくなるよ。それに、アタシにちょっかいを出して困るのはあんただろう？」

どこか小馬鹿にするようにマチルダが言う。

その言葉にむっとしながらも考える。

たしかにこの人間を傷つければ、一時の感情は満足するかもしれない。

その代わりに史上最悪を敵に回すことをわずかにも考えなければの話ではあるが。

その場面を想像し身ぶるいする。

「あなたもいつしよでしょ。せいぜいごきげんをとってね」

そんな内心をおくびにも出さず挑発的な言葉を返す。

「なに言ってるんだい。せいぜいこき使わせてもらうよ。そう許可をもらっているからね」

二人の間に火花が散る。

しばらくその状態が続くと、同時に顔を下へと向けため息をつく。顔を上げるとその表情を柔らかくさせて二人が言う。

「あれにかかったのが」

「運のつきだったってことで
言葉をつなぎ、握手をする。

「これからよろしく頼むよ」

「こちらこそ。よろしくね」

二人は一応の和解を得た。

こうして誰に知れることもなく、一流の泥棒と吸血鬼コンビが結成
されるのであった。

二人の会話（後書き）

評価、感想等々いつでもお待ちしておりますのでお願いします。

踊る獣（前書き）

文才がっ文才が欲しい。
そう思った・・・。

踊る獣

俺は今扉の前にいる。

この先はパーティー会場である。

・・・此処まで来ておいてなんだが、動物は入っていいのだろうか？普通に考えるとダメであるがなにぶん異世界。

何が普通かはいまだ計り知れないところがある。

まあ、アリア嬢に「早く来てくださいね」と言われていたのだから気にする必要はないのかも知れんが・・・。

などとうだうだ考えている間にも時間は過ぎていく・・・。

よしっ非正規の入り口から入るとしよう。

そう決めて窓の方へと回り込む。

目的地をしかと決め、勢いよく浮上する。

「うおっ！」

到着である。

というか才人よ何故にこんなところでたそがれている？

疑問を顔に浮かべつつ覗き込んでやる。

「なんだ・・・おまえかよ」

「なんだとはなんだ。ただ入口が入りづらかったからテラスから侵入することにしただけだ。まあ、驚かせたようで悪かったな」

「別に気にしなくてもいいと思うけどなあ」

「何を言う、ほれ見てみる」

「いいつつ入り口を指さす。

「なにかあるのか？」

「ちょうど今しがた人が入ってくるところだ。よく見ている」

言った通り誰かしかが会場へと入ってくる。

そして、司会と思しき人間が、入ってきた人間が誰かを紹介している。

「あれをみて、あそこからお前は入ってきたいのか？」

「ごめん、俺が悪かった」

自分がされたのを想像したのだろう。

頭をかきつつばつが悪そうに謝ってきた。

「気にしてない。それより何をこんなところでたそがれている？
— 応主賓だろう？」

「そうだ、そうだ。何たそがれていやがる。相棒」

立てかけてあつた剣がカタカタとしゃべる。

・・・いたのか。

「でもさあ、手掛かりは無くなっちまったし、俺活躍してないし」
なにやら雰囲気の良い才人。

うつとうしい。

「なんでえ、なんでえ。せつかくの祝いの席だったのに、辛気臭え
つらしゃがつて」

「手掛かりはまた探せばいい。活躍なんかしていなくとも・・・ほ
ら、キュルケ嬢を見てみるといい。とても偉そうだろう？胸を張つ
ていろ」

「たしかに・・・あれを見るとなあ」

視線の先には男を侍らせパーティーを非常に楽しんでいる一人の女
性。

彼女は才人以上に何もしていない。

「ようは考え方の問題だ。楽しまなければ損と言っただろう？」

「たしかにそうかもしれないな。よっしゃ、俺もちよつと楽しんで
くるよ」

そうしてサイトも会場へと旅立つていった・・・。

「デルFRINGガー置いて行かれたがいいのか？」

「おい相棒！俺も持つてけ！」

どうでもよくはなかったらしい。

その声を聞くと悪い悪いといいながら才人が戻ってきてデルFRING
ガーをつかむと今度こそ会場に戻っていった。

さて俺もいくとしよう。

アリア嬢はどこかな？

「ゴスペルさん！」

あたりをきよろきよろと見まわしていると、アリア嬢の方から食いついてきた。

手間が省けていい事だ。

俺の目の前に来るとくるりと一回転。

「えへへ、ちよつと恥ずかしいですけどどうですか？」

ドレスが翻り、いつもよりはややレディといった装いのアリア嬢。そのドレスは純白、それを彩る金の髪がまた映える。

少し周りに比べると地味に映るかもしれないが、ところどころに施された装飾は華美でなくそつと添えるような華やかさだが一流の物が作ったことをうかがわせる。

「よく似合っているのではないかな」

正直な感想を述べる。

「ありがとうございます」

顔を赤くしつつはにかむ。

すると周りの男どもがなにやらざわつきだす。

どうでもいいがこんな動物に褒められたぐらいで顔を赤くしていたら、人間相手だと大変なことにならないか？

まあ、気にする必要のないことだろう。

それにしても周りは度胸がない。

俺がひとにらみした程度で引き下がるとは・・・まったく、最近の若者と言う奴は。

「あの、どうかしましたか？」

ちよつと若者について考えるという最近思考回路がオヤジ臭くなってきたことに悲しみを覚えていたら、態度が不振だったのかアリア嬢に心配されてしまった。

「いやなんでもないよ。それよりも君は踊らなくていいのかい？」

俺の言葉に周りが色めき立つ。現金なやつらめ。

「ゴスペルさんが踊ってくれませんか？」

・・・まで。

今何と言った？

「すまん。アリア嬢、最近歳なのか耳の調子が悪いようだ。もう一度言ってもらえるかね？」

うむ、幻聴が聞こえるとは俺も歳だな。

「だから、わたしと踊ってください」

oh・・・幻聴ではなかったらしい。

無茶を仰る。

「四足歩行生物によもや踊りを申し込む人間がいたとは・・・」
さてどうしたものか・・・。

「だめ、ですか？」

くっそんな目で見るんじゃない！

おれはっおれはっ・・・。

「かまわんが、不格好になる故そこは容赦してほしい」

まあ、やってやれないこともなからう。

お気楽に考えることにした。

「はいっ」

やれやれそんなに喜ばんでも・・・。

いっちょ頑張りますか。

「では、いくとしようか。お手を拝借」

器用に二本足で立ちあがると、アリア嬢の手を取る。

やったことがなかったが、それなりの筋力があればこの体制を維持することはさほど苦でもないらしい。

そしてここに、世にも奇妙な踊る獣が誕生したのだった・・・。

知識と根性それに観察力すべてを総動員してステップを踏む。

腕の長さで稼働域から考えてアリア嬢ぐらいのサイズの人間と踊るのが現状としては限界だろうな。「おどろきました・・・本当に何でもできるんですね」

純粹に俺の見栄に驚いてくれるアリア嬢。

ふっ実は結構限界だけだな！

普段つかわなすぎる筋肉を使用しているのかだんだんとプルプルしそうな足に活を入れ誤魔化す。

「できないことはあまりないと言っただろう」

早く早く音楽よ切れてくれ！

「そのあまりないというところが気になりますね。何ができないんですか？」

それはもちろん。

「秘密だ」

にやり笑う。

そしてようやく曲が途切れこのシュールな光景に終わりを告げる。

アリア嬢はなにやら不満そうだが、よかろう。

これようやく前足をつける……。

「ちよつとアンタ！」

びくうつ

やつと一息、そんなときに話しかけられたので異常に驚いてしまった……不覚つ。

声の方を振り向けば

「なんだ、ルイズ嬢かね」

そうルイズ嬢である。

「なんだとはなによ。失礼しちゃうわね」

なにやらデジャブを感じるがまあいい。

「なにかようかね？」

「ふ、ふん。あんた踊れたのね。わたしが踊ってあげてもよくつてよ」

偉そうである。

さすがルイズ嬢。

「やれやれ、そこは踊ってくださいではないかね？」

「そうですねルイズさん素直になりましたよ」

実際俺は踊りたくない。

すでに足に来ている。

このからで踊るにはなかなか無理をしなければならぬのだ。
なのでできれば踊りたくない。

怒って流れてくれないかなあ……。

むりだろうなあ……人の夢とかいて儚いと読むのさ……俺、人じゃないがね。

「むー今日だけだからねっ」

唸ったあとそういい一つ咳払い。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんか。ジェントルマン」

おーけー、やはり回避不能なわけだね。

……いいだろう。

やってやるうじゃないか。

「よろこんで踊らせていただきますよう。レディ」

自分でやっておいてなんだが似あわない……。

というか締まらない。

まあ気にするだけ無駄なことである。

ホールの中央へと進みでてその手を取り踊りだす。

「アリア嬢にも言ったが、多少の不格好は大目に見てくれよ？」

「なに言ってるんよ。ムダに上手に踊っていたくせに」

華麗にステップを踏む四足歩行生物……うゝんシユールだ。

自分を第三者としてみるとここまで笑えてくるものも少ない。

思わず苦笑が漏れる。

「なに笑ってるんよ」

「なに、こうして踊ることなどないと思っていたからなこれだから人生分かん」

こんな変な体に生まれ変わったりもするしな。

「わたしも思ってたわよ。あんたならできそうだとは思ってしまっただけ」

なにやら悔しそうに顔をしかめる。

おいおい、俺は万能超人じゃあないぞ。

……今までの所業を思い出したらちよつと自分が信じられなくな

った。

「だいたいなんでしゃべれることを黙ってたのよ」

「深い意味はない。できそうだとは思ってはいたが実際やってみたのは最近であるし」

「あきれた。そんな簡単にしゃべれるようにはならないでしょう普通」

「そんなことを言われてもなあ……。むしろしゃべらなくても意思疎通できた君らのがすごいと思うのだが、特にカトレア嬢」

「ちいねえさまは、ちいねえさまだから」

「理由になっていないはずなのに納得できてしまうことが驚きだ」

「まったくこの姉妹は・・・というかヴァリエール家で普通の人間は侯爵しかいないのではないだろうか？」

母はいうに及ばず、その娘たちも推して知るべしであるし。

知らずまた苦笑が漏れる。

「笑ってんじやないわよ」

「すまん、すまん」

何となく言葉がなくなる。

しばらく会話もなく踊っているとルイズ嬢が俺から視線をそらし頬を染めると

「ありがとう」

感謝の言葉を述べてきた。

「さて、何のことかな？」

「ゴーレムにつぶされそうな時に助けてくれたでしょ。他にもいる・・・」

最後の方はゴニョゴニョしていて聞き取れなかったがあの件についての礼らしい。

「きにするな。当然のことをしたまでだ」

「当然？なんで」

「君は数少ない俺の友人であるからな」

自然、やさしい笑みが漏れる。

ああ、いつだっただろうか。

従姉が俺は身内に甘いと言っていたが、ルイズ嬢のためにキレたことを考えるにその言は当たっていたらしい。

家族を家族とも思っていないかったのであればかばかしいとそのときは笑い飛ばしておいたのだが。

返ってきたのは拳だったなあ・・・懐かしい。

やがて曲も終わり、どちらともなく手を放し互いに喧騒の中へと帰っていく。

「ゴスペルさん。素敵でしたよ」

「ありがとう」

このからで踊って素敵とか、もはや苦笑するしかない。

「そうだ何か飲み物で・・・」

突如気配を感じる。

「どうしたんですか？」

「悪いなアリア嬢、急用ができた。しばらく留守にする」

「またですかっ!」

「まただ」

「どうしてもいかないとだめですか？」

「どうしてもだ」

実はそこまでもないが。

「うっっ分かりました・・・」

「悪いな」

「でも!できるだけ早く帰って来てくださいね?」

「善処しよう」

「じゃあ、いつてらっしゃいます」

「ああ、いつてきます」

さて、とつとと追いかけないとな。

やれやれ、俺はだらけるのが好きなのだがね。

踊る獣（後書き）

評価、感想等々よければお願いしますです。

やつちまった(前書き)

どうも、こちらではお久しぶりです。

しばらくこちらにアクセスしていなかったので感想書いてもらった方いません。

これからちよつと書いてきます。

それから、とりあえずスランプってますが、迷走してみました。正直やつちまった感がぬぐえません。

やっちまった

「やあやあ、タバサ嬢。お出かけかね？」

例のごとくつけ回し、城から出てきたタバサ嬢に声をかける。

「あなたは・・・気がつかなかった」

警戒した様子で俺から距離を取ると杖を掲げ、戦闘準備を整えた。

「まあ、待ちたまえ。戦う意思はこちらには無いよ」

「あなたは私の任務の邪魔をした」

眉間にしわを寄せ、なおも戦闘態勢を取る。

「それはすまなかったな。俺は慈悲深くてな、幼女を殺すのは気がとがめたのだよ」

「うそ」

断言される。

その言葉を聞き俺はほくそ笑む。

「ほう・・・どうしてうそだと？」

「あなたは人間にそれほど価値を感じていないように感じた。あなたは必要ならだれでも殺す」

「なかなかいい線いつているとは思っよ。だがしかしそれは必要でなければ助けることもあるように聞こえるのだがどうかね？」

「それならなぜ？」

なぜ、なぜか・・・なんでだろうな？

同情したというのは微塵もないという前提の上で、なにがあの娘を助けた理由となったのだろうか？

ルイズ嬢やアリア嬢と接しているうちにロリコンとして目覚めた？ありそうだが別にそれが理由というわけでもないな。

それとも、昔の自分に重ねた？言うほど似ていないな却下。

ということはやはり一つしかないだろう。

「その方が面白そうだったからだ！」

「面白そう？」

「ふふふ、不思議そうだな？なんでもできるようになるとよほどの刺激がないとなかなか楽しいと感じられなくなってしまうのだよ」

「あなたはいつも楽しそう」

「それはそうだろう楽しくなるように努力しているからな。他人の不幸は蜜の味ってまさに正鵠を射てると思う程度には」

「趣味が悪い」

「いやいや、いい趣味だと思うぞ？それに俺に気にいられる事はトラブルに巻き込まれることと同義だが、反面気にいらなくなるまではありとあらゆる災厄からの保護がついてくるのだ。よほどの事がない限り最悪の事態にはならない素晴らしい特典だろう？」

「あなたによつて与えられる災難で、帳消し」

「これはまた手厳しい」

苦笑が漏れる。

「でも、すこし守ってもらっている子たちがうらやましい」

これは意外、意外だな。

正直言つてこの子には嫌われている気すらしていたからな。

ルイズ嬢たちをうらやましいとは、そんなにかまってほしかったとは・・・。

「それは違う。そしてその顔は失礼」

「心を読まないでほしいのだが」

「顔に出ているのが悪い」

「そうかそれは俺が悪いな」

すこしこまつたような苦笑を洩らしつつ答えるとやや不機嫌な気配が伝わってくる。

俺の顔、すなわち狼フェイスの顔色をうかがうとは・・・モンスターマスター適性が高いな。

モンスターマスターそれはあまたの獣たちを従え、その頂点に君臨し最も愛でられる存在。

あらゆる外敵からその身を自主的に守ってもらえる最強の称号。その道にはては無く、ただ、ただ、無帽の大地が広がるばかり、し

かし、その道を歩むものの傍らにはあまたの生き物たちがつき従っているという。

やるなタバサ嬢只者ではないと思っていたが・・・。

何というかオーラが違うな。

「それもきつと違う」

またしても読まれたか・・・これは本気で目指せるのではないか？まあ、最強のモンスターマスターはすでに決定しているが・・・その名をカトレアという俺の天敵が。

「それであなたはこうしてここに？」

いつの間にか戦闘態勢を解いたタバサ嬢が当然の疑問を呈してきた。「うむ、キミがここへ向かうとおもしろげなイベントが起こるので同行しようかと」

「帰って」

機嫌が急降下。きつぱりと断られる。

「いやそんな事を言わずに。いいではないか。な？」

「だめ」

取り付く島もないとはこのことか・・・。

だが俺はあきらめない！

「なにがそんなにダメなのかね？」

「今回の任務はカジノに行く事だから動物は連れていけないな、なん・・・だと・・・。

「そんなバカな・・・!？」

「馬鹿な事は何もない。おとなしく帰って。私は行くから」
背を向け、指笛を吹こうとする。

シルフィードを呼ぶつもりようだ。

「待て、待つがいい・・・」

腹の底から、唸るように声を出す。

「なに？私は忙しい」

「分かった。分かったよ・・・動物でなければいいのだな？」
「そう」

「ククク、神よそこまで俺が嫌いか！だがよかろう俺はそんなことでくじけはしない！！」

今回だけ！今回だけ！妥協するのは……。

「壊れた？」

タバサ嬢が怪訝な目で見てくるが今の俺にはいかほどの事もない。

「剋目せよ！」

[illegible]

禁断の秘儀、擬人化の術を見るがいい！！

「グオオオオオオオオ！！！」

俺を中心として雷が落ちる。

閃光の中、俺の身体が作り替わる。

手足が伸びる。顎が縮む。毛皮が別の何かへと変換されていく。

凄まじいエネルギーを使用し体が俺の物であつてない者へと作り替わる。

獣の咆哮が終わるとき、雷のあとには人影が残された。

「ククククッ、これでよかうタバサ嬢！」

その人影はいきなり笑いだすと手を広げ少女へと向き直る。

「誰？」

少女にしては珍しくあつけにとられていた。

「これは異なことを、この場にはキミと俺しかいなかっただろう？」

「あなたになれたの？」

「ああ……なれた。なれたともつ。なりたくはなかったがな！」

「うん、うん。」

「色々あるがそうだな。しがらみが増える。体が窮屈。なるのにす

さまざまエネルギーを使う。体が貧弱などなどだ」

「違う。どうしてなったの？」

驚きさめやらぬままタバサが尋ねる。

「君が動物ではダメだと言ったからだろう・・・」

ゴスペルはやるきをすべてなくしたかのようにへたり込む。orz

「大丈夫？」

「あまり大丈夫ではない。この状態は疲れる。なってしまえばそうでもないがなるまでに異常なまでに体力を使用する」

「どうしてそこまでついてこようとするの？」

「ここでやめたら何かに負けな気がしたからだ・・・」

疲れたように言う姿はたいへん様になっていたが言っている事はたいそうあほっぽかった。

「分かったついて来てもいい。ただ服はもっとちゃんとしたものにして」

今の彼の服装は生前好んで着ていたジーンズと白いシャツというラフな格好であった。

「そうか、高級なカジノか。行った事がないな。こんな感じでいいか？」

言うなり服を変換し赤いシャツのスーツ姿へと変化する。

「それでいい」

「ふんっ。ではさっさと行くぞシルフィードを呼べ」

タバサの指笛が響き渡り一路目的地に向かうのであった。

やっちまった（後書き）

正直、擬人化をしたくはなかったのです。
でもカジノって人間じゃないと入れないじゃないですか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1177q/>

ゼロの使い魔～ある獣の話～

2011年8月16日00時57分発行